九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文革期の文学

岩佐, 昌暲
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/1654311

出版情報：言語文化叢書. 7, 2003-03-20. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

言語文化叢書

Ⅶ

文革期の文学

岩佐昌暲 著

九州大学大学院言語文化研究院

文革期の文学　目　次

はじめに

理　論

第1章　文革期文学とは何か——その辞書的定義——／3

第2章　中国における文革期文学の研究状況／11

第3章　「十七年」から文革期文学へ——第一次《詩刊》の場合／21

作品論

第4章　文革期文学の一面——高紅十と『理想の歌』を中心に／33

第5章　紅衛兵運動の挽歌をうたう詩人——郭路生の詩について／53

資　料

第6章　文革期上海における文学出版物の執筆者たち／79

第7章　『朝霞』『朝霞叢刊』の執筆者たち／103

第8章　『解放軍文芸』執筆者索引／133

はじめに

この小さな書物は中国で展開されたプロレタリア文化大革命（１９６６年～７６年）時期の文学についての論文や資料を集めたものである。私は１９７３年中国に渡り、７８年までの五年間を北京で過ごした。丁度、「文革期文学」が私のいう「展開期」に入った時期である。政治運動としての文革は７６年の“四人組”逮捕で終結するが、中国社会の文革的体質は８０年代初期までは続いた（これは私の実感である）。北京での私の五年間は、文革や、生活のすみずみまで浸透してくる＜文革的なもの＞と向き合い、体験しつづける時間だった。日本に帰ってから私は長い間自分自身の文革体験を何とか論理化したいと考えつづけていた。それは結局挫折したままだが、その願望が「文革期文学研究」というテーマに取り組む潜在的な動機になっている。

小著は、いくつかの理論的な問題を扱った「理論」編、文革期文学に関連して書いた旧い論文から成る「作品論」、主に文革期上海の文学活動についての「資料」編の３編によって構成されている。「文革期文学」という大きなテーマに比して、実際に扱っている範囲が狭すぎ、心中忸怩たる思いが強い。だが、ひとまず形になった今、これでようやく本格的な文革期文学研究がはじめられるという気持ちになっている。そういう点でこれは、私自身の今後の研究の出発点になるものである。

「言語文化研究叢書」といった名前の研究書をシリーズで出したい、というのはずっと以前から私も希望していたことだった。それがいよいよ実現することになって、嬉しい。そのシリーズの第一期に、私のものも加えてもらうことができて、よけい嬉しい。この叢書の出版によって先生方の研究費が影響を受けることになる。先生方に心からお礼を申し上げたい。今後、中々書物にはしにくい資料性の強い研究成果などがこの叢書で発表されるようになり、そのようにしてこの叢書が続いていくことを希望している。

小著の資料部分は、平成９～１１年度文部省科学研究費補助金によって行われた「文革期文学」の基礎的研究」（課題番号 09610459）の研究成果の一部である。原稿入力には、九州大学大学院比較社会文化研究科博士課程の院生だった小崎太一、堀野このみ、同比較社会文化学府博士課程の宮下尚子、間ふさ子らの諸君の助力を得た。編集作業は宮下尚子さんから随分助けてもらった。記してお礼を申し上げる。また城島印刷の二本木一哉さんには原稿の遅れ、訂正などで本当にご迷惑をおかけした。そのお詫びとお礼も申しておきたい。

２００３年３月

岩　佐　昌　暲

理　論

第１章

文革期文学とは何か*

―その辞書的定義―

1. 文革期文学の定義と名称

定義　ここで「文革期文学」というのは１９６６年－７６年の期間、つまり文革期に出現した文学（作品、批評、文学理論）を指す。従って文革後に書かれた、文革に取材した文学はここに含めない（これは次項に述べるような理由で「文革を描いた文学」とよぶべきであろう）。

名称　中国では八十年代にはこの時期の文学を「文革文学」という風な特定の名称で呼ぶことはなかった。「文革期は文学空白の時期だ」という認識からすれば、それはそれで筋の通った話である。管見の範囲では最初に「文革文学」という語を用いたのは潘凱雄・賀紹俊[1]である。この論文は「ゆるやかな基準」で考えれば文革期にも文学活動があったではないか、と主張し、文学のあったことを認め、それを研究すべきだと呼びかけたものだが、本文では「“文革”文学」のように記している。九十年代になって文革期の文学活動への研究が進むにつれ「“文革”文学」という呼称は次第に使用されるようになる。この時期の文学研究で現在最も多産な研究者である王堯[2]は「“文革文学”」という語を用い始めているし、これまた現在最も影響力のある当代文学研究者の洪子誠[3]も「“文革文学”」という用語を使っている。だが、文革期に書かれた詩歌を「“文革”詩歌」あるいは「文革詩歌」と呼ぶ研究者がある一方、文革を描いた小説を「“文革”小説」と呼ぶ研究者もいる。前者は李新宇[4]、後者は許子東[5]である。こうした言い方を拡大していくと、「文革文学」には、'literature about Cultural revolution' と'literature during Cultural revolution'の両方が含まれることになりかねない。「文革期文学」（文革时期文学）という用語を提唱したい。

---

* 本章は、「文革期文学」のホームページ（http://www.geocities.jp/goukoujp/）に掲載した同題名の短文を基にしている。収録するに当たってかなりの書き換えをおこない、また注を補った。

２．二種類の文学

文革期の文学には、A．体制に公認された出版物の形で流布した文学（これをとりあえず「公然文学」とよぶことにする）と、B．回覧や手抄、手紙などの形で個人やごく狭いグループ間で流布した非公然の文学[6]（これを楊健に倣って「地下文学」ということにする[7]）の二種類があった。この二種の文学は基本的に交わることがなかったので、これを別々に考察するほかない[8]。以下は主として公然文学についての定義である。

３．時期区分

文革期の公然文学にもその発展消長の歴史があった[9]。私見によればそれを大きく３期に区分することができる。

a．混沌期（１９６６－６９年）

文革開始（１９６６年５月）から中共第九回全国大会開催（６９年）までの期間である。これまで文壇を構成していた中国文芸連合界－中国作家協会－（所属作家）－地方組織－（所属作家）に対する批判・攻撃が激しくなり、文芸界の枠組みが崩壊[10]、文芸雑誌も停刊になった[11]文学的空白期を経て、６７年江青が文芸界の指導権を握り、京劇の改作など演劇界を中心に「文革期文芸」の確立を目指し始めた時期[12]。文芸界の人士への批判・攻撃は続き、文芸関係の出版物不在のままで、小説も文芸批評もほとんど見られない。文学活動としては、文革前１７年の映画、小説への大衆的批判が主要なもので、創作としては『人民日報』や紅衛兵新聞などに散発的に発表される毛沢東と革命への忠誠を歌った詩文・快板など民間芸能の形式を利用した実権派批判・毛沢東語録の歌唱化や、紅衛兵による文革宣伝の歌舞が主なものだった。

b．始動期（７０－７１年）

出版機構による文学関係の書籍が出版され始める。多くは「工人業余写作組」のような匿名創作集団による報告文学であるが[13]、仇学宝のような個人の詩集もある[14]。この時期に解体された文芸界の再建の模索が進んだと考えられる。「工人業余写作組」の作品集や文革前に活躍した作家の作品の出版などはその表れである。いわば文革期文学というものが形をとり始める、始動期・萠芽期といっていい。

c．展開期（７２－７６年）

当時の党中央宣伝部門が、停刊していた雑誌を復刊させ、労農兵出身の作家（いわゆる「業余作家」）を養成し、既成作家を部分的に解放したりして、新興労農兵勢力による文壇構築をはかった時期である。これらはすべて１９７２年から顕在化する。７２年は文芸講話発表３０周年に当たり、これを機に文学活動が正式に再開されたわけである[15]。文芸雑誌も全国誌を除いて復刊する。三結合の執筆グループ[16]による報告文学、７２年の講話３０周年記念徴文活動のなかで発掘された青年作家たちの短編集の出版など全国的に文芸界再建の動きが進む。文革の中心地だった上海を例にとると、朝霞叢書、

雑誌『朝霞』の刊行などを経て、だいたい７４年には新しい文学者集団が形成されたと考えられ、これは全国的にも同じ状況だったとみていいのではないか。新しい文学界の主体となったのは知識青年出身の労働者・農民・兵士、いわゆる業余作家たちである。

この７２年から７６年までが文革期文学の展開期である。この期間は中国共産党内部で文革推進派と文革批判派の激しい権力闘争が、「批林批孔」「水滸伝批判」「走資派批判」「鄧小平批判」などの名を冠した大衆的政治運動として展開されていた時期であり、文学も基本的にはこの運動＝権力闘争に文革推進派の立場で参画した。だがそれも７６年１０月「四人組」の逮捕によって唐突に終焉する。

しかし７６年１０月以後も政治体制や社会心理は依然文革期の継続であり、新しい文学精神が「新時期文学」として定着するのは八十年代に入ってからである。

４．文学的特徴

次に文革期公然文学の特徴を考えてみる。＜文革期文学＞は一口に言えば「政治優先、変形されたロマンチシズム、意識的に採用された粗野で非知性的な文学表現、性表現の忌避」などの特徴を強くもつ文学である。特徴を以下に列挙する。

ａ．創作動機と主題の政治性（文革の政治過程のそれぞれの時期の政治目標に奉仕するという明確な創作目的、ないし動機がある）[17]。

ｂ．作者の非私性・無名性・匿名性（作者は個人の私的な感情や思想を表現せず、仮想された集団［我々］の思想や感情を述べている。また作品自身がしばしば本名ではなく集団［例えば三結合写作小組等］の名で発表される）[18]。

ｃ．言語・文体の戦闘性・煽動性（〈敵〉の暴露と打倒、〈味方〉の士気高揚にむけて読者の感情を組織しようとする言語・文体の意図的多用）[19]。

ｄ．感性の偏向（感傷、哀感、繊細な［暗い・しっとりした］感性の徹底的排除、逆に豪快、粗放、殺伐、激越な［暴力的な、ドライな］感性＝変形されたロマンチシズムの重視[20]）。

ｅ．＜性＞的表現や性を連想させる表現の忌避・抹殺[21]。

５．方法／理論

文革期公然文学の方法・理論は次のように規定できる。文革理念実現を目指し、文革体制擁護の［文芸講話を基調とし、三十年代文学と建国後十七年の文学の否定の上に打ち立てられた、『紀要』を根拠とする政治突出の］文学理論・創作方法[22]。

一方、地下文学はおおづかみに言って、［リアリズム或いはモダニズムを基調とした］「反」或いは非文革体制の文学であるが、意識された理論・創作方法があったわけでなはい。

６．文学史的位置づけ

文革期を文学的空白と見るべきではない。あるいは、地下文学には見るべきものがあったが公然文学はダメだったというふうに両者を切り離して評価すれば足るというものでもない。それは公然文学と地下文学の二つがともに行われていた、当代文学史の中の一つの確たる文学時期である。それをまず確認しなければならない[23]。公然文学は十七年の文学の一種の必然的帰結であり、地下文学は八十年代モダニズム文学の先駆である。ただこの時期の文学（１９７６年の天安門詩歌運動も含めて）を、新時期文学に対してどう位置づけるかは簡単には結論の出せない問題（将来の課題）である[24]。

[注]

1 凱雄・賀紹俊「文革文学：一段値得重新研究的文学史」（『鍾山』1989年2期）

2 例えば、王尭「関於“文革文学”的釈義与研究」（『文芸理論与研究』1999年5期）など。

3 洪子誠『中国当代文学史』北京大学出版社、1999年8月

4 李新宇「“文革”詩歌略論」（『斉魯学刊』1993年3期）。ただし本文では引用符号をはずして「文革詩歌」のように書いている。

5 許子東『為了忘却的集体記憶：解読５０篇文革小説』三聯書店、2000年4月

6 文革期に非公然の文学活動のあったことは経験的に知られている事実だった。文革後出版された小説、張揚「第二次握手」、北島「波動」、靳凡「公開的情書」などのほかに、郭路生の詩、後の《今天》のメンバーたちによる詩作品など、それらはその文学的質や読み手に与える衝撃力においてはるかに公然文学を超えていた

7 楊健の『文化大革命中的地下文学』朝華出版社、1993年1月、はそうした作品やその作者たちを掘り起こして「地下文学」として提示した。こうして、文革期の文学活動を全面的に考察する路が開けた。この点で楊健の功績は大きい。洪子誠前掲書は「“文革”期間の文学には、二つの異なる部分が存在していた。一つは公開の出版物に発表されていた作品で、もう一つは秘密あるいは半秘密状態で書かれ、伝播した作品である。後者について、“地下文学”の概念を使っている研究者もいる」と書いている。

8 「公然文学」と「地下文学」の大きな区別は「公然文学」が文革の政治的枠組み（「文化を含む上部構造諸領域の革命」）の中で機能し、あるいは機能することをめざしたのに対し、「地下文学」は本質的にその枠組みをはずれた地点で書かれたという点であろう。

9 これまでの文学史で文革期文学の時期区分を試みたものとして陳思和『中国当代文学史教程』をあげることができる。陳によれば、江青らはまず「政治的異分子勢力と文化思想上の伝統的要素を全て除き去ったのち」「“プロレタリア階級文芸の新紀元”の開始を宣言」し、「自らの政治闘争に奉仕する高度に政治化・概念化された文芸創作」を展開した。その結果文革の全期間に公に出版された文学が総体として荒廃、枯渇、畸形な発展をとげるという局面をつくりだした」。この文学にも段階的変化の過程があるが「こういう高度に政治化された文学の変化は、当然政治的事件と密接な関係がある」と述べ、以下のような時期区分（要旨）をおこなっている。

第一段階（1966年5月～1971年9月）

文革開始時期の1966年5月の中共中央政治局拡大会議、と8月の八期十一中全会とし、それ以後1971年9月林彪事件発生まで。この時期は“革命模範劇”が最も提唱され、影響力のあった文芸作品。国家のコントロール下にある映像・活字メディアを通じて強制的に人民に浸透し、少なくとも表面的には文革期の精神的象徴となっていた。この過程で“三突出”“三結合”等のモデル

化された文学創作観念が形成された。

第二段階（ 1971年９月～ 1974年12月）

指導層の変動（林彪グループの失脚）にともない、国家の文芸政策にも変化が生まれた。停刊していた文芸雑誌の復刊、文芸書の出版が一定の限度内で再開された。文芸創作も開始されたが、同時に文芸をめぐる政治闘争も激しくなった（ 陳は 1973 年の湘劇「園丁之歌」批判を例としてあげる）。

第三段階（ 1975年１月～1976年10月）

75年１月全国人民代表大会で周恩来が「四つの現代化」を提起、周恩来・鄧小平体制による文革の行き過ぎに対する調整政策が実行された。この結果江青ら極左集団と周恩来・鄧小平らの政治闘争が激化した。この闘争は芸領域で際立ち、江青らによる映画「創業」、「海霞」に対する批判をめぐって顕在化した。毛沢東は「創業」を支持、これより文芸政策の調整が始まった。７６年には『人民文学』など全国的文芸誌が復刊した。またこの前後から葉辛、張抗抗、王小鷹、賈平凹ら知識青年らが個人の名で文芸誌に作品を発表し始めた。これらの作品は文革後の知識青年文学の発端だった。“四人組”はこの時期「走資派と闘争する」映画、演劇を作り政治的浮揚を図ろうとした。こうした衝突と闘争は76年の天安門事件で頂点に達した。

以上は「公然文学」の時期区分だが、楊健は「地下文学運動」について時期区分を試みている。公然文学としての文革期文学を考える上でも参考になると思うので摘録しておく。

「1966年５月～1969年４月。これは文革の全面的動乱、内戦の時期である。1969年４月党の“九全大会”（中国共産党第九回全国代表大会）が開かれ、新たな党と国家の指導部が形成された。その後紅衛兵組織は解散させられ、強制的に農村に下放させられた。幹部は“五・七”幹部学校に追われた。党中央の指導層のいわゆる“右派集団”（教師を含む）は北京を放逐され、三線に下放された。社会秩序は安定期に入った。これより前の二年間の文革運動期には、主として紅衛兵文芸活動が“地下文学”の主導だった。

1969年４月～1971年“９．13事件”（林彪事件）。全国は「闘争 - 批判 - 改革」の時期に入った。最初の地下サロンが生まれ、極左路線、文化独裁政治と対峙した。この時期の最大の収穫は一群の批判的リアリズムの作品が生まれたことである。

1971年から1974年。文化大革命の谷間の時期である。周恩来の指導する“林彪批判整風”運動のなかで、極左路線は抑制され、全人民的に目に見えない思想解放運動が始まった。この特定の環境下で“地下サロン”が活発化し、1983 年には絶頂期に入った。最後にはモダニズムの色彩を帯びた一群の詩作が生まれるにいたった。

1974年～1976年10月。“四人組”と真っ向から闘った時期。江青集団と“地下文学”が全面的な包囲討伐と反撃戦をおこなった。陳毅同志の逝去を巡って、全人民の中に『陳毅詩詞』や追悼詩詞が手書きで伝わったり、一部の“地下サロン”の主宰者や地下文学の作者が逮捕され入獄したりした。闘争は丙辰清明（1976年４月）の天安門広場の詩歌運動の中で最高潮に達し、この後一群の力作が出現した。」（楊健、前掲書「引言」）

10　1966年２月江青が上海で秘密裏に「部隊文芸工作座談会」を開いた。その記録（「林彪同志委託江青同志召開的部隊文芸工作座談会紀要」、通称『紀要』には「建国以来の文芸界では（中略）毛主席の思想と対立する反党・反社会主義の黒い糸がわれわれに独裁をふるっていた」と書かれていた。この文言はその後文革の全期間にわたって文革前の文芸界に関わりのあった人々を打倒する根拠となった。66年４月以後文芸界に対する批判は部分的に始まっていたが、それが全国的に拡大するのは、６月１日『人民日報社説』が文芸界・思想界の「すべての妖怪・変化を一掃せよ」と呼びかけ、ついで６月22日「文化部徹底干浄搞掉反党反社会主義反毛沢東思想的黒線闘争的請

示報告」が中央文件として全国に伝達されて以降のことのようである。この文書は文芸界には「長くて太く、深くて黒い反毛沢東思想の黒い路線が存在している」それを徹底的に掘り出し一掃せよと述べていた。こうして中央から地方に至る文芸界（具体的には文学・芸術家連合界、作家協会とその地方組織、それに所属する党幹部、作家、詩人、出版関係者など、要するに既成の「文壇」そのもの）は批判を受けて66年中には崩壊するのである。

11 1966年7月から全国の文芸出版物は『解放軍文芸』（これも68年10月でいったん停刊、72年4月に復刊する）を除いて発行停止となる。

12 江青（1914－1991）が大きな力を握るようになるのは66年2月部隊文芸工作座談会を開き、その記録たる「紀要」が中央文件として伝達されたのがきっかけである。5月には中央文革指導小組の第1副組長となり文芸面での文革の指導者として頻繁に大衆集会に出席し講話を行うようになる。この間彼女はマスメディアを通じて「京劇革命」の推進者として自己の権威を高め、反対者を打倒することで権力を掌握していった。69年4月中共第9回全国代表大会では中央政治局委員になり、73年の中共第10回大会以後“四人組”を結成して文革の極左の側面を代表するようになる。

13 例えば、上海海港工人業余写作組『海港紅旗』上海出版革命組、1970年9月、九四二四工人写作組『鉄水奔騰』上海人民出版社、71年6月、上海中華造船廠工人創作組『船台春潮』上海人民出版社、71年9月など。

14 仇学宝『金訓華之歌』上海市出版革命組、1970年8月。

15 王尧は1972年2月に『牛洋田』と『虹南作戦史』という二冊の長編小説が出版されたことを文革期文学の重要な事件とみなしている（「“文革文学”紀事」『当代作家評論』2000年4期）。

16 三結合とは指導部（党）・大衆・専門家（作家）の結合による創作ということで、指導部が作品を導く思想を出し、大衆が作品の素材となる生活を提供し、作家が創作技術を提供して、その結合によって創作するというわけである。

17 このことは、文革が上部構造におけるブルジョアジーの権力を一掃してプロレタリア階級の権力を打ちたて、「プロレタリア階級自身の新思想、新文化、新風俗、新習慣によって社会全体の精神的様相をあらため」「社会主義の経済的土台に適応しない（文化の諸領域を含む）すべての上部構造を改革して、社会主義制度の強化と発展に役立てる」（「中国共産党中央のプロレタリア文化大革命についての決定」1966年8月）ことを目指すものであり、公然文学がその一翼を担うもの（文革政治の道具）として出発した以上当然のことである。こういう高度の政治性こそ文革期公然文学の最大の特徴である。

18 この問題についてはいろいろな面から考える必要がありそうである。例えば、文革期の「破私立公」のスローガンが示すような社会思想、個人の名利思想を否定する倫理観などの問題。また批判を受けている一部の作家が運動の必要上作品を書くが実名では発表できない、そういう人物が労農兵の創作グループを指導していて名前が出せない、などの事情。また、1972年以後は今度は個人の名による創作の発表が行われるようになるが、それはなぜなのか、その理由なども併せて考える必要があろう。

19 これは詩歌に特に目立つ現象であるが、十七年の詩歌が情感のさまざまな陰影を切り捨て、優美で細やかな表現を排除していった歴史の必然的な結果であると思う。また、文革期の文学が、その出自から高度な政治的性格を賦与されていたことが関係していよう。

20 これは文革期公然文学が目指したのが闘いの中から誕生する「プロレタリアートの英雄像」を作り上げることだったこと、文革期の「知識人」が「改造」の対象であったため、その属性たる知識人的な感情や思考、言語表現などがマイナスの価値しかもたなくなったことなどが関係しているだろう。

21 文革期文学では<性>はもちろん、恋愛感情あるいは夫婦間の愛情さえ描写が忌避された。この原因は文革期文学にのみあるわけではなく、中国共産党のこの問題についての封建的体質、中国社会の封建的（儒教的）な土壌、十七年の文学が<性>に繋がる文学表現を抑圧してきたことと無関係ではない。

[22] 具体的には「毛主席の革命路線を断固として貫徹実行し、労農兵、社会主義、プロレタリアートの政治に服務するという方向を堅持する」「革命的リアリズムと革命的ロマンチシズム結合という創作方法を運用して、プロレタリアートの英雄像を作り上げるよう努め、現在の偉大な時代の姿を積極的に反映させ、毛主席の革命路線の勝利を熱情をこめて歌い上げる」（『朝霞』「徴稿啓示」1993年創刊号）という宣言に文革期文学の指導理念が端的に示されている。具体的な創作方法としては「三突出」がある。これは于会泳「議文芸舞台永遠成為宣伝毛沢東思想的陣地」（『文匯報』1968年5月23日）で初めて示され、「あらゆる人物の中で正面人物を突出（＝際立たせる）させる。正面人物の中では主要な英雄人物を突出させる。主要人物の中では最も主要な人物を突出させる」というもの。江青が指導したとされる「模範劇」の創作経験を文革期の文学・芸術全体に適用するよう求めたものだった。

[23] 陳思和（『中国当代文学史教程』）は当代文学の分期を「第一段階：1949年～1978年」「第二段階：1978年～1989年」「第三段階：９０年代」の三つに区分している。これは一般の文学史が文革期を一つの文学時期として立てているのと異なっている。その理由について彼は「もし当時公に発表された文学創作に依拠すれば、このような（文革期を一段階とする）時期区分も結構である。だが（中略）“文革”前も“文革”中も中国大陸の当代文学にはずっと潜在的創作が存在していた。政治運動の中で執筆の権利を奪われた知識分子たちも自分の理想や感情世界を書きつづけていた。（中略）これらの文章は当時の環境下では発表不可能だったが、やはり珍重するに足る文学の声を留めている。それらは“文革”前に書かれたものも“文革”中の創作も、実は実質的な区別がない。そのような（創作の質・内容という）角度から文学史を考察するなら、“文革”前と“文革”中の文学はやはり一つの比較的大きな文学史の段階と見なすことができる」と述べている（「緒論：中国当代文学的源流、分期和発展概況」）。

[24] 文革期文学を当代文学史全体のなかでどう位置付けるかは難しい問題である。文革によって建国後十七年間蓄積されてきた当代文学の成果が、組織、人材、作品のすべてにわたって壊滅的な打撃を受けたのは事実である。これまでの文革期文学史は、多くその観点から文革期の文学を十七年と切り離してとらえ、これを“四人組”が政治権力を握るために使った装置＝「陰謀文学」として批判してきた。だが、本当にそうだったのだろうか。文革期文学は孤立した異常な文学現象ではなく、むしろ十七年の必然的な帰結とみるべきではないのか。例えば、私は文革前の『詩刊』を調査してそのことを強く実感した（本書「十七年から文革期文学へ」参照）。

また、文革期の様々な文学現象を「文学」の視点から再検討すると文革期文学には違った評価が下されるのでないか、とも思う。例えば文革期文学の確立という点で全国の模範たろうとしたと思われる上海では、労農兵、知識青年の業余作家（詩人）の積極的な育成がはかられたこと、しかしその最も活躍した作者たちは結局文革後文学の世界に再登場することはなかった＊、というふうなことを「文学」の問題としてどう考えたらいいか、というような問題である。

＊これについては彼らが「基本的にもともと芸術創作の準備も衝動もないのに、指導者の指示のままに慌しく創作に取り組み、「〇〇批判」の原稿を書くのと同じように執筆任務を完成した」からで、多くはそれが終わればもう書くこともなくなる、「仮に自分で書こうとしても、組織的な支援なしでは、投稿しても多くはうまく行かない」と述べる者もいる。（姚楠「文化大革命時期小説的創作隊伍」『佳木斯師専学報』1997年第4号）

あるいはこの時期の「地下文学」をどう考えるか、というのも興味深い問題である。例えば、河北省白洋淀に下放した知識青年たちの文学活動や、北京の文学青年たちの「サロン」活動が、新時期文学のモダニズム詩の源流となったことは言うまでもないし、新時期文学の多くの作家が文革をかいくぐった人々であるのも事実である。が、だからといって文革期文学と新時期文学を

簡単に結びつけるわけにはいかないだろう＊。こうしたことを考えると文革期文学に、そう簡単に評価をくだすことはできないのである。

＊ただ最近になって王尭にこの問題を論じた論文「矛盾重重的“過渡状態”——関于新時期文学“源頭”考察之一」（『当代作家評論』2000年第5期）、「思想歴程的転換与主流話語的生産——関于“文革文学”的一個側面研究」（『当代作家評論』2001年第4期）があるのを知った。この論文の観点は多くの点で私の問題意識と重なるものがあるように思うが、詳しい紹介・検討は今後に待ちたい。（2003年3月20日補記）

第２章

中国における文革期文学の研究状況*

１．文革期文学研究の空白

文革期に生まれた文学を、仮に＜文革期文学＞と言うとして、そういう文学を当代文学史研究の上でまともに取り上げるようになったのは、ここ数年のことである。少なくとも八十年代末まで中国では文革期の文学は研究対象としてほとんど問題にならなかったと断言していい[(1)]。

その理由は第一にこの時期の文学が「政治の道具」として機能しており、文学としての玩味に耐えるものでも、文学研究の対象になりうるものでもなかったこと、またその結果この時期が文学的に低調、暗黒の「文学空白」の時代だと意識されていたということ、そのために研究者が研究意欲をそそられなかったということが挙げられよう。

第二に、文革期に対して中国共産党が明確な否定を行っており、この時期に生まれた文学作品を研究することが学術的に積極的な意味をもつとは考えられなかったことが挙げられよう。それは文学研究者の仕事ではなく、政治学や社会学者の扱うことだと考えられたのである。とりわけ文革期に嫌悪の記憶しかない多くの研究者には、それを扱うこと自体が対象的不毛であるという気持ちも強かったであろう。また政治に敏感な研究者には、それを扱うことはわざわざ火傷をするようなものだという心理が働いたということもあろう。かくして文革期文学に対する研究は八十年代には（私の知る限り）ほとんど手つかずの状態であった。

日本においても状況は同じようであった。文革期の出来事を素材にした新時期文学の作品が論じられることはあっても、文革期に生み出された文学をまともに取り上げた研究はほとんどなかったと言っていいのではないか。そしてこの状況は、私の知見の範囲では、今も変わらない[(2)]。

だが中国では九十年代に入って、文革期文学の研究が徐々に盛んになり始めている。

---

* 小稿は、『紅衛兵詩選』（中国現当代文学研究資料叢刊３）、中国書店、2001年３月刊、の中国語解題（「文革文学的研究状況及本資料集」）として書いたものの日本語原稿がもとになっている。日本語版ははじめ溝口喜郎氏の文革期文学のホームページ（http://www.geocties.jp/goukou/）に掲載したが、今回小著に収録するに際し、注の中に資料をいくつか補った。（2003年３月20日）

小稿はその研究文献の紹介を兼ねた文革期文学研究状況のスケッチである。ただ、この文献紹介は手許にある2000年までの資料によったもので、網羅的なものではなく、大体のもので、あるいはもっと重要な文献をもらしている可能性のあることをあらかじめお断りしておきたい。

2．文革期文学研究の開始

中国で最初に文革期の文学を研究すべきだと主張したのは、私の知る限りでは、南京の文芸雑誌『鍾山』である。1989年この雑誌はその第2期に特集を組み、

＊潘凱雄・賀紹俊「文革文学：一段値得重新研究的文学史」

＊木弓「“文革”的文学精神－民衆理想的輝煌勝利」

＊王干「重読《東方紅》和《大海航行　舵手》」

の三編の論文を掲載した。潘・賀論文は「文革文学」の存在を認め、文革文学がその文学精神において文革前十七年の共和国文学の継承であるという観点を打ち出し、文革文学に対する科学的研究を呼び掛けるものだった。だがおそらくこの年起こった天安門事件の影響であろう、この呼び掛けに応じる研究は現れなかった。

3．楊健『文化大革命中的地下文学』をめぐって

文革期文学の研究が盛んになるのは九十年代に入ってからである。そのきっかけになったのが1993年1月の、

＊楊健『文化大革命中的地下文学』朝華出版社、1993年1月

という書物の出版であった。この書物は文革初期、紅衛兵運動の中で生まれた文学から76年4月周恩来追悼のいわゆる天安門献歌運動までの非公然の文学作品（活動）を、種々の資料を駆使して紹介したもので、文学的空白期とされた文革期に、一種の＜対抗文化＞として存在した非公然文学（楊健はこれを「地下文学」と呼ぶ）の姿を浮き彫りにしたものであった。

この書物の与えた衝撃は大きく、多くの文芸雑誌がこれを取り上げたほか、おそらく本書に触発されて文革期文学を対象とする研究論文も発表された。例えば、同年の『文芸争鳴』2月号は「研究文革文学」という特集を組み、

＊謝　冕「誤解的“空白”」

＊曹文軒「死亡与存活」

＊趙毅衡「自由与文学」

等の書評的随筆を掲載したほか、『飛天』や『斉魯学刊』などが、

＊劉　火「自卑与自大共演的悲劇――論“文革”的文学精神」『斉魯学刊』1993年3期

＊李新宇「“文革”詩歌略論」『飛天』1993年9月号

を掲載したのなどはその一例である。劉火論文は89年『鍾山』に発表された木弓「“文革”的文学精神－民衆理想的輝煌勝利」への批判である。こうした事実は文革期文学の

研究が政策的に長期間禁じられていたこと、にも関わらずこの研究主題に対する関心が潜在的に強く存在していたことを示すものだろう。

４．近年の文革期文学研究論文

その後近年になって文革期文学への関心はいよいよ高まりつつあるようにみえ、管見に及んだ論文だけでも以下のようなものがある。

＊丁茂遠「論郭沫若“文革”期間詩詞創作」『理論与創作』1997 年 2 月号
＊姚　楠「“文化大革命”時期小説的創作隊伍」『佳木斯師専学報』1997 年 4　期
＊楊漢雲「紅衛兵詩歌概説」『衡陽師専学報』1998 年 1 期
＊胡有清「論文革批評模式」『文芸争鳴』1998 年 1 期
＊孫　蘭「从錯位到悪化――評“文革”文学的流変」『文芸評論』1999 年 1 期
＊孫　蘭「芸術品格与芸術功能的消退――再論十年“文革”文学審美価値体系」『文芸評論』1999 年 2 期
＊孫　蘭「反思・啓示・超越――三論十年“文革”文学審美価値体系」『文芸評論』1999 年 3 期
＊高有鵬「関于“文革”時期的民間文学問題」『河南大学学報』1999 年 2 期
＊王　尭「“文革”主流意識形態話語与浩然創作的演変」『蘇州大学学報』1999 年 3 期
＊王　尭「関于“文革文学”的釈義与研究」『文芸理論与研究』1999 年 5 期
＊代　迅「从浩然現象看“文革”文学研究模式」『文芸評論』2000 年 1 期
＊孫　蘭「運動文学与運動群集――从両次奇特的農民詩歌運動談起」『文芸評論』2000 年 5 期
＊王家平「“文革”時期流放者詩歌簡論」『文芸争鳴』2000 年 6 期

５．王尭の論文「関于“文革文学”的釈義与研究」について

このうち我々が文革期文学を研究しようとするさい最も参考になると思われるのが王尭の論文「関于“文革文学”的釈義与研究」である。王尭は蘇州大学教授で九十年代初期から文革期文学研究に関心を抱いていた研究者である。上の論文は 1981 年 6 月十一期六中全会の「関于建国以来党的若干歴史問題的決議」の文革に対する評価（「“文化大革命”はいかなる意味でも革命とか社会的進歩ではなく、また、そうしたものではありえなかった」「“文化大革命”は、指導者が誤って引き起こし、それが反革命集団に利用されて、党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱である」）を「“文革文学”研究の政治的原則」として書かれている。

彼は“文革文学”の主要な内容の一部を形成することになる京劇革命などの“文芸革命”が、本質的に権力闘争であった文革の発端として位置付けられた歴史的事実（例えば《人民日報》《紅旗》共同元旦社説「把無産階級文化大革命進行到底」1967 年 1 月 1 日）に基づき、次のように主張する。

“文革文学”はこのような歴史的コンテキストの中で生まれ、発展した。文学と政治の関係が最も基本的な問題となり、かつ根本的に“文革文学”の性質と容貌、即ち”文革文学”全体が「文化の領域を含む上部構造においてプロレタリア階級がブルジョア階級に対し全面的独裁を行う」その組成部分であるという性質を規定したのだ。「二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争」に関する「基本路線」が“文革文学”の出発点となった。「プロレタリア階級の英雄の典型的形象を作り上げる」ことが社会主義文芸の「根本任務」であり、「三突出」が「創作の原則」であった。「革命的ロマンティシズムと革命的リアリズムの結合」が創作方法だった。「革命模範劇」の言説の覇権が“文革文学”の全過程を貫いていた。これらが“文革文学”を構成する基本的要素である。従って“文革文学”の主流はイデオロギー的言説なのである。王堯の意見には他にも聞くべき点が少なくない(3)。

6．回想記など

以上は論文だが、文革期文学研究の重要な資料になるものに回想記の類がある。文革期に執筆を禁じられていた作家や詩人たちが、文革後発表した回想記は、零細な記事も含めれば相当な分量になるだろう。私の目にしたものも少なくないが、ここではそうした文章の研究資料としての重要性を指摘するにとどめ、以下はそれらのうち史料たることを目的に書かれた文章若干を紹介する。

文革期文学は王堯の指摘するように文革という政治闘争の重要な組成部分であった。従って文革期の政治指導部（中央文革小組）の文芸界への関与の実態を知ることが、大切な研究事項となる。その点で役立つのが黎之が『新文学史料』に連載している「回憶与思考」である。黎之は解放後中共中央宣伝部の文芸部門で働いてきた人物である。「回憶与思考」は彼自身が関わってきた建国後の文芸界の出来事の詳細な記録であるだけに第１級の資料価値がある。そのうち文革期文学に関係するものに以下のようなものがある。

＊黎　之「回憶与思考――所謂新旧“閻王殿”（上）（下）」『新文学史料』1999年１期－2期

＊黎　之「回憶与思考――又一次“假批判”・到衛戍区見周揚、林默涵」『新文学史料』2000年１期

＊黎　之「回憶与思考――批《水滸》批宋江」『新文学史料』2000年４期

彼の1999年以前の文章は、李輝主編の滄桑文叢の一冊として出版されている。

＊黎　之『文壇風雲録』河南人民出版社、1998年12月

文革期文学の理論としては「紀要」が重要である。その成立背景を述べた資料に次のものがある。筆者の劉志堅は座談会の参加者の一人である。

＊劉志堅「部隊文芸工作座談会紀要産生前後」「中共党史資料」第30輯、中共党史資料出版社、1989年６月

＊伍　宇「中国作協“文革”親歴記」『伝記文学』1994年９期

また周明主編の下記の書物は文革期に迫害を受けた人々や文革期の出来事の回想や記

録を集めたものである。

＊周　明主編『歴史在這里沈思――1966～1976年紀実』（1～3巻）華夏出版社、1986年8月

＊周　明主編『歴史在這里沈思――1966～1976年紀実』（4～6巻）北岳文芸出版社、1989年4月

７．単行本・年表

文革期の文学を主題とした単行本では、楊健の前掲書の他に、『百年中国文学総系」の１冊として出された、

＊楊鼎川『１９６７　狂乱的文学年代』山東教育出版社、1998年5月

がある。同書には付録に「年表（1966－75）」を付す。文革期文学の年表はいいものがなく、私なども作成中だが、最近王堯の『“文革文学”紀事及主要著作年表』の一部が発表された。文革期文学に関連する重要事項について資料を付して解説しており、役に立つ。

＊王　堯「“文革文学”紀事」『当代作家評論』2000年4期

８．洪子誠『中国当代文学史』と陳思和主編『中国当代文学史教程』

またこれらの論文のほかに近年出版された「当代文学史」では、文革期文学を「１０年のファッショ的文化独裁の社会主義文芸事業への大破壊」（高等学校文科教材『中国当代文学史初稿（下）』人民文学出版社、1981年7月）、「社会主義文芸事業に対する空前の大破壊」「権力奪取のための陰謀文芸」（例えば吉林省五院校『中国当代文学史』吉林人民出版社、1984年12月）といった従来の政治的断罪と違う視点からとらえようとするものが現れており、中国大陸の学術研究がようやく政治から自立して展開されるようになった（同時にその程度に中国社会が成熟した）ことを予想させる。そのような書物として次の二冊がある。

＊洪子誠『中国当代文学史』北京大学出版社、1999年8月

＊陳思和主編『中国当代文学史教程』復旦大学出版社、1999年9月

洪子誠の書物は一個人の手になる文学史としては建国後最初のものだと思うが、その第１３章（走向“文革文学”）から第１４章（重新構造経典）、第15章（分裂的文学世界）までの三章約五十頁を文革期文学の記述に充てている。文革期の文学を「公開出版物」に発表された文学と「秘密、あるいは半ば秘密状態で書かれ、伝わっていった作品」とから成るとし、そのいずれにも客観的な視点で目配りしている。なお、本書については『文学評論』2000年第1期に「中国当代文学史写作筆談」として銭理群、陳美蘭、曹文軒、程光煒の書評がある。

陳思和の『中国当代文学史教程』は第9章（“文化大革命”時期的文学）三十頁足らずの紙幅に冷静・客観的な筆致で文革期文学の記述をまとめている。その章立て（第1節「“文化大革命”対文学的催残及“文革”期間的地下文学活動」、第2節「老作家的

秘密創作：《緣緣堂続筆》」、第3節「圧抑中的生命噴発与現代智慧：《半棵樹》与《神的変形》」、第4節「年軽一代的覚醒：《這是四点零八分的北京》与《波動》」）からも窺えるように、陳思和は文革期に発表の場を奪われながら、それでも密かに作品を書きつづけた文学者の文学意識と作品（潜在写作）の掘り起こしに重きをおいているように見える。

9．潜在写作

陳思和がその「潜在写作」を専門に扱った論文に以下のものがある。

＊陳思和「試論当代文学史（1949—1976）的“潜在写作”」『文学評論』1996年6期

彼はまた張新穎らとともに『当代作家評論』（瀋陽）を舞台に「潜在写作」を発掘した論文を次々と紹介・掲載している。そうした論文に以下のものがある。

＊劉志栄「如水的旅程——論1958～1976年唐堤的“潜在写作”」『当代作家評論』1999年3期

＊王観泉「聶紺弩在詩中隠現」『当代作家評論』2000年1期

＊李　輝「在“知識流放”中吟唱——孫越生和他的“干校詩”」『当代作家評論』2000年1期

＊何言宏「厳酷年代的精神証詞——“文革”時期牛漢的詩歌写作」『当代作家評論』2000年2期

＊黄発有「月黒灯弥皎　風狂草自香——当代視野中的豊子愷」『当代文学評論』2000年3期

＊張清華「黒夜深処的火光：六七十年代地下詩歌的啓蒙主題」『当代作家評論』2000年3期

楊漢雲の次の論文も問題意識としては同じ系譜に入るものであろう。

＊楊漢雲「牛漢“文革詩”的美学特徴」『益陽師専学報』1998年3期

陳思和本については『当代作家評論』1999年6期が陳思和と張新穎の対談「関于中国当代文学史的幾個問題」や呉義勤、施戦軍の書評を掲載する。

また、「潜在写作」の文学資料としての確実性に疑問を抱く立場から、陳思和を批判する李揚のような見解があることも付け加えておきたい。

＊李　揚「当代文学史写作：原則、方法与可能性——从陳思和主編的《中国当代文学史教程》説起」『文学評論』2000年3期

10．詩歌関係の資料

それを「潜在写作」（陳思和）と呼ぶか「地下文学」（楊健）と呼ぶか、或いは「秘密、あるいは半ば秘密状態で書かれた創作」（洪子誠）と言うかは別にして、文革期文学には当時の政治指導部公認のメディアに発表された作品（とりあえず「公然文学」と呼ぶ）のほかに、もう一種類、発表手段をもたずに書き綴られた作品（「地下文学」と

いうことにする）が存在したことは事実である。

楊健『文化大革命中的地下文学』の重要な功績は、「地下文学」の存在を公然と承認した点にある。文革期文学の研究対象が、もし「公然文学」だけであったら、文革期文学研究という研究領域に足を踏み入れようという研究者は現在よりずっと少なかっただろう。ともあれ、ここ数年来文革期文学の研究がある活気を呈しているように見えるとしたら、それは非公然文学の掘り起こしと研究が進みつつあるからであろう。そのような作業はとりわけ詩歌の領域に著しい。中でも八十年代朦朧詩の源流となった下放知識青年の詩歌創作については、当事者による作品の発掘、郭路生を代表とする当時の「地下詩人」たちの個人詩集の刊行、回想記など資料の整理が行われている。またそうした資料に基づいて上の張清華「黒夜深処的火光：六七十年代地下詩歌的啓蒙主題」のような論文も書かれるようになっている。ここでは個人の作品集以外の関係資料を示しておきたい。

＊郝海彦主編『中国知青詩抄』中国文学出版社、1998年２月

＊張明・廖亦武『沈淪的聖殿――中国２０世紀７０年代地下詩歌遺照――』新疆青少年出版社、1999年４月

上の二つは文革期文学の重要な内容を構成する下放知識青年の文学資料である。文革期の下放知識青年の文学活動は楊健前掲書に紹介があるほか、近年知識青年の上山下郷運動の研究が進展することで掘り起こしが行なわれている。例えば、ほんの一例にすぎないが、

＊火木『光栄与夢想　中国知識青年二十五年史』成都出版社、1992年８月

＊杜鴻林『風潮蕩落　中国知識青年上山下郷運動史』海天出版社、1993年３月

＊劉小萌・定宣荘・史衛民・何嵐『中国青知事典』四川人民出版社、1995年９月

には農山村に定住した知識青年たちの文学資料を含む。また昨年楊健による知識青年文学の概観が出版された。

＊楊健『（中国知青民間備忘文本）中国知青文学史』中国工人出版社、2002年１月

本書は1953年から2000年までを「20世紀50年代初至60年代中期的知青文学」「文革時期的紅衛兵文学」「“文革”時期的知青文学」「新時期的知青文学」「後新時期的知青文学」の五巻11章に分けて記述している。「知識青年文学」という鉱脈を発掘し、その視点から当代文学史を読み直そうと企図しているようにみえる。本書には公然文学だけでなく膨大な数の「地下文学」の資料が紹介されており、文革期文学研究の必読文献である。

以上文献紹介を兼ねながら、中国大陸におけるここ１０年間の文革期文学研究の状況を概観してきた。以上の簡単なスケッチからでも中国大陸の学界で徐々に文革期の文学を客観的な研究対象にしようという動きが進みつつあることが見て取れる。

[注]

(1) 1976年10月“四人組”逮捕後から始批判運動が始まり、その中で膨大な批判論文が書かれる。これらはもちろん政治批判の一環として展開されたのであり、研究などではない。しかし研究の視

点から見れば、その中には、文革期文学に関わる「事実」を暴露したものも少なくない。当時のやや粗暴とも言える批判の政治的言説のフィルターを取り払い、「事実」だけを選り出すことができれば、これらの批判論文には有用な研究資料が含まれていると言える。例えば、王国栄・徐家麒「也読『朝霞』一年」『文芸論叢第1集』上海人民出版社、1977年9月や、がそれで、これらは“四人組”批判運動のさなかに書かれ、冷静客観的な評論とは言いがたいが、文革期文学をリードした文芸誌『朝霞』掲載の小説の背景となった文革後期の事件との関係を知る資料としては（その真実性自体検証の必要はあるが）有用である。

(2) ただし文革進行中の七十年代にはその文学はしばしば考察の対象になった。例えば、私も執筆者の一人だった朝日新聞社編『造反する芸術』(朝日市民教室<日本と中国>第3巻)、朝日新聞社、1972年1月、は文革初期の文学・芸術活動への深い共感をもって書かれた文革期文学の概説書だった。このほかにも、阿頼耶順宏「浩然の小説」；吉田富夫「『虹南作戦史』論」（ともに『入矢教授・小川教授退休記念中国文学語学論集』筑摩書房、1974年、に所収）、前田利昭「文芸を通してみる「文革」の諸相」（「中国研究」1975年10月号、後重沢・高橋編『中国社会主義の問題点』日中出版社、1977年5月に所収）など少なからぬ論文が書かれた。前田論文は72年以後数年間の中国文学界の動向の詳細な考察で、私は78年五年ぶりに中国から帰国して初めてこういう研究のあったことを知り、感心して読んだ記憶がある。また研究だけでなく作品の翻訳・紹介も少なくなかった。ただ、こうした日本における同時代の研究や作品翻訳についての本格的な紹介と検討は今後の課題としたい。

文革への批判的立場に立つ言論で、是非挙げておきたいものに丸山昇の諸論文がある。文革終結後『「文革」の軌跡と中国研究』新日本出版社、1981年2月、に収められた論考は、文革期文学を主題とするものではなく、一人のマルクス主義者として、文学を含む文革総体への同時代的批評である。

共感するにせよ、批判するにせよ、文革中に文革期文学に向けられていた関心は、文革の終息とともに急激に薄らぎ、研究者の（そして恐らく読者もそうであったろうが）関心は、ごく当然のことながら新たに生まれ次々に話題作を生み出していく「新時期文学」に転じていった。

文革後、仮に「文革と文学」という問題に関心をもつ向きがあったとしても、その関心は文革期文学にではなく、文革期に迫害された作家たちの状況などに向けられていたように思う。例えば、竹内実・村田茂編『ひとびとの墓碑銘――文革犠牲者の追悼と中国文芸界のある状況』霞山会、1983年2月、がその例であって、それは副題が示すように文革中に死んだ著名な文学者たちの追悼文の翻訳とその解説である。このほか私の主題との関連で話題となった事件に、文革終結のきっかけとなった1976年4月の天安門事件がある。この事件はその一要素として周恩来追悼の献詩運動とそれへの弾圧という側面をもち、文革期文学史では「天安門詩歌運動」として知られる。従って文革期文学の範疇に入る出来事なのだが、そういう視点からこれを取り上げた研究はない。その紹介を行なった、中邦仁『［ドキュメント］天安門事件』文藝春秋、1979年4月、藤本幸三編訳『中国が四人組を捨てた日―ドキュメント「天安門詩文集」』徳間書店、1979年8月、など、いずれもその観点を欠く。

八十年代に入ってかつての知識青年たちが新時期文学の主役として登場するようになると、それとの関連で文革期が振り返られることがあった。しかし、文革期の文学をまともに扱おうとす

る者は長い間見当たらなかった。九十年代後半に入って文革期の地下文学について関心をもつ若い研究者が出始めている。またごく少数公然文学の研究に向う研究者も現れており、例えば、文革期文学のホームページを開いている溝口喜郎はその数少ない一人である。また、最近の基礎資料に坂田完治・溝口喜郎訳『文革期文学概説（1966 年～1976 年の文学）』（中国現当代文学研究資料叢刊４）九州大学大学院言語文化研究院、2001 年３月刊、がある。これは山東大学等２２院校編写組『中国当代文学史』第３巻、福建人民出版社、1985 年９月刊、の第３編「一九六六～一九七六的文学」の全訳で、中国の文革期文学評価の本邦における最初の紹介である。手前味噌になるが、これは九大比較社会文化学府の私の演習参加者による共同作業によるものである。

このほか中国留学生を中心に「日中現当代文学の創作や翻訳や研究を目的とする」関西の文学グループ《藍・BULUE》が積極的にこの時期の文学（特に「地下文学」）の紹介を行っていることも書き留めておきたい。

(3) 本稿執筆後に判明した王堯の論文に以下のものがある。A は「十七年」と新時期の過渡として文革期文学を考察した論文、B は博士学位論文の要旨である。

＊A：「矛盾重重的“過渡状態”――関于新時期文学“源頭”考察之一」『当代作家評論』2000 年第５期

＊B：「思想歴程的転換与主流話語的生産――関于“文革文学”的一個側面研究」当代作家評論』2001 年第４期）

第３章

「十七年」から文革期文学へ*

――第一次《詩刊》の場合――

1

私はここ十年来文革期の文学について考えてきたが、その過程で文革前のいわゆる「十七年の文学」（中華人民共和国建国の１９４９年から文革開始の１９６６年までの十七年間の文学）について、文革期文学との関連で跡付ける必要を感じるようになった。文革は十七年に対する反逆として発動されたはずであったが、実は十七年の必然的帰結だったのではないかということを、文革期の文学（とりわけ詩作品）を読む中で実感的に確信しつつあったからである。

十七年の文学の中心となる「全面的な社会主義建設開始の時期」は、反右派闘争、大躍進とその挫折、食糧危機、社会主義教育運動等々、政治運動が次々に展開された、中国人民にとって曲折坎軻の時代であった。この時期、中国現代詩の唯一の専門誌だったのが《詩刊》であった。《詩刊》は１９５７年１月中国作家協会の機関雑誌として北京で創刊された。６４年１１月突如停刊し、文革後にまた復刊して現在に至っている。初めは月刊だったが、６１年１月双月刊、つまり隔月刊に変り、６３年７月から再び月刊となった。そして前述のように文革開始（１９６６年）前夜の６４年１１月、第８０期(１１－１２月合併号)を以て停刊、約十年の休刊を経て、文革最末期の１９７６年１月復刊した。今年（２００３年）１月は創刊から数えて四十六年、復刊から二十四年目になる。

《詩刊》の歴史は約十年の休刊期をはさんで二期に分けられよう。それを仮に第一次、第二次というとすれば、小稿の扱う範囲は第一次《詩刊》の時期である。小稿は直接には第一次《詩刊》を資料に１９５７年から６４年までの中国現代詩の詩史的素描を試みるが、その目的は「十七年の文学」が文革期文学を準備した母胎であったことを、中国現代詩の分野で示すところにある。

---

* 本章は、岩佐昌暲編『詩刊（1957－1964）総目録・著訳者名索引』（中国現当代文学研究資料叢刊１）、中国書店、1997年11月刊、の中国語解題（「一隻被折断了翅膀的鳥――《《詩刊》》的七年」）の日本語版で、日本語としての発表はこれが最初である。解題という性格もあり、かなり粗っぽい概観だが、文革期文学が突然出現したわけではないことを示すために収録した。発表にあたり部分的な削除をおこなった。

2

《詩刊》は１９５７年に創刊号を出すが、創刊のきっかけになったのは前年に開かれた作家協会理事会での徐遲（1914－）の発言だった。徐遲は三十年代から詩を書き始めた詩人で翻訳者でもあるが、当時は《人民中国》と《人民日報》の特約記者としてルポルタージュの執筆に従っていた。徐遲は次のように語っている。

「１９５６年は素晴らしい年だったと言わなければなりません。この年、中国作家協会が拡大理事会を開き、私まで拡大されて招集されました。もともと、席上私は報告文学について話すつもりでしたが、どういうわけか急にぱっと閃くものがあって、詩について喋り始めたのです。中国のような広大な詩の国に実に一冊の詩の専門雑誌もない、作家協会が詩誌を創刊されるよう提案する、と。話がまだ終わらないうちに、会場割れんばかりの拍手でした。どうやら、みんなの思っていたことを代わりに話したようです。／その会議からしばらくたって、関係方面が《詩刊》創刊を認可してくれました。私も作家協会に転任、《詩刊》副編集長を仰せつかり、慌ただしくやり始めたというわけです」（謝克強「同志仍需努力――著名詩人徐遲訪談録」《詩刊》1997年１月号）

ここで徐遲が１９５６年を「素晴らしい年だった」と回想するのは、この年５月に「百花斉放、百家争鳴」政策が提起され、文芸界に新しい風が吹き始めたことを指している。「百花（さまざまな文学芸術の花を）斉放（咲き競わせよう）」というスローガンの下で、この年、数多くの文芸雑誌創刊が企画された。《詩刊》の創刊もその一環であった。

文学創作でも従来の枠を破るさまざまな試みが見られた。小説やルポルタージュにおける、現実生活の暗部を描いた、あるいは共産党組織の官僚主義を批判した作品（「生活に関与する」作品といわれる）、夫婦や恋人同士の愛情や感情のもつれ、革命や政治と個人の幸福との矛盾など、従来は「プチブル的」、「不健康」とされ避けられてきたテーマを扱う作品の出現はその例である。

《詩刊》はこういう一種自由な文学的雰囲気のなかで出発した。それは５７年の前半、《詩刊》でいえば創刊号から第６期まで続いた。この時期に発表された作品には「百花斉放」時代の雰囲気が刻印されている。それは詩作品が、むろんその全てではないにせよ、建国以来の詩的類型を発想、主題、表現のいずれの面からも突き破ろうとしている点にうかがわれる。

洪子誠（洪子誠・劉登翰『中国当代詩歌史』人民文学出版社、1993年５月）は建国以来の詩の基本的主題と類型は「頌歌」（新しい時代、社会主義祖国、労農兵大衆、中国共産党とその指導者への賛美）と「戦歌」（帝国主義、反革命など社会主義の敵にたいする批判と暴露）だったと指摘している。また表現の方法としては、「叙事的抒情」（人物、場面、事件を設定しその枠組みのなかでストーリーを展開する詩法。但しこの「叙事的抒情」というのは岩佐の造語である）、「政治的抒情」（自己を階級や人民の代弁者に擬し、激しい感情の直抒で政治的アジテーションを展開する詩法）の二つが主流だったと指摘している。５７年前半の《詩刊》掲載の作品にはこういう類型を破り、なんとか新しい詩を作り出そうとする詩人の努力がみられるのである。例えば、艾青（1910－）「在智利的海岬上<チリの岬で>」（57.1：《詩刊》５７年１期掲載であることを示す。以下同じ）、徐遲「芒崖」<とがった崖>（57.1）、蕭三（1896―1985）「詩三章」（57.1）、公劉（1927―）「遅開的薔薇」<遅咲きのバラ>（57.2）、

阮章競（1914—）「風砂三章」（57.2）、杜運燮（1918—）「解凍」<雪解け>（57.5）、穆旦「葬歌」<葬送の歌>（57.5）などはその例である。

3

５７年後半から反右派闘争が始まる。《詩刊》もこの運動に敏速に対応した。

まず５７年７月号で「詩人たちよ立ち上がれ、闘いの前列に立て」とよびかける主編・臧克家（1918—）の巻頭言（「讓我們用火辣的詩句来発言吧」<きつーい詩句で発言しよう>）に始まる「反右派闘争特揖」を組み、袁水拍（1916—82）、田間（1916—85）、沙鴎（1922—）、徐遅といった編集委員の詩を掲載した。８月号には詩壇における反右派闘争の中で最大の焦点であった四川の詩人・流沙河（1931—）「草木篇」<草木を歌う>批判の文章（沙鴎「“草木篇”批判」57.8）を発表し、運動に参加した。だがこの時点では闘争はまだ《詩刊》編集部の足元に及んではいなかった。事態が深刻になるのは８月に入って編集委員の呂剣（1919—）と編集部員の唐祈（1920—）の二名が右派分子として批判を受けてからである。５７年９月号の「反右派闘争在本刊編輯部」（署名・編者）によれば、二人はそれまで《人民文学》編集部で働いており、《詩刊》に移ったのはごく最近のことだが、「丁玲、陳企霞反党集団」の骨幹分子・李又然（1906—84）と密接な関係があり、丁玲（1904—86）、陳企霞（1913—88）ら反党分子の名誉回復を画策したのだという。

だが《詩刊》にとって重大問題だったのはこの二人より、むしろ艾青の扱いだったであろう。この文章は艾青が「最近作家協会党組拡大大会で厳正な批判を受けた」が、彼は「丁玲、陳企霞、江豊ら反党集団や呉祖光（1917—）右派集団のいずれとも繋がりがあり、これらの集団の連絡員を務めていた」ことなどを明らかにしている。《詩刊》編集委員でもある大詩人・艾青への厳しい批判は《詩刊》が反右派闘争に熱心であることを対外的に示すためにも必要だったであろう。9月号には副主編の徐遅（「艾青能不能為社会主義歌唱?」<艾青は社会主義のために歌うことはできないのか？>）と編集委員田間（「艾青，回頭過来吧」<艾青よ、こちらに帰って来い>）による批判文が掲載され、さらに艾青批判を含む黎之（1928—）の「反対詩歌創作的不良傾向及反党逆流」（<詩歌創作のよくない傾向と反党の逆流に反対する>）という文章が掲載されている。この文章は「不良な傾向」として「くだらない情欲の追求」や「愛情にたいする恐懼れや空虚で陰鬱な情緒」「頽廃的で感傷的な感覚」をうたった愛情詩（例えば公劉「遅開的薔薇」がそれだという）、個人的な「暗い」「陰鬱な」情緒をふりまく「不健康」な作品（例えば穆旦「葬歌」、艾青「景山古椀」《北京文芸》57. 1、などが例として挙げられている）を、「反党の逆流」として「党を攻撃し、社会主義を攻撃する」作品（例えば流沙河「草木篇」）をあげて批判し、詩人たちに「鮮明な社会主義時代の特徴を備えた詩篇」を書くよう呼び掛けている。《詩刊》は——というより中国現代詩は、反右派闘争を契機に５７年前半の努力＝芸術上の探索、を放棄し、「頌歌」と「戦歌」の道へと再転換することになる。この論文はそれを象徴しているといって過言ではない。

一方艾青批判はその後も続き、沙鴎（1922—）「艾青近作批判」（57.10）、暁雪（1935—）「艾青的昨天和今天」（57.12）、桑明野「批判艾青“詩論”中的資産階級文芸思想」（<

艾青の「詩論」におけるブルジョア的文芸思想を批判する>58.2）などの批判文が相次いで掲載された。

4

１９５８年は「大躍進」によって知られる年である。工業、農業における生産の大躍進は５７年秋から提起されていたが、党の政策レベルでそれが決定されるのは５８年に入ってからである。５８年３月中共中央は成都で中央工作会議を開く。この会議で毛沢東は「鼓足干勤、力争上游、多快好省地建設社会主義」（<大いに意気込み、常に高い目標を目指し、多く、早く、立派に、無駄なく社会主義を建設しよう>）という社会主義建設の総路線の考え方を打ち出した。５月の中共第八回全国代表大会第二次会議で毛沢東は「破除迷信、解放思想、動員一切積極要素」（<迷信を打破し、思想を解放し、すべての積極的な要素を動員せよ>）と呼び掛けた。会議はこの総路線を決定、これ以後農村の人民公社化と鉄鋼生産運動を中心とする「大躍進」が、全国を巻き込む大衆動員の運動として展開されることになる。

大躍進運動は文芸界にも大きな影響を与えた。その最も大きなひとつが「新民歌運動」の展開である。

５７年秋から５８年春、各地の農村では大規模な水利建設が繰り広げられた。５７年末で六千万人が参加したといわれるほどの、この巨大な水利建設に農民を動員するため、多くの地方では政治・生産スローガンを歌謡化し、大衆に呼び掛けるという方法を採った。また動員された農民の中からも「新民歌」（労働や建設、社会主義の理想、共産党賛美などを歌う民謡）が生まれた。これに注目した毛沢東は５８年春全国の民歌の収集を提案した。ほぼ同じ時期、５８年３月、成都で開かれた会議の席上、毛沢東は次のように述べた。

「中国詩の出路［前途］は、第一の道は民歌、第二の道は古典だ。この基礎の上に現代詩が生まれる」「形式は民歌、内容はリアリズムとロマンチシズムの対立の統一だ。余りに現実的だと詩が書けなくなる」（毛沢東「成都会議での講話」1957年3月）

こうした発言にもとづいて文芸界に「革命的リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合」という新しい創作方法が提起される。また４月には《人民日報》が社説（「大規模搜集全国民歌」<全国の新民謡を大々的に収集しよう>）を発表、全国的な規模での民歌の発掘収集、創作の大衆運動が巻き起こされることになる。さらにこれが契機となって「新詩発展問題討論」（<現代詩発展についての討論>）といわれる論争がおこることにもなるのである。

５８年のこうした情勢にも《詩刊》はやはり迅速に反応する。早くも５８年２月号「迎春特揖」に大躍進を称える詩を掲載したのをはじめ、３月号を「農村大躍進特集」にあてている。また大躍進や新民歌運動の中から多数の民間詩人が誕生したが、《詩刊》は積極的にこうした詩人たちに作品発表の場を与えようとしていた。５８年４月号に「工人詩歌一百首」、「工人談詩」など労働者詩人の特集を組んだのはその一例である。

また５８年５月号が「民歌選六十首」を載せたのを皮切りに、以下「新民歌四十首」

(58.6)、「戦士詩歌百首」(58.7) など、毎号「新民歌」を掲載したのもその一環である。

「新詩発展問題討論」については、５８年１０月号から「新民歌筆談」の連載がはじまり、５９年２月、そのまとめとして《詩刊》評論組整理「関於新詩発展問題的論争」(<現代詩発展問題についての論争>) が発表される。この問題には大きく三つの論点があった。

第一は“五四”以来の新詩 (現代詩) をどう評価するか、をめぐる問題で、論争の主流は「新詩は旧詩の形式上の枠を破り詩体を解放したが、以後人民から遊離していった。これはその欠点だ」というものだった。

第二は新民歌をどう評価するかをめぐるもので、肯定的に見る意見が主流だった。

第三は新詩の発展方向に関する議論で、その主流は、毛沢東のいったように民歌と古典を基礎に発展させるべしというものだった。

５８年の文芸界ではまた「修正主義文芸思想」批判なる運動が展開された。年頭、《文芸報》第２期が丁玲、艾青らの延安時代の文章を掲載し「再批判」を行ったのを皮切りに、反右派闘争で右派とされた作家、批評家の文章や作品に対する再批判が展開されたのである。その運動の一環であろう、《詩刊》でも様々な詩人の作品がとりあげられ批判された。この一年間に発表された批判文には次のようなものがある。

公木「公劉近作批判」(58.1)、

洪永固「邵燕祥的創作岐途」(58.3：邵燕祥 1933—)

呉中岍「評白薇的“盤錦花開十月天”」(<白薇の詩「盤錦花開く十月の天」を評す>58.5：白薇 1893—1987)

劉浪ら「対卞之琳“十三陵水庫工地雑詩”的意見——我們不喜歓這種詩風」(<卞之琳の詩「十三陵ダム工事現場雑詩」に対する意見>58.5：卞之琳 1910—)

高国英ら「対林庚“詩三首”的意見」(<林庚の「詩三首」への意見>58.5：林庚 1910—)

楊森「“耕地”的生活細節不真実」(<詩「耕地」の描く生活のデテールは真実ではない>58.5)

肖翔「什麼様的思想感情？——対蔡其矯“川江号子”“宜昌”等詩的意見」(<いかなる思想感情なのか？——蔡其矯「川江号子」「宜昌」等の詩に対する意見>58.7：蔡其矯 1918—)

呂恢文「評蔡其矯反現実主義的創作傾向」(<蔡其矯の反リアリズムの創作傾向を評す>58.10)

宛青「評田間的“麗江行”」(<田間の詩「麗江行」を評す>58.12)

商文健「這不是我們的丁佑君——評高纓的長詩“丁佑君”」(<これはわれわれの丁佑君ではない——高纓の長詩「丁佑君」を評す>58.12：高纓 1929—)

余音「批判孫静軒的詩」(<孫静軒の詩を批判する>58.12：孫静軒 1930—)

5

５９年は中華人民共和国成立十周年という節目の年である。文芸、学術の様々な領域で十年を記念し、建国後の歩みを総括する作業がおこなわれた。

《詩刊》は９月号(総第 33 期)を「国慶十周年専号」にあてたが、特に建国後の現代詩

史を総括するような文章は掲載していない。

だが、この年は同時に“五四”運動から四十周年目にあたる。中国現代詩は“五四”時代に誕生したのであり、現代詩誕生四十周年という記念すべき年でもある。恐らくそのためであろう、《詩刊》は６月号から１２月号まで四回にわたって「新詩発展概況」という論文を連載する。これは“五四”から始まる中国現代詩の歩みを１９５９年の視点から総括したものである。執筆者は謝冕（1931—）、孫紹振（1936—）、劉登翰（1937—）、孫玉石（1935—）、殷晋培（1939—）、洪子誠（1939—）の六名。いずれも現在は中国を代表する現代文学研究者だが、当時はほとんど無名の青年たちである。当時現代詩史を独立して扱ったものとしては臧克家「“五四”以来新詩発展的一個輪郭」＜“五四”以来の現代詩発展の輪郭＞（《文芸学習》55.2 - 3）があったが、まさに題名通り簡単な「輪郭」を素描したものにすぎなかった。それに対しこの「新詩発展概況」は、「思考が全面的ではなく、怱怱の間に仕上げたという限界、観点と史実の上で検討の余地があるが、まとまった叙述で、現代詩史の萌芽に近づいて」（古遠清『中国当代詩論５０家』重慶出版社、1986年9月）おり、《詩刊》の業績の一つであった。

6

１９５９—６０年の中国政治をつらぬくのは「反右傾」思潮だった。５９年以後中国は三年続きの大自然災害にみまわれ、さらにソ連の援助停止があり、毛沢東の大躍進経済政策は挫折した。こうした情勢を背景に５９年—６０年の中国は左傾化を強めるのである。まず５９年７月中共八期八中全会（中国共産党第八回全国代表大会第八回中央委員会全体会議）が江西省盧山で開かれるが、会議で大躍進政策を批判した彭徳懐国防部長が反党とされて失脚した。毛沢東は彭の大躍進批判は党内に存在する右傾思想、右寄りの感情を代表していると判断、８月以後反右傾闘争が展開される。６０年はこの「反右傾」の延長線上に文芸界でも１月に巴人（1901—72）の「人情論」が批判されるなど、人道主義、人間性論などを槍玉に批判運動が起こった。

６０年７月には第三次文代会(中国文芸工作者第三次代表大会)が開かれ、文芸界における反修正主義闘争のよびかけが行われた。

こうした政治動向や文芸界の動きに対応し、《詩刊》の誌面構成も「左傾」の度合いを強めていき、６０年に入るとしばらく途絶えていた批判の文章が載り始める。

郭小川（1919—76）批判（殷晋培「唱什麼様的賛歌——評《白雪的賛歌》中于植的形象」＜どういう賛歌を歌うのか——「白雪賛歌」の中の于植の形象を評す＞60.1）、

蔡其矯批判（肖翔「蔡其矯的詩歌創作傾向」60.2）、

王亜平（1905—83）批判（尹一之「王亜平反対的是什麼？」＜王亜平が反対しているものは何か？＞60.2）、

丁芒（1924—）批判（王澍・易莎「庸俗的感情、陰暗的心霊」＜くだらぬ感情、陰鬱な心＞60.3）、

楊文林批判（雷立群「《女隊長来了》表現了什麼？」＜「女隊長が来た」は何を表現しているのか？＞60.3）、

巴人批判（殷晋培「巴人的一支冷箭」<巴人の闇討ち>60.5）、
沙鷗批判（周建元「沙鷗是怎様一個詩人？」<沙鷗とはどういう詩人か>60.5）、
秦似（1917—86）批判（宋塁「批判秦似的《詠古蓮》和《吊屈原》」<秦似の詩「古蓮を詠む」と「屈原を弔う」批判>60.5）
などがそれである。

この年の《詩刊》には、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなど第三世界の闘争への連帯を歌った作品や、それらの国の詩人の翻訳の掲載も目立った。例えば５月号、６月号と連続して「支持亜州拉丁美州人民的民族民主運動」（<アジア，ラテン・アメリカ人民の民族民主運動支持>）の特集を組んだのをはじめ、ベトナム、日本、朝鮮、キューバなどの詩人の作品を翻訳紹介している。その背景にはこの年から顕在化しはじめた中ソ関係の悪化と、それにともなうアジア・アフリカ諸国の共産主義運動における中ソの指導権争いがあったといってよかろう。

7

１９６１年—６２年の基調は大躍進など「左傾」の路線によって生じた経済の混乱を正すための調整政策である。文芸界もまた「左傾」の過ちを正すべく政策的な措置をとった。文革後に明らかにされた資料では、文芸界における「左傾」の是正に積極的に動いたのが周恩来、陳毅らであった。彼らは６１年—６２年に開かれた新僑会議（「全国文芸工作者座談会と故事片創作会議」61.6）、紫光閣会議（在北京の劇作家との座談会、61.2）広州会議（「全国話劇、歌劇、児童劇創作座談会」62.3）、大連会議（「農村題材短編小説創作座談会」62.8）など一連の会議で、５７年以後の学術界、文芸界の非民主的状況を厳しく批判し、文芸に対する過度の干渉を戒める発言を繰り返した。例えば周恩来は紫光閣会議で次のように述べたという。

「これを書いてはいけない。あれを書いてはいけない。さらに人様にレッテルを貼る。右傾だ、保守だと。かくして大変多くの作品が公式化、概念化、低俗化したものとなる。作家はただ間違わないことだけを求め、功績あるを求めない。もちろん良い作品などできはしない。これは党委員会の指導と関係がある」（周恩来「北京の新劇・歌劇・児童劇作家に対する講話」『原典中国現代史（第五巻）』岩波書店、1994年７月所収、萩野脩二訳による）

それと同時に、これらの意見を「条例」の形で公式化することも試みた。その文芸領域における「条例」が６２年４月に公布された「関于当前文学芸術工作者若干問題的意見」（<文学芸術工作者の若干の問題についての意見>：いわゆる「文芸八条」）である。当時の党の文芸工作に「少なからぬ欠点と過ち」が存在しているとの認識に立って、「百花斉放百家争鳴」の原則の徹底、民族遺産の批判的継承と外国文化の批判的摂取、文芸批評の正しい展開など、それを是正する八点の原則を定めたものである。

こうした一連の調整政策は６１年—６２年前半の《詩刊》の編集方針にも反映されているように見える。掲載作品はとげとげした内容のものが減り、穏やかな作品が主流を占めている。「戦歌」と「頌歌」の二本立てであったのが、戦歌がほとんど掲載されなくなった、といってもいい。また、それまでずっと続いていた「批判」文の掲載が、この

期間は途絶えている（６１年第５期に陳山「《擊壤歌》是一首什麼性質的歌」という文が載っているが、これは古代の詩の批判）。《詩刊》のこういう誌面構成は、やはり「調整」を軸に動いていた当時の文芸界の雰囲気の反映なのであろう。

事態に大きな変化が生まれるのは６２年９月中共八期十中全会以後のことである。会議の席上毛沢東は社会主義社会における階級と階級闘争の存在、資本主義復活の可能性を指摘、階級闘争の必要性を語り、修正主義の防止と反対を提起した。そしてそれは会議のコミュニケに書き込まれた。６３年からは社会主義教育運動が始まる。中国は短い調整期を経て再び激しい政治の季節に入っていく。国際的にも６２年１０月いわゆるキューバ危機が起こり、中国は「キューバ支持、アメリカ帝国主義反対」を唱えてフルシチョフと対立する。１１月発行の《詩刊》第６期は、巻頭にキューバ人民の革命闘争支援の詩四首を掲げているが、それはこの雑誌が再び「戦歌」を歌い始める合図のようにも映る。

８．

八期十中全会の「資本主義復活の危険性―社会主義段階での階級闘争の必要性」という提起は、文芸界を含む全イデオロギー領域に激震をもたらすことになった。この会議の席上劉建彤の小説「劉志丹」が批判されたのを皮切りに、６３年５月には昆曲「李慧娘」が批判され、９月には毛沢東が伝統演劇とそれを管轄する文化部を「帝王将相部、才子佳人部、あるいは外国死人部だ」と批判、１２月には演劇以外の芸術形式は「問題が少なくない」、社会主義改造は「ほとんど効果をあげていない」と批判する「批示」を書いた。この「批示」に基づき６４年４月から文芸界では整風運動を展開、問題点の煮検をおこない、５月にはその報告書草案をまとめた。６月毛沢東はこの草案に「批示」し、文芸界（全国文芸界連合会とその傘下の各協会）について次のように書いた。

「これらの協会とこれらの協会が掌握している出版物の大多数（少数の、いくつかのものは、よいといわれているが）は、この十五年間、基本的に（すべての人ではない）党の政策を実行せず、役人風や旦那風を吹かして、労働者、農民、兵士に接近せず、社会主義の革命や建設を反映しなかった。ここ数年間は、なんと修正主義すれすれまで転落するにいたっている。」（「北京周報」67年22号による。ただし一部表現を改めた）

ここで毛沢東が批判している出版物の中に《詩刊》が入っているのかどうかは明らかではない。ただ毛沢東のこの評価は解放後の文芸界の成果を一切否定した６６年の「林彪同志の委託により江青同士が開いた部隊の文学・芸術活動についての座談会記録要綱」（いわゆる「座談会紀要」）につながるものである。文芸界の人士に「また大きな批判運動が巻き起こるのではないか」という憂慮、不安、危機感を与えたことが予想される。果たしてこの「批示」により文芸界は再び整風運動のやり直しを迫られることになる。この結果、映画「北国江南」、「早春二月」が「ブルジョア個人主義、人道主義を賛美している」などとして批判されたのをはじめ、多くの作品が批判にさらされた。６４年夏以降、批判は学術界にも及び、哲学界では楊献珍（1896―1992）、馮定（1902―83）、経済学では孫冶方（1908―83）、歴史学では剪伯賛（1898―1968）、呉晗（1909―69）らへ

の批判が展開された。こうした批判運動の継起はやがて始まる文革の前触れであった。

９．

６３年－６４年すべてを階級闘争に結びつける「左傾」の急進主義が中国を覆い、文革の思想的基盤が形成されていく。その状況に現代詩は、また《詩刊》はどう対応したのだろうか。

この時期の《詩刊》「詩訊」欄を見ていくとほとんど毎号のように「詩歌朗誦会」の記事が掲載されていることに気付く。これらの朗誦会は当面のさまざまな政治運動と連動して開かれた。６４年４月号の「詩歌朗誦座談会紀要」によれば北京、上海、広州、合肥、成都、武漢、天津、ハルピンなどで「支持古巴詩歌朗誦会」（キューバ支持詩歌朗読会）が開かれたほか、全国の多数の都市で「向雷鋒同志学習詩歌朗誦会」（雷鋒同志に学ぶ詩歌朗読会）、「記念馬雅可夫斯基誕生七十周年詩歌朗誦会」（マヤコフスキー生誕七十周年記念詩歌朗読会）、「支持巴拿馬人民反美愛国正義闘争詩歌朗誦会」（パナマ人民の反米愛国正義の闘争支持詩歌朗読会）、などが相次いで開かれた。北京での朗読会はラジオで全国に実況中継され、外国にも流されたという。そして最近では都市だけではなく地方の県や人民公社でも朗読会が開かれ始めたという。

こういう会で朗読されるのは、明確な政治テーマをもち、戦闘的扇動的な語彙と力強いリズムで聴衆を酔わせ、政治目標に向って動員するアジテーション詩でなければならなかった。このような詩は「政治抒情詩」と呼ばれる。文革期に最も盛んになる政治抒情詩は、この急進主義の時代が必要とした詩体だったといえよう。

10

１９６４年１１月《詩刊》は突然停刊する。停刊の理由は編集部が農村や工場、つまり生産の現場に下放するためだという。それが何らかの政治的判断による慌ただしい決定だったことは、「停刊の通知」が《詩刊》本誌にではなく、それに挟まれた一枚の小さな紙切れに印刷されていたことから推測される。停刊の通知はこう書かれている。

親愛なる読者の皆様

《詩刊》１１、１２月合併号がお手元に届く頃は新年も間近でしょう。新しい一年、思想と仕事の面でより大きな収穫がありますようお祈りします。目下わが国の各戦線では社会主義革命と社会主義建設の大衆運動が盛んに展開されています。本誌は、編集部員がかなり長期間、農村や工場に入り、燃えあがる闘争に参加し、より一層思想を鍛えるために、６５年元旦から暫く休刊することを決定しました。この積極的措置はを、皆様必ずご支持下さるものと思います。／これまでの数年間、本誌は一貫して皆様の熱いご支持とご援助を受けてきました。ここに謹んで衷心より感謝申し上げます。

《詩刊》編集部１９６４年１１月

編集部自身この通知にあるように「休刊」は「暫時」のことにすぎないと考えていたであろう。しかし政治の動きは予想を超えていた。その一年半後文革が始まり、文芸誌はことごとく発行を停止する。《詩刊》が再び読者の前に姿を現すのはそれから十二年後のことであった。

１１．

１９５７年１月創刊以来七年間、《詩刊》の刊行された時代背景を辿り、改めて《詩刊》の目次を眺めてみると、そこに時代の影が余りにも強く刻印されていることに感慨を催さずにはいられない。

この七年、特に５７年後半以後は詩が限りなく「政治」に近付き、「政治」の僕に堕していく歳月だった。詩はひたすら政治に奉仕した。政治が左傾すれば詩も左傾した。６４年に発表された作品の多くは、その内容の政治性、表現の煽動性・戦闘性、語句の大言壮語、作品全体の非芸術性においてほとんど「大、假、空」（大言壮語、嘘っぱち、無内容）と評された文革期の詩の先取りといっていいほどである。

文革期文学は、文革期の歴史的・社会的環境から生まれたものには違いないが、詩の角度からいえば、それは５７年以後の現代詩の発展の必然的帰結だったといえ、その具体的内容（実質）はすでに文革前の作品に実現されていた。これが、《詩刊》七年の歩みを辿ってみて私が受けた印象である。

もしこれが正しいとして、私にはそういう現象を作り出した原因は、一人や二人の特定の誰かや、ある幾つかの作品にあるのではなく、中国現代詩に関わったすべての人々、詩人、評論家、編集者、読者たちの共同の作為と不作為にあるように思える。ある詩作品を「不健康な情緒をふり撒いている」と感じる読者があり、それを投書できる雑誌、それを掲載する雑誌があり、それを受け入れる作者があり、それを根拠に断罪する評論家がいる。そういう「暗黙の共謀」の結果、多くの語彙、多くの感情、多くの表現が暗黙の内に「禁止」され、詩から排除されていく。１９５７年から６４年までの中国で、《詩刊》は、他のすべての文芸雑誌がそれぞれのジャンルでそうであったように、そうした暗黙の禁止や排除を詩壇の内外に示す舞台として機能したのである。

作　品　論

第４章

文革期文学の一面*

高紅十と『理想の歌』を中心に

はじめに

「四人組」が打倒されてからもう五年になる。その間の中国の変化は、すさまじいの一語に尽きる。プロレタリア文化大革命はまったく否定され、文革のため「党と国家と人民は建国いらい最大の挫折と損失をこうむった」、文革は「いかなる意味でも革命とか社会的進歩ではなく、また、そうしたものではあり得なかった」と断罪された[1]。文革いらい消息を絶っていた幹部、学者、文化人はもうほとんど名誉回復され、第一線に復帰している。文芸界も例外ではなく、いちいち名前を挙げていけばきりのないほどの作家、詩人、劇作家が姿を見せ、仕事を再開している。

だが、その一方、「四人組」の時代にさかんに活躍していた人々で、７６年１０月以降消息を絶った一群の作家、詩人たちがいる。彼らはおおむね七十年代になってから頭角をあらわした人々であり、作品そのものの質が文革前の大家たちの水準を凌駕するといいがたいこともあって、わが国では知られない人が大多数である。彼らは恐らく「四人組」集団と――あるいは「四人組」の路線、政策と深くかかわっていたがゆえに、政治的評価ぬきに彼らについて語ることは、いまの中国では極めて困難なことなのであろう。さらにわが国でも、彼らについてなにごとかを書くことのはばかられるような空気がなくもない。

多分そのためでもあろう、復活した作家たちについては盛んに語られながら、こうして消えていった人々について語られる事はほとんど稀れである。だが、「四人組」時代の実相を明らかにしようとすれば、これらのひとびとについて語ることは不可避となる。なぜなら、彼らもまた彼らの真実を描いたのであり、彼らによって書きとめられたもの

---

* 本章は、神戸大学中文会誌「未名」１号、1982年２月刊、掲載の同名の論文に基づく。

は、やはり、まぎれもなく七十年代のある実相にほかならないからである。たとえ歴史の真実は復活した人々の側に属するとしても……。

高紅十という名を記憶している人は、日本人はもとより、中国人のなかにさえそれほど多くはないだろう。だが、１９７４年に発表された長篇詩『理想の歌』の作者の一人だといえば、ああ、とうなずく人も何人かはいるかもしれない。高紅十というのは、その程度の――つまり、「四人組」が権力を握っていた時代に書かれた一篇の詩によって、辛うじて想い起こされるような小さな存在にすぎない。

これは、この若い――詩人と言うほどには成熟してもいず、かといってただの文学好きの女の子とも違う、一人の（今となっては）無名の娘と、その作品の紹介である[2]。

1

『理想の歌』は「北京大学中文系文学専業七二級工農兵学員」によって１９７４年に集団創作され、同年９月人民文学出版社から王恩宇、紀宇などの既成詩人たちの詩とともに一冊の詩集――その題名も『理想の歌』と名づけられていた――にまとめられて出版された[3]。

『理想の歌』は全篇四章、５４０行から成る長詩である。それは抒情詩というには情感より理屈に勝り、抒事詩というにはやや物語性に乏しい。この詩集の書評を書いた蒋士枚、石湾は「政治抒情詩」という範疇を設け、このような詩は「“政論”の色彩をもたねばならず、また詩の意境ももたねばならない。この二者を有機的に結びつけようとすれば、作者は、政治概念と哲理的性格とをもった語彙を、鮮明で生き生きとした芸術的形象とあふれるような革命的激情のなかで溶かさねばならない」とし、『理想の歌』を、そのような性格をそなえた「政治抒情詩」として位置づけている[4]。では、政治的抒情詩『理想の歌』とは、どのような詩なのであろうか。

> 紅い太陽／白い雪／青い空……／東風に乗って／春を知らせる雁の群れ。／太陽の昇る北京を／発って／大空を翔け／宝塔山（延安にある山）につき／つばさを／延河（延安を流れる川）の両岸にやすめた

雪におおわれた陝北、革命の聖地・延安に飛来した雁の群れ――それはここに住みつくため北京からやってきた知識青年（「学校出の青年」の意。一般には初級中学から大学までの卒業生をさす）たちの比喩である。このような書き出しにはじまるこの詩は、新しく来た青年たちの「革命的青年の理想とは何か、どのように理解し、どのように実践するのか」という問いに、先輩である知識青年「私」が答えるという形で展開する。第一章は「私」が延安にやってくるまでの回顧である。

私がはじめて／目をあけたとき／祖国はちょうど満天に朝霞たちこめる夜明けであった。／よちよち歩きできるようになるや／すぐに足をふみしめた／紅い甲板に／まっこうからふりかかってきたのは／前進する船の／けたてる波濤であった。

ここに暗示されているように、「私」は中国の解放とともに生まれた、いま３０歳くらいの青年である。そして、以下に展開される「私」の回想は、この世代の人々の共通体験といっていいだろう。「私」の幼年期は革命戦争の記憶もまだなまなましい時期であった。身売りされた女工であった阿姨（おばさん）や、大人とともに戦斗に加わった伯伯（おじさん）――「私」の周りの大人たちはまだ旧世界の血と抑圧の匂いをただよわせていた。だが、「私」にとってはそれは無限の可能性を秘めた輝かしい未来のはじまりであった。

多くの絵巻きが／目の前にくりひろげられた／どの絵が／いちばんすばらしい未来だろうか？／理想の船の帆は／このように／するするとあがり／四方の風が／このように／それを吹き動かしたのだった……。

こうして始まった「私」の幼年時代は、大躍進の熱狂、反右派闘争、廬山会議などの激動のなかで過ぎていく。「わたしは戦火とびかう時代には／間にあわなかったけれど／身辺はいぜんとして／暴風急雨であった！」そのなかで「私」もまた路上に鉄をひろい、大人たちが書く批判原稿のため墨をする。それがいったい歴史のなかでどういう意味をもつかも知らず。しかし、長ずるに従い、「私は理解した／創業の道は／革命の先輩たちが／いのちと鮮血で敷きひらいたものだということを」献身の英雄・雷鋒の物語に心うたれて育った「私」はやがて「中ソ論争」の意味をも理解するようになる。

革命に生命を捧げた烈士たちの目が／大声で尋ねているようにみえる／「われわれの理想を／どのように実現してくれるのだ？／まだ終わらない事業を／誰が継承してくれるのだ？」……

やがて、また七、八年がすぎて、プロレタリア文化大革命という「世界を震憾させる雷鳴」がとどろいた。「私」もまた「革命大軍の行列の中」にいたのである。詩には「四旧一掃をとなえた大字報を／一夜のうちに／全市に貼りめぐらし」革命的大交流のために全国に散った紅衛兵の運動も、６６年８月毛沢東主席が全国から集まった紅衛兵の大群を接見したことも、まるで昨日の出来事のような感激を込めて書きとめられている。プロレタリア文化大革命の嵐の中に身を投じた「私」は、修正主義思想の批判、労働者の話、農民との交流を通して、「労農兵と結びつくことだけが／これこそが／革命の理想に至る／唯一のみちなのだ……」ということを理解する。

１９６８年１２月２１日「知識青年が農村に行き、貧農下層中農の再教育を受けることは、まことに必要である」というよびかけが全国に放送される。これより、紅衛兵の＜上山下郷＞（農村に行って定住する＞運動が激流のようにくりひろげられるようになる。それは旧い世界と精神的にも現実的にも決裂し、労働者、農民、兵士大衆――つまり労農兵と結びつくために通らねばならぬ道と考えられたのである。

「知識青年は農村へ行こう……」／毛主席が／進軍の号令を発した！／百川、海に帰し／万馬、奔騰し／決心書の下／並ぶ署名は／長い龍のよう。

接待所の前で／同学の少年たちは／出征の命令を待つ！／ああ、必勝不敗の幼芽が／火と燃える年代に／誕生したのだ！

こうして「私」は、仲間たちとともに延安にむかう。詩はその前夜、中南海に行き、夜を徹して「上山下郷徹底革命（農村に住んで最後まで革命をやりぬこう）」というスローガンを書く「私」の描写をもって第一章を終る。

延安に着いた「私」は、鍬で手に血まめをつくり、荊棘で服を破られながら、しだいに農業を覚えていく。農民たち、そしてかつて革命根拠地であったこの土地では、革命戦争のときの戦士たちが――「老八路」や「老婦連」（婦連は婦女連合会の略）たちが、かつてと同じ意気込みで社会主義建設のために全力を尽しているのだった。彼らは「浮華のことばも奇麗なことばも話さない」しかし、その行動で「私」を教育する。このような生活のなかで、「私」は理解しはじめる。

私は理解しはじめた／個人の理想の詩篇など／ありはしなかったのだということを／われわれ革命青年の理想は／全プロレタリアートによって書かれ／何千万、何百万の人々を／呼び集めねばならないのだ！

延安での生活は決して楽なものではない。酷しい労働に明け暮れる毎日を、支えきれない若者が出て来たとしても、少しも不思議ではない。おそらく、平凡な、ただ苦しいだけの単調な毎日に、さまざまな不満がうずまいたに違いない。「無味乾燥だ」とか「農村は遅れている、変えられるものではない」といい出すものがあったことも、この詩にはちゃんと書かれている。だが、「私」はそうは考えない。「農村は／私を必要としているが／私は／もっと農村を／必要としているのだ／貧農下層中農の希望／それこそ私の志願だ／プロレタリア階級の理想を実現するため／私は願う、この光栄ある陝北高原で／十の、いや何十回もの／戦いの春を迎えることを！」労働の日々のなかでつきつめた答えがこれであった。

このとき／ただこのとき／わたしははじめて答案を書きはじめたのだ／「革命的青年の理想とは何か」という厳粛な試験問題の……

延安で生涯を送る。辺境を社会主義の農村に改造するためにがんばる――これが「私」のつきつめたところであった。こう決心した時はじめて、私は＜理想＞を見いだした。その実現にむかってすすむべき理想を見いだしたのであった。

第三章は、そのように決心した「私」にみえてくる目に見えない階級闘争の描写からはじまる。知識青年を腐食させようと、実にさまざまな動きがおこる。北京の青年がこんなへんぴな田舎へ来て百姓をするなんて、可哀そうにといって近付いてくる者がいる。これは「形を変えた労働改造ではないか」という者もいる。「知識人は頭脳労働をすべきだ」などというものもいる。醜い個人主義――というふうにそれらの発言は「私」によってとらえられている――が、＜人生＞・＜青春＞・＜前途＞・＜理想＞などのことばで装われて投げ出されもする。国内だけではない。ソ連からも「中国の青年には理想が

ない」などという声も聞こえて来る。だが「私」はいう。

お前たち搾取階級の梯子が／どうして／われわれの心の窓にとどくだろう？

お前たち帝国主義の物指で／どうして／われわれの心境、度量をはかれよう？

では、「私」の理想はなにか。それは「貴い青春は人民のものだ／誓って青春を人民にささげる」と書き、「生をすて死を忘れ／羊の群を救った」張勇のように[5]、「生きているかぎりけんめいにがんばり、一生を毛主席にささげる」と書き、人を救うために自分を犠牲にした金訓華のようにいきることである[6]。生涯を革命のためにささげることである。だがそれだけではない。若い世代がすべて金訓華、張勇になることである。そして、それは単に夢想ではなく、いま、現に、全国各地でそのような無数の金訓華、数しれない張勇たちが戦っており、成長しているのだ。

われわれは宣戦した／旧世界に！／帝国主義・修正主義・反動派に！／われわれは突破しなければならぬ／ブルジョア権利の思想の網を／われわれはぶちこわさねばならぬ／旧い伝統観念の堅い垣根を、（中略）

われわれはぶ厚い肩に／革命の重い荷をかつぐ／われわれは固いたこのできた双手に／先輩の刀と銃を受けとった／党よ！／われわれの隊伍を検閲せよ！／何百万／何千万の！／ああ、まるまる一代の／志気もあり抱負もある中国青年の／前途は限りない。（中略）

われわれには／マルクス・レーニン主義という／天を開く巨大な斧がある／われわれには／毛沢東思想という／路を指す陽光がある！

進め、進め！／「希望は／君たちに托されている」（毛沢東の言葉）／おお！／われわれに／托されている！／進もう、前進しよう！／暴風をついて／火の光にむかって／雷鳴をつき／激浪をおかして／共産主義の／まっかな／太陽にむかって！

詩はこのように、労働のなかできたえられた、共産主義の自覚をもった青年たちが、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想という武器を手に、共産主義建設にむかって前進するというイメージで終わるのである。

2

さきにも少しふれたように、『理想の歌』は、７２年５月北京大学中文系に入学した「工農兵学員」（「労働者農民、兵士出身の学生」の意。２年以上の実践の経験をもつ労働者、農民、兵士の中から大衆の推薦によって選ばれた）の集団創作になるものであり、高紅十はその執筆者の一人（だが中心的な一人）であった。その高紅十が後に発表した手記や[7]、この詩について紹介した『光明日報』の記事[8]によれば、『理想の歌』が集団執筆された経過は次のようであった。

１９７３年、北京大学中文系文学専攻の学生たちに、「先進的な知識青年と英雄人物を書く」という「任務」が与えられた。高紅十をふくむ執筆グループが結成され、グルー

プはこの年の夏休みを返上して、まず第一稿を書きあげた。７３年暮れから７４年初めにかけて、中文系の学生は「開門辦学」を行う。

「門を開いて学校を運営する」と訳される「開門辦学」とは「門を閉ざして勉学に没頭する」意の「閉門勉学」に対してできた語で、学生が農村や工場などに行き、自分達の専門と関係させながら実際の知識を学んだり、実践したりする、あるいは、広く大学外の人びと（現場で生産活動に従事している農民や労働者であることが多い）を招いて、その人々に教壇に立ってもらう――要するに，形式はさまざまであるが、社会と結びついた勉学を行うことである。

このときの北京大学の学生たちの開門辦学の目的は、先進的な知識青年と英雄的人物たちの事績を取材することであった。彼らは全国各地に出かけ、各地に住みついた知識青年たちと共に働き、青年の理想についてともに語りあった。彼らが取材した知識青年には、雲南の朱克家、山西省平陸県に定住した天津の知識青年グループ、河北省の程有志などがいた。いずれも知識青年の模範として、当時広く報道され、よく知られている人々であった[9]。余談だが、このときの成果は『広びろとした道』と題する書物となって７４年に人民文学出版社から出版されている[10]。

「祖国の各地の上山下郷知識青年とともに感想を語り、貧農下層中農から再教育を受けたその体得を交流しあうなかで、私たちの間の共通の言葉はまるでセキを切ったようにほとばしり出、革命の理想の赤い糸で、私たちはしっかりと結ばれました。偉大で勇壮な知識青年の上山下郷運動によって私たちは教育もされ、創作の意欲をはげしくかきたてられもしました。数しれぬ先進的知識青年の典型から私たちは主題を練りあげ、『理想の歌』を世に問いました」

そのときのことを高紅十はこのように回想している。つまり「このような沸きたつような生活のなかで、彼らは戦闘の詩篇――『理想の歌』をはぐくみ育てた」のだった[11]。

だが、こうして書かれ出版された詩も、７４年９月当時は、それほど評判になったわけでも、広範に愛誦されたわけでもなかった。例えば、７４年９月から７５年１１月までに『人民日報』と『光明日報』で書評の対象とされた詩集が、『人民日報』３冊、『光明日報』９冊（いずれも重複は除く）あるが、『理想の歌』はそのいずれにも入っていない。

ところが、７５年１２月になって、この詩の朗読が全国にラジオを通じて放送され、その結果、爆発的な売れゆきを示すようになった。さきに示した『光明日報』の記事には、詩集を買いたくても売り切れていて買えない各地の人たちから、詩集を求める手紙が北京大学に殺到したこと、「本を買いたいと言う人は非常に多く、学員たちは手元に残しておいた本をすっかり送ってしまい、そのうえまた印刷したが、それもすぐになくなってしまった」ことなどを紹介している。

１２月１３日『光明日報』が書評を掲載、「『理想の歌』は革命の激情に満ちたすばら

しい詩である」と高く評価した[12]。２６日には、やはり『光明日報』に詩壇の長老、臧克家が、このようなすばらしい作品には散文で意見を述べることはできないとして『「理想の歌」讃歌』と題する詩を寄せ、「詩の一行一行から／あふれんばかりの熱情がきこえる／春潮にさわぐ浪のような／きこえるのだ、何千何万という力強い手が／プロレタリア階級と言うピアノのキーをたたき／革命の強音をかなでるのが――／千軍万馬、狂風暴雨のような！／どの詩行にも／わたしは見る、毛沢東思想の／億万の化身を／どの詩行からも／わたしにはみえる、「八時、九時」（毛沢東の「きみたち青年は、午前八時、九時の太陽のように生気はつらつとしている」という言葉をふまえている）の／うるわしい春が！」と絶賛した[13]。

そして、あたかもこのような称賛のしめくくりでもあるかのように、翌年１月、『人民日報』は１ページ余を費やしてこの詩を全篇掲載したのであった[14]。

3

『理想の歌』が、その公刊後１年もたってから、ほとんど唐突とも思えるようなかたちでマスコミの注目を浴び、宣伝されるに至ったのは、たとえば『光明日報』の書評や臧克家たちのいうように、ほんとうにこの詩がすばらしかったからだろうか。

一篇の詩として、虚心にこの詩とむかいあうとき、私たちが感じるのは一種の失望であろう。詩の定義づけをめぐって議論をする気はないが、言語というものを離れては詩も詩人もないという一点だけは、すべての定義の前提であろうし、たとえそれが露わであろうと背後に隠されていようと、詩は<ことば>との詩人の闘いの結果として成立するというのが，私たちの常識であろう。そして、それはまた中国の歴代の詩人たちの暗黙の前提でもあったように思う。そのような認識からすれば、この詩は、詩として、少なくとも成功した詩として成立しているとはいいがたいのである。

なるほど、ここには語彙の選択や配列にある種の工夫や計算も認められる。私は、中国の詩は視覚のイメージより、むしろ音声による快感を重視する（従って詩人は「読者」よりも「聞き手」を予想している）と考える者だが、この詩はゆるやかにもせよ各節に韻をふむほかに、例えば冒頭の数行、

紅白、
　　白雪、
　　藍天……
乗東風
　　飛来報春的群雁。

にみられるように、「紅」「白」「藍」という色彩の対比や、雁の群れが飛来するさまを象徴するような文字の配置などによって、読者の視覚的イメージをも喚起しようという努力が――しかし、それも余りにも単純なものにすぎないが――なされている。しかし、

この工夫にしても、全詩を通じて貫徹されているわけではなく，単に詩を視覚的な平凡さから救い、散文と区別するために行を分けているにすぎないような場合が大部分である。例えば、詩中

但是、
理想的航道
　並不是那麼寧静、担蕩、
豊饒的山区
　也不都長着核桃・海棠。

（「理想の航路は／それほど安静でもひろびろと平坦でもない。／豊饒な山間地帯も／くるみや海棠が育つとは限らない」）

と行分けされている個所に、そうしなければならないどんな詩的必然性があるというのだろうか。行と行の間にはイメージや思想の、飛躍や質的な転換があるわけではない。句と句をつないでいるのは、詩の論理ではなく、散文の論理にほかならないのである。

『理想の歌』は、このように、あげつらっていけば欠点だらけのように見える。詩としては一つの失敗作にほかならない。作品が、それが公刊された１９７４年以後しばらく格別の注意をひいたわけでもないのは、むしろ当然であった。では、なぜ『理想の歌』がこれほどまでに賞賛をあびるようになったのであろうか。この疑問に対しては、直ちに、１９７５年１２月の中国の政治情勢という客観的条件を理由としてあげることができる。

4

香港の中国大陸研究者・司馬長風は、プロレタリア文化大革命を追跡し、分析した彼の著書で、九全大会（６９年４月）を、文革の退潮期＝実力派軍人が実験を握って＜文革派＞の追い落としを開始した時期とし、それから十全大会（７３年８月）までを周恩来総理が権力を掌握する過程、十全大会以後（７３年８月―７５年１１月）を、周恩来、鄧小平らの＜実権派＞に対し、文革派が反撃する過程というふうに位置づけている[15]。このような位置づけには異論があるかもしれないが、しかし、十全大会以後、７５年末までの時期が＜文革派＞と＜実権派＞との権力をめぐる激しい格闘期であったことに異論をとなえる者は、いまや、いないであろう。

しかし、この権力闘争は誰の目にもはっきりと、それとわかる形で闘われたのではなかった。８０年末の「四人組」裁判でその一端が明らかにされたように、最高指導層内部の陰湿な闘争がその形態であり、中国人民をふくめた＜外部＞に対しては、党内は団結しているというポーズがとられ続けたのである。この時期の中国の政治過程は、批林批孔運動→プロレタリア独裁理論学習運動→『水滸伝』批判運動といったふうに、現象的には、一種のマルクス主義教育＝学習運動の連続的展開という形で進行したが、それ

らはいずれも目標の極めてあいまいな、わかりにくいキャンペーンであった。その理由も、運動の発動者である＜文革派＞が、公然と＜実権派＞批判という目標をかかげるわけにはいかなかった点にあるだろうと私は思う[16]。

さて、その＜文革派＞対＜実権派＞の闘争が誰の眼にもわかるようになったのが、７５年１１月にはじまった「教育界の奇談怪論批判」からである。

プロ革命の非常に大きな構成要素に、教育革命がある。この教育革命は、文革前１７年間の教育を、労農兵から遊離し、生産と労働の実践から遊離した＜智育第一＞＜点数第一＞の教育で、労農兵から遊離した、名利のみを追う精神貴族を養成し、＜三大差別＞（労働者と農民、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の三つの差別、格差）の縮小ではなく拡大に奉仕する修正主義の教育だと批判し、それにかわる真に革命的な新しい教育路線を打ち樹てようとするものであった。その主な内容は、①学生選抜方法の改革（＝実践の経験をもつ労農兵のなかから大学生を選ぶ）を根幹とし、②教育方法の改革（＝大学の中だけでなく、広く社会的実践のなかで教育し、プロレタリア階級の革命事業の後継者に育てる）、③養成目標の改革（＝（智育第一）ではなく、プロレタリア階級の思想を身につけ、理論と実践を統一でき、問題を分析し解決する能力をもつ学生を養成する）、④学校運営の改革（＝労働者階級が学校を指導する）の四点に要約できる。

プロ文革の過程で、教育界ではこの内容を現実化する措置が次々ととられていった。しかし、実際の教育現場ではこの教育の＜革命＞に対し大きな不満がうずまいていたらしい。こうした不満を代弁するような形で、７５年夏（「７、８月の間」という）清華大学党委員会副書記の劉冰が毛主席に手紙を書き「現在の大学制度は、学制が短かすぎ（文革前の３―５年が、文革中は２―３年に短縮されていた）　教育の質も低く、学生のレベルも高くない。これでは工業の発展の必要に応えられないから文革前の制度を回復してほしい」旨を要求、時の教育部長、周栄鑫もそれに支持を与えた。ところが、これはプロ革命の成果を否定するに等しい要求であったため、毛主席は怒って、この手紙を劉冰に送り返し、清華大学の学生たちに劉冰と周栄鑫を批判するようよびかけた。

こうして、７５年１１月から劉冰、周栄鑫批判がはじまった。学生たち――というより彼らをリードする＜文革派＞は、劉・周の意見を「奇談怪論」ととらえ、１１月３日」」」」から清華大学構内にのみ大学報を貼り出すという非公開の形で批判を開始した。これが「教育界の奇談怪論批判」のはじまりである。

劉・周らの意見の重点は、現行の制度下では学生の質を保証しがたい、という点にあった。従って＜文革派＞がそれを批判するには、労農兵の学生は、文革前の学生よりも学問的にもすぐれ、思想的にもはるかにプロレタリア的であるということを具体的に示す必要があった。詳細はわからないが、＜文革派＞による最初の批判は「劉・周らはなんと毛主席に反対した！」というふうな内容のない感情的なものが多かったようである。しかし、１２月に入ると運動は「教育革命大弁論」と名を変え、具体的な例をあげての

反論がはじまった。その最初の重要な論文が『紅旗』１２月号に掲載された『教育革命の方向は改纂してはならない』であった[17]。

論文は「教育の質」を論じて、「旧北京大学や清華大学が養成したのは、個人の名利を追求し、理論が実際から遊離した学生たちだった。彼らは哲学を学んでも哲学はできず、文学を学んだ者は小説が書けなかった。工科の学生は、機械も動かせず、修理もできなかった。苦しみを恐れ、死を恐れ、党と国家の命じる勤務先に行かず、堕落してブルジョア右派になった者もいる」と旧い大学生の＜質＞を批判したのち、「しかし、現在の労農兵の学生は、数年間の学習を経て、マルクス主義の理論水準と、階級闘争、路線闘争の自覚は大いに高まり、専門の学習でも喜ぶべき成果をあげている」と、労農兵学員が優れていることを力説した。そして、その実例として、「世界の先進的水準」の発明創造をした人々とともに、「革命の激情にあふれた長詩『理想の歌』を書いた」「北京大学中文系学員」をあげたのである。

『理想の歌』が全国放送されたのは、おそらくこの前後であろう。そして１２月４日、『人民日報』にこの論文が転載されたのを皮切りに、『理想の歌』と高紅十は一躍マスコミの寵児になっていく。その間の経過を年表ふうに記していくと次のようになる。１２月８日『人民日報』「北京大学の様相に深刻な変化生ず」と題するルポを一面トップに掲載、その中ではじめて高紅十を紹介[18]。１１日、高紅十の写真を付した。『理想の歌』とその作者たちを紹介する記事が『光明日報』に載る[19]。１５日『光明日報』に『理想の歌』の書評を掲載[20]。７６年１月７日『光明日報』毛主席の詞発表を祝う詩人たちの文章を掲載。黄声笑、殷光蘭、時永福らの既成詩人と並んで、「在延安插隊落戸（生産隊に住み込む）的北大卒業生」高紅十の文章が載る[21]。１月２５日『人民日報』「労農兵学生の“質が低い”といった奇談怪論に反駁する」ため『理想の歌』を全文掲載[22]。２月５日『光明日報』に高紅十の「延安に帰り農民となる」という文章が載る[23]。

一方、「教育革命大弁論」の方は、翌年１月、周恩来総理の逝去とともに一時停止されたが、葬儀の終わりとともに再び開始され、いっそうエスカレートして「右からのまき返しに反撃する」運動となり、２月には、明らかに鄧小平をさす「悔い改めようとしない党内走資派」の批判運動にと発展していった。そして四月、天安門事件をきっかけに鄧小平はついに失脚に追い込まれる。

以上の経過からもわかるように、７５年１１月から７６年４月に至る政治劇の進行過程は、明らかに＜文革派＞と＜実権派＞との闘争のなかで＜実権派＞がじりじりと後退し、ついに敗北していく過程である。それは同時に、『理想の歌』とその作者がマスコミにとりあげられ有名になっていく過程でもある。『理想の歌』が、１９７５年暮れに突然のように賞賛をあびはじめたのは、この政治闘争における＜文革派＞の必要を満たすものを、この作品がそなえていたからだということは、もはや明らかであろう。

『理想の歌』が突然注目されるようになった理由は以上のようだとしても、しかし、

依然としていくつかの疑問が残る。ひとつは、政治闘争の必要にもとづいて＜文革派＞が『理想の歌』をもてはやしたのは事実だけれども、だが、そうしたキャンペーンぐらいで詩集がそんなに売れるものなのか――つまり、『理想の歌』が読まれたのは、そんな外在的な理由からだけなのかどうか、ということである。もうひとつは、『理想の歌』の集団執筆者のうち、他の執筆者はまったく無名のままなのに、なぜ高紅十だけが特にとりあげられ、マスコミの寵児になったのか、ということである。以下、そうした問題について考えてみることにしよう。

5

第一の疑問については、次のように考えることができる。

プロレタリア文化大革命のなかで、中国の都市在住の青年たちは、それまでの青年たちとまったく異なる青年期を過ごすこととなった。知識青年の＜上山下郷＞運動とよばれる、都市の知識青年の農山村への定住運動が定着したため、彼らの三分の一以上が農村にいかねばならなくなったためである。

都市の学校を卒業した若者が、辺境の荒野に移住し、開発に従事するということは、解放後かなりはやくからはじまっていた。農村への定住も５７年の農村の社会主義化＝集団化完成後からはじまっていた。しかし、中学・高校を出た青年が農村に行くことが制度化されたのは、文革以後のことである。この制度によれば、中学、高校の卒業生は、条件に応じて、農村、辺境、鉱工業企業、基層組織の四つのいずれかに「分配」（学生を組織的に勤務先に配属すること）されることになっていた。農村に赴く者は、だいたい卒業生全体の３０～４０％で、一人っ子、長男、長女、病弱者、華僑の子女、一家の中で兄弟姉妹の誰かがすでに農村にいる者などは都市に残ることができるという規定であった。そして、そこで何年間か労働し――そしてより重要なことだが、その労働を通じて自分の思想をきたえたのち、それぞれの条件に応じて、大学、研究機関、行政機関などにその人々を入れていくという計画であった。この規定は、６７年の卒業生から適用されはじめたが、６８年、６９年の卒業生は全員一律農村に下放させるという方針がとられた。（この“極左的方針”は、６８年１２月２１日、毛主席の「知識青年は農村へ行こう」という呼びかけが発せられたことと関係があるだろう）。７１年卒業生の分配のときからはもとの規定によって下放が行われた[24]。こうしてプロ文革開始（６６年）以来、７５年末までに、約１２００万人にのぼる都市の知識青年が、全国各地の農山村に散り、そこに住みつくようになったのである[25]。

この１２００万人は経歴も出身も違い、ものの考え方も異なる。種々雑多な若者たちであるが、そのいずれもが、解放後の社会主義教育の申し子であり、プロ文革中の紅衛兵と＜上山下郷＞という稀有の体験を共通にもつという点で、それ以前の年代の人々とも、同世代のそうした経験をもたぬ人々とも区別されるような共通性をもつ若者集団で

あった。この集団が前世代とも同世代の他の若者とも決定的に異なるのは、彼らが都市の安楽的生活（それには都市の生活環境の安楽さという意味も、両親や教師の庇護のもとに生活するという意味もともに含まれる）から、苛烈な農村の生活（それには農村の生活環境、労働の過酷さ、一人で独立して生活しなければならなくなるといったことがすべて含まれる）へという、激しい変化を、ようやく世界観を形成すべき時期に等しく体験しなければならないという点にある。そうした体験をもとに、この若者集団の間に一種の＜共生感＞が芽生えたとしても不思議ではない。

１９７０年代初期の中国にあって、体験と感情を共有しあう、１２００万人の年齢も接近した若者集団――これをいま仮に＜上山下郷青年集団＞と名づけるならば、『理想の歌』は、なによりもまずこの集団の文学・＜上山下郷青年集団＞の自己確認の文学であった。

さきにみたように『理想の歌』は、中華人民共和国の歴史とオーバーラップさせつつ、自己の成長史を語る第一章からはじまる。そこに歌われる「私」は、この１２００万人の青年集団にほかならず、第一章は、この集団の「自分がなに者であるかを対象化しようとする」ことがその創作モチーフである。第二章は＜上山下郷＞の意味を明らかにする章である。自分たちの青春は、共産主義を実現するため、三大差別の縮小のため、安逸なる都市から苦しみ多い農村に移り、そこの改造のためにささげられる。＜上山下郷＞は、いわば共産主義の＜未来＞のために、この＜現在＞を犠牲にする崇高な歴史的使命だということを明らかにするのがこの章である。第三章は、自分達をその歴史的使命を実現する世代と規定し、それを確認し、外に宣言する章である。（詩に対するこのような理解が、私がこの詩を＜自己確認の文学＞とよぶ理由である）――＜上山下郷＞へのこのような位置づけと自分達の青春へのそのような意味づけこそ、ほとんど否応なく農山村に定住しなければならなかった１２００万人が、なによりも欲したことではなかったろうか。

＜上山下郷＞をテーマにした小説や詩やルポタージュ（こうしたものを、私は＜上山下郷文学＞と名付け、文革期文学の重要な内容を構成するものと考える。この問題については別稿を準備中であり、詳細はそれに譲りたい）は少なくない。しかし、『理想の歌』のようにその意味づけを明確にしえた作品はなかったのではないだろうか。それは文字通り知識青年たちの心のうちを代弁し、それゆえに彼らの心を激しくゆさぶることができたのである。（余談ながら私は、この詩が、あたかも人生論のごとく読まれたに違いないと考えている）。『理想の歌』が、そのさまざまな欠点にもかかわらず、広範な読者を獲得した最大の理由はその点にあった。

6

第二の疑問については、高紅十が大学卒業後ふたたび農村に入っていったということ

に、その答えを見い出すことができる。

話はやや迂遠になるけれども、ここで、めんどうな統計数字におつきあい願いたい。『中国百科年鑑（１９８０年版）』[26]によれば、１９７６年度における中国の各種の学校における在学生は、小学校（五年制）１億５０００万人、初級中学（三年制）４３５０万人、高級中学（二年制）１４８３万人であった。いまこれを在学年数で割ると、学年当りのだいたいの在学生数が得られる。それによると、小学生は各学年平均３０００万人。初級中学１４５０万人、高級中学７４０万人という計算になる。つまり、初級中学に進学するのは小学卒業生の約半数弱、高級中学に進学できるのはその更に半数、７４年度における全国学齢児童の就学率は平均９３%であるから、非常に乱暴な計算だが、高校進学者は、同世代の子の約四分の一、２５%足らずということになる。これが「中小都市と多くの農村には、すでに初級中学が普及し、大都市には高級中学が基本的に普及している」といわれた７５年当時の状況であった。ところで、７６年における高級中学卒業生は実数で５１７万２０００人、この年全国の大学が募集した学生は２１万７０００人であった。この年の大学進学者は二年前の高級中学卒業生であるから、進学率は単純には求められないが、多くても全高卒者の３～４%、同世代の青年の１%にも満たない数である。

以上は極めておおざっぱな数字にすぎないが、中国の大学生というものがどれほど稀少な存在かをうかがうに足るであろう。その大学の卒業生――しかも天下に冠たる北京大学の卒業生が、農村に行って農民になるなどということは、常識的な価値判断からすればほとんど狂気の沙汰にもひとしいことであったはずである（中国で農村や農民に対する蔑視感は我々の想像よりずっと強いことは、注意しておいていい）。そして、高紅十はこの狂気の<反価値的行動>を敢行した英雄だったのである。マスコミが注目したとしても当然であった。

だが、『人民日報』や『光明日報』が高紅十のことをこぞってとりあげたのは、たんに彼女の行動の特異性にジャーナリスティックに注目したからではなかった。そうではなくて、彼女のそのような行動と、それに駆りたてた思想のもつ規範性に注目したからであった。

労農兵の学生は「作風の面で刻苦、質素であり、自覚的にブルジョア思想の侵蝕を拒み、ブルジョア階級の権利の観念をたえずうち破り，労農の中から来て労農を忘れない」という特色をもつが、高紅十はまさしくそのような学生であり、卒業にさいし「三度にわたって申請書を書き、延安地区に帰って農民になることを断固要求し、三大差別縮小の促進派になろうと誓った。これは、旧大学の養成した学生が名利を追い、精神貴族の宝塔にのぼろうとしたのと、きわだった対比をなしている」と『人民日報』は伝え[27]、『光明日報』は、「今年いらい彼女はプロレタリア独裁の理論を学び、実際と結びつけて修正主義を批判し、（農村や農民を軽視する）伝統的観念と自覚的に、徹底的に決裂し、三大

差別縮小の促進派となり、プロレタリア独裁を強固にし、社会主義の新しい農村を建設するために青春をささげている」と報じた[28]。

この高い調子の記事は、そのまま当時の知識青年をめぐる、一種ヒロイックな熱っぽい雰囲気を伝えて余すところがない。労働者と農民、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の差別、いわゆる三大差別の解消は、もちろん共産主義社会の実現をまってはじめて可能な大理想である。それには生産力の飛躍的な発展と、高い政治的自覚をもち、全面的に発展した新しい共産主義的人間の存在が必要である。＜上山下郷＞はこの大理想実現を射程におき、差別を一歩一歩縮小していくことを目指す現実的な措置なのであった。都市と農村の間の気も遠くなるような経済上、文化上の格差、大学生の稀少性にその一斑のうかがえるような、頭脳労働と肉体労働の差別――そうしたものの解消は、たとえ一人の大学卒業生が農民になったところでなにほどの効果をあげうるものでもない。しかし、一人の大学生のヒロイックな行動が、何千万もの知識青年のヒロイズムを激発させることができたとしたら、その行為のはらむ効果にははかりしれないものがあるだろう。

高紅十は、知識青年の＜上山下郷＞を讃美した『理想の歌』と、同じテーマの小歌劇『朝陽路上』（未見）の作者である。その彼女が「『理想の歌』は紙の上に書くだけではだめだし、『朝陽路上』は舞台の上で上演するだけではだめなのです。もっと重要なことは、自分の行動の上に貫徹実行することです」と述べ[29]、自らの語った理想を実現すべく陝北の黄土地帯に入っていったのである。「奇談怪論」を突破口に＜実権派＞攻撃を狙っていた＜文革派＞が、労農兵学生の模範として彼女をとらえようとするのは当然のことであろう。

この時期、中国のマスコミは＜文革派＞の政策の宣伝の道具であることに徹していた（姚文元のコントロール下におかれていたという）。高紅十をとりあげたのは、決して、個別のジャーナリストの眼や感覚ではなく、彼女のなかに規範性を見い出した、計算し尽くされた政治の意志にほかならなかった。

7

これまで、１９７５年の政治状況の中での『理想の歌』と高紅十の位置をみてきた。だが、高紅十その人について、私はまだほとんどふれていない。次は彼女について語るべき段取りである。

高紅十には、自分のことを書いた二篇の文章がある[30]。内容はほとんど同じで、二篇ともそう長いものでもない。１２００万の＜上山下郷＞知識青年の中には、高紅十以外にも、自分の体験を書き綴った文章を発表した人も少なくはない。知識青年を＜上山下郷＞に動員するため、また、彼らに努力目標を与えるために、模範的な知識青年の手記を集めた小冊子が数多く出版されたからである[31]。それらの文章は、農山村が自分達の

努力でどのように変化していったか、その中で自分達の思想がどのように変わっていったかを綴るものが大部分である。高紅十の手記もそうしたパターンをはみ出すものではないけれども、大学を卒業してから農村へ行く決意をするまでの内心の葛藤がやや具体的に書かれる点で、他の手記とは異なっている。いま、そこに焦点をあてながら、高紅十について述べてみたい。

高紅十は１９５２年に生まれ、北京の初級中学を卒業後、６９年１月、延安に插隊落戸した。６９年１月といえば、前年末に「知識青年は農村に行こう」という毛沢東主席の号令が発せられたばかりであり、知識青年たちの都市から農村への大移動が開始された時期である。前にもふれたように、６８年、６９年の初級・高級中学卒業生は選択の余地なくすべて農村にいかなければならなかった。高紅十の農村行がどの程度主体的なものであったかうかがうすべはない。

３年あまりの農村生活を、高紅十はかなり模範的に過したと思われる。その一端を私たちは『理想の歌』や『成長』（後出）など、彼女の作品から知ることができるが、要するに世間知らずの町の娘から階級的自覚をもった農民へと生長していったようだ。

７２年５月、彼女は延安から推薦されて北京大学に入学、中文系（中国文学部）文学専攻の学生として勉強をすることになった。入学したばかりの北京大学は、文革で批判されたはずの試験制度、つめこみ式教育などが行われており、その影響で思想感情が変わった、と彼女は書いている。こうしたなかで、彼女は最初の作品『成長』を書く。それは下放した知識青年が貧農下層中農の教育で成長していくという内容だったらしい。この処女作は中文系の雑誌『習作』に掲載され激賞された。三ヶ月後、彼女は大学に行けなかった青年が心の悩みを乗りこえることを描いた小説『路』を発表した。それは芸術的技巧をこらした作品で大学では前作以上の高い評価を受けた。ところが、この作品は延安に残っている知識青年や農民たちからはひどく反発され、不評であった。それは自分の思想が知識青年や農民たちから離れはじめたことを示すものだったが、自分はそうは思わず、彼らには文学がわからないのだと考えて自分を慰めていた、と彼女は回想している。この年の秋、北京郊外に開門辦学に出かけた彼女たちは、ブルジョア文人風の作品ばかり書いていた。

こういう彼女が変化していく転機が少なくとも三回あった。

最初は７３年初めで、この時期、北京大学では「右傾思想批判の大討論」が始まり、この討論の中で彼女は自覚を高め、自分の文芸思想はおかしい、それは「文芸は労農兵に奉仕する」という毛主席の文芸路線が自分の頭の中に根づいていなかったからだと考えるようになるのである。『理想の歌』が執筆されるのは、この年の夏からである。

二回目は７４年の開門弁学のときである。彼女たちは、プロ文革中の労働者の生活を描いた短編小説を書くという任務をもって、北京西郊の門頭溝炭鉱に行き、そこで労働者とともに働き、彼らと「批林批孔」をやり、彼らから階級教育を受ける。この開門辦

学を通じて彼女は、自分は世界観を徹底的に改造し、労農兵と結びつく道を永遠に歩まねばならないということをはっきりと自覚する。同時に、かつて『路』がうまく書けなかったのは、自分が農村に住みついて革命をやるという思想を堅持していなかったからだということにも気づくのである。

第三の転機は卒業創作のときである。７２年５月に入学した学生たちは、約三年半の学習を終え、７５年１０月に卒業することになっていた。文学専攻の学生たちは、労農兵の学生が入学してから卒業するまでの全過程を描いた短編小説を出すことになり、執筆を分担したが、たまたま彼女にあたったのが「卒業」の部分であった。ここで彼女は非常に苦しむことになる。筆がなかなか進まないのである。

「一番むづかしいのは、小説中の主要な英雄人物――つまり、卒業して郷里に帰り、農業をやる大学生の思想境界（を描くこと）だった。私はその気持ちを自分のものにできず、（従ってまた）うまく表現するすべもなかった」

小説は、労農兵の大学生が卒業後ふたたび農村に帰るという筋であった。それは彼女自身が考えたものか、他から与えられたものかは別にして、多分それ以外には考えられない筋書きであった。労農兵の大学生を描く以上、主人公は卒業後必らず農村に行き農民にならねばならない――それが、時代と政治の要請であったから。その筆がなかなかすすまないのは、彼女自身に悩みがあったからだったろうか。

こうしたとき彼女の「入党紹介者」（中国共産党に入党するさいの紹介者。ただこのとき彼女がすでに入党していたかどうかはわからない。彼女に相当大きな影響力を行使しうる人物であることに違いはない）が訪ねてきて彼女と話しあい、「鍵は君自身にある。君自身が思想的にスッキリしたら、小説は書けるようになる」という。それを聞いて彼女は激しい内心の葛藤に襲われる。「革命的な文章を書こうと思えば、まず革命的人間になれ」それはわかる。彼女は自問する「農業従事の申請をする報告を書こうか書くまいか。書くとすれば、なぜ。書かないとすれば、何を恐れて？」

『理想の歌』の作者の、このような苦悩は私たちを驚かせるだろうか。もし彼女が兵士の作品を書かねばならなかったとしたら、彼女の作品のテーマが教師になることだとしたら、彼女は兵士や教師になろうかどうかと悩んだだろうか。その場合、彼女はそれほど悩みはしなかっただろう。人は医者を描いた作品を書くために医者にならねばならないことはなく、農民にならねば農民が書けないということもない。だが、彼女も「入党紹介者」もそのようには考えなかった。革命的な文章＝労農兵大学生が卒業して農民になるという作品を書くには、まず革命的人間になれ＝大学生である自分が卒業して農民にならねばならない、と考えたのである。

「（自分が農村に行く申請を）書かないのは、苦しみをおそれ、疲れをおそれ、農村に生涯暮らすことをおそれているからに違いない。革命の先輩が全国を解放するため流血の犠牲をおそれなかったのに、われわれ后代が平和な時期に農村に入るのを、なおグズグ

ズとためらっている。これは根本を忘れたのでなくてなんだろう？若者がただ個人の利益だけを考えていたら、中国革命はどうして継続できるだろう。共産主義がいつ実現するだろう」

高紅十はこのように、悲しいほど純粋に自分を追いつめていく（高紅十のこうした論理のうちに農村に行った若者たちが、自己の置かれた特殊な状況によって形成せざるを得なかった＜上山下郷の思想＞の核を読みとるのは決して見当はずれではあるまい）。

こうして彼女は延安に帰り、農民になる決心をする。しかし、この決心は「最も科学的な世界観」たる「マルクス・レーニン主義と毛沢東思想」によって基礎づけられたものでなければならない、と彼女は考える。「この瞬間私は、学習したいというかつて経験したことのないほど切迫した気持ちを感じました」と彼女は述懐している。自己の決心をこうした学習でゆるぎないものとした彼女は、六月七日中国共産党延安地区委員会に手紙を書き、同時に学校に対し，「卒業後は延安に帰って農民になり、共産主義の新しい人間になりたい」という申請書を正式に提出した。

彼女の卒業創作『成長』[32]の完成もおそらくその頃のことだったであろう。『成長』というタイトルは、好評を博したという処女作と同名であり、多分、それが下敷きになっているに違いない、暁京という娘の物語である。中学を卒業して延安にやってきた娘が、大学を卒業して再び延安に帰ってくるというストーリーのこの小説は、その多くが、延安の農村でなにも知らない娘が周囲の農民の暖かい励ましで自覚をもった農民に育っていく過程の描写に費やされている。現実の高紅十は思い悩むが、作品の中には、娘が、大学を卒業してからどうしようと悩む場面などはない。暁京は、卒業したら農業大学をつくろうという明確な目的をもって大学に入り、そして帰ってくるのである。

彼女の手記には読むものの心を打つなにものかがあったが、『成長』にはそれがない、と私には感じられる。おそらくそれは、彼女が内心の葛藤をそのまま投げ出すのでなく、苦しみを経て、それを解決してしまった者の重味を背景にしてこの作品を書いたからであろう。彼女は＜説教者＞ではないにしても、一種の＜啓蒙者＞の立場に無意識のうちに立っており、それがこの作品をありきたりの＜上山下郷＞小説にしてしまっている。高紅十が、もし自分の悩みを読者とともに悩むという立場でこの作品を書いたとしたら、あるいは＜上山下郷文学＞に新しい境地を拓いたかもしれないのだが。

１９７５年１０月２８日、北京大学は集会を開いて、高紅十ともう一人卒業後農村に行く学生を激励した。「奇談怪論批判」がはじまったのは、その一週間後のことであった。

一年後の７６年１０月「四人組」が逮捕された。そのニュースを、彼女は陝北の山奥できいたであろう。そこでも規模は大きくないながら祝賀集会が持たれたに違いない。ドラが打ち鳴らされ、爆竹の音がにぎやかに黄土高原を流れていったに違いない。そのとき彼女が感じていたものがなんであるか、推測するすべは私たちにはない。しかし、彼女も耳にしたに違いないドラや爆竹の音は、彼女を主役にした一つの時代の終わりと、

彼女の作品を生んだ一つの集団の解体とを告げる葬送の曲のようにひびいたと、いま私たちは確言することができる。

おわりに

高紅十たちの世代を想うとき浮かんでくるあるイメージがある。それは、例えば<辺境にむかって駆ける若き戦士の群れ>と<築かれるはずだった「理想」を辺境に埋めて帰還する沈黙の若者たち>とから構成される１２００万の青年の像である。この青年たちは、歴史の先頭を疾走する者の自負と、その歴史から突然はじき出された者の当惑や憤激や悲哀の感情を共有することでくくられる世代である。

どの世代も自らの歌を持つわけではない。しかし、高紅十の世代は疾走する者の自負を誇らかに歌う『理想の歌』をもった。だが、それは理不尽に歴史から捨てられた者の当惑や憤激、悲哀をうたう後半部と合わせてはじめて完成するはずの<未完成の悲劇>であった。『理想の歌』のそういう意味での<未完成性>こそ、文革期文学とその担い手たちの運命をなによりもよく象徴するものである。

（１９８１年8月２０日）

［注］

1 「関于建国以来党的若干歴史問題的決議」（1981年6月27日通過）、邦訳『中国共産党の歴史についての決議』外文出版1981年。

2 吉川幸次郎「中国に使いして」（『吉川幸次郎全集』第22巻、筑摩書房）に75年3月の経験として北京大学の教授陣との座談会の模様を記すが、その中に「またむこうがわの出席者には、農村から推薦されて大学に在学する学生二人が含まれ，その一人高紅十嬢は、「理想の歌」集団創作者の一人としての経験を、雄弁に活発に語った」（442頁）とある。高紅十を紹介したものとしては、これが唯一のものではあるまいか。

3 『理想之歌』人民文学出版社、1974年9月刊。なお76年4月に第二版が出ている。第二版では相当な削除と訂正が行われている。削除はページ数にして１３頁、約６０行に及ぶ。なお小稿での翻訳は第二版に拠った。

4 蒋士枚、石湾「喜看群雁報春来――読長詩《理想之歌》」『光明日報』1975年12月11日。

5 張勇は天津の労働者家庭出身、女性。天津市中学紅衛兵代表大会河西分会常務委員だった。1969年4月黒龍江省（今は内蒙古）に挿隊。70年6月、水に落ちた生産隊の羊を救うために死んだ。１９歳だった。その事績は知識青年の模範として新聞等で大きく報道された。

6 金訓華は上海市呉淞二中を卒業、上海市中等学校紅衛兵代表大会常務委員であった。1969年5月黒龍江省の農村に定住。８月国家の物資を救出するため洪水で死んだ。彼の事績は、祁学金「革命的青年の手本――金訓華」、謝香雲「訓華は労働者階級のりっぱな後継者」などに詳しい。（いずれも『人民中国』1970年4月号所収）

7 高紅十「在毛主席文芸路線指引下放声歌唱」（『光明日報』1976年1月7日）および、「回延安当農民」（『光明日報』1976年2月5日）。

8 「一份来自清華、北大教育革命的報告――一代新人的《理想之歌》」（『光明日報』1975年12月11日）

9 朱克家は1969年4月上海海南中学卒業後雲南省シーサンバンナのアイニー族の人民公社に下放。第四期人民代表大会常務委員、第十期候補中央委員。その事績は「農村也是大学――記上

海知識青年朱克家在雲南省孟臘県孟侖公社鍛煉成長」（『農村也是大学』上海人民出版社、1973年２月刊所収）、「听毛主席的話在広闊天地里大有作為」（『志在農村――上山下郷知識青年談体会』人民出版社、1974年２月刊所収）にみえる。程有志は1964年河北省張家口市の高級中学卒業後、涿鹿県温泉屯大隊に定住。科学的農業で増産をもたらした。「科学種田闖新路」（前出『志在農村』所収）、「做社会主義時代的新農民」（『我們需要農村』農業出版社、1974年８月刊所収）など参照。平陸県毛家山の天津知識青年グループ３０人は、1968年暮れ徒歩で天津を発ち、５０日を費やして69年２月毛家山につき、そこに定住した。その事績は「在農村大学中茁壮成長」（前出『志在農村』所収）、「敢叫毛家山変大塞」（前出『我們需要農村』所収）などにみえる。

10 『広闊的路』人民文学出版社、1974年11月刊。天津の知識青年グループを扱った「“扎根園”里苹果紅了」、程有志の事績を述べた「広闊天地有志人」、雲南省の生産建設部隊に入った北京の知識青年・辛温を扱った「和金鶏納一起成長」の三篇の文章が収録されている。

11 注（8）に同じ。

12 注（4）に同じ。

13 臧克家「《理想之歌》賛歌」（『光明日報』1975年12月26日「光明」14期）

14 「理想之歌」『人民日報』1976年１月25日の「戦地」５期。なお、この号に掲載された『理想之歌』は人民文学出版社版の原詩に比べると、改行、字句の異同をふくめてごくわずかの改訂がみられる。

15 司馬長風『文革後的中共』時報文化出版事業有限公司、1977年12月刊。

16 この点については私見の一端を現代中国学会1980年全国大会で述べたことがある（「批林批孔運動は虚妄であったか」現代中国学会『現代中国学会―１９８０』1981年６月刊、28―30頁）

17 北京大学、清華大学大批判組「教育革命的方向不容篡改」『紅旗』1975年12期。

18 「北京大学面貌発生深刻変化」（『人民日報』1975年12月８日）

19 注（8）に同じ。

20 注（4）に同じ。

21 注（7）に同じ。なお黄声笑（1918年生）［文革前は、黄声孝の名を使っていたが文革期に“孝（xiao）”を同音の“笑（xiao）”に変えた。］は、湖北省の長江航運管理局に働く労働者の詩人、殷光蘭（1935年生）は安徽省肥東圏に住む女性の農民民歌詩人。時永福（1945年生）は解放軍所属の詩人で、黄声笑と殷光蘭は文革前から活躍していた詩人。時永福は文革期に頭角をあらわした詩人である。これら労農兵を代表する詩人に高紅十を配した編集者の意図は、彼女を労農兵出身の代表として位置づけることにあったと思う。

22 注（14）に同じ。

23 注（7）に同じ。

24 「（大陸来港人士座談会）文革十年来的中国」（『七十年代』1977年２月号）、洪芸「中共的知青下放政策」（『七十年代』1977年６月号）に拠った。

25 「毛主席革命路線的輝煌勝利、文化大革命的豊碩成果、一千二百万知識青年光栄務農」（『人民日報』1975年12月23日）

26 『１９８０中国百科年鑑』中国大百科全書出版社、1980年８月刊のうち「教育」535―540頁による。

27 注（18）に同じ。

28 注（8）に同じ。

29 注（18）に同じ。

30 注（7）に同じ。

31 手許にあるものをあげれば、注（9）に引いたもののほかに、『広闊天地大有作為』内蒙古人民

出版社、1973年6月、『陽光雨露育新苗』上海人民出版社1873年11月、『一代新人在成長』農業出版社1974年2月、『知識青年在延安』陝西人民出版社、「第一集」1971年9月、「第二集」1972年11月、「在広闊大地里成長」農業出版社1975年9月、『紅色家信』上海人民出版社1973年11月、『喜看新苗茁壮成長――《紅色家信》第二集』上海人民出版社1976年3月などがある。これらはたまたま書店で購入したものにすぎず、実際に出版されたものはこの何十倍にもなると思う。

[32] 『成長』は、北京大学中文系文学専業72・73級年入学生の作品集、凌霄署名の『碧緑的秧苗』人民文学出版社1976年2月に収録されている。著者の署名はないが、「后記」に「『成長』の作者は、自分の実際行動でその光りきらめく続編を書くために、……延安地区に帰り、引き続き生産隊に住み込んで農民となり……」とあることから高紅十の作品であることが知られる。

[補注]

高紅十は1951年11月生まれ。1969年中学後延安に挿隊。1972年労農兵学生として北京大学中文系に入学。75年卒業。文革後陝西人民出版社文芸編集室編集者、雑誌「緑原」編集者、北京「法制日報」文芸部記者、編集者などを歴任。また中国作家協会魯迅文学院、北京大学作家班を卒業。中国作家協会会員。(中国作家協会創作連絡部編『中国作家大辞典』中国社会出版社、1993年12月による)

高紅十が1994年1月送ってくれた「間世前后」(『東方文匯』1993年、安徽文芸出版社所収)によれば、「理想之歌」の作者は高紅十を含め4名、いずれも1972年北京大学中文系に労農兵学員として入学した。他の3名は以下の通り。

陶正、男性。清華大学付属中学(高校)2年生で陝西省延川県に挿隊した。93年現在北京歌舞団一級劇作家。中国作家協会会員。全国優秀短編小説コンクール入賞。

張祥茂。男性。北京の中学1967年卒業生。内蒙古豊鎮県に挿隊。93年現在中国政府商業部政策法規司(日本の省庁の「局」に相当)幹部。

于卓、女性。北京の中学1962年卒業生。黒龍江省北大荒兵団に入隊。93年現在「科技日報」記者。北京作家協会会員。

またこの文章によれば「理想之歌」は謝冕北京大学教授の意見を求め、人民文学出版社から出版されるときの担当編輯者は楊匡満(詩人)と孟偉哉(作家)だった。

第5章

紅衛兵運動の挽歌をうたう詩人*

—郭路生の詩について—

朦朧詩を含むいわゆる新潮詩のことを調べていくと、北島、多々らその中心的な詩人たちが大きな影響を受けたと告白する[1]一人の「地下」[2]詩人に出会う。それが郭路生である。私も七、八年前に《今天》に関連してこの詩人のを知り、その作品を翻訳紹介したことがある[3]。そうした機縁で、気にはなっていたのだが、その伝記や作品については紹介に書いた以上のことを知ることができないでいた。しかし、近年断片的ではあるが彼について種々の紹介記事や回想などが現れ始め、いろいろなことが分かってきた[4]。更に在外研究中の九三年、北京で面識を得た林莽から郭路生の詩集『食指　黒大春現代抒情詩合集』[5]（以下『食指詩集』と記す）をプレゼントされ、その作品を纏まった形で読むことができるようになった。

郭路生は中国現代詩史上重要な位置を占めるべき詩人であるのに、まだしかるべき位置を与えられていない。おそらく、彼の詩を詩史的に評価しようとすれば、文革期文学における位置付けと、八〇年代新潮詩の先駆としての位置付けという二つの問題を解決しなければならないのだが、現在の中国では文革期文学も新潮詩もともに<学>的対象として十分成熟していないからであろう[6]。小稿は、注4、注5の資料に拠りながら、主として〈文革期文学〉の視点から郭路生と彼の詩の位相を考えてみようとするものである。文革期文学は、わが国でもまだ成熟した研究対象となっているとはいい難い。小稿がその出発点の一つになることができれば幸いである。

1　郭路生について

郭路生の伝記は『食指詩集』に簡略な記事とそれを補足する林莽の序文がある。まと

---

* 本章は、神戸大学中文会誌『未名』13号（1995年3月刊）、14号（1996年3月刊）に上下2回に分けて連載した同名の論文に基づく。郭路生（食指）は現在最も人気のある詩人の一人となり、資料の掘り起こしも進んでいる。それらを使用して書き改めるべき点の多いことを自覚しているが、そのいくつかについては補注として文末に加え、今は旧稿のまま掲げる。

まった資料としてはこれが唯一のものである。初めに、この資料を主にその他零細な記事も取り入れて、彼の伝記の輪郭を素描しておきたい。

郭路生は本籍山東の人、ペンネームを食指という。１９４８年１１月２１日河北省巣県で生まれた。両親は解放軍とともに行軍中であり、母親は分娩後ただちに彼を抱いて数里を歩き、この地の唯一の病院に辿り着き、そこでようやく臍の緒を切ったのだという。「路生」という名は「路上（行軍途中）に生まれた」というところからつけられた。王光明によれば、両親は解放後「父親は中級幹部、母親は小学校長であった」(7) というが、彼と親しい作家・阿城は父親は「一定の地位のある人物」だと書いている(8)。後で紹介する恋愛や結婚の状況から見ても、おそらく中級幹部より上の（いわゆる十三級以上の）高級幹部だったと思う。

幼時から聡明で勉強好き、五歳の時にはもう文が書けたという。正義感が強く、文革中取り囲まれて殴られている教師を助けようとして迫害されたことがある。高校生だった６５年ごろ、張郎郎らの秘密サークルに出入りし、年長の文学青年たちと親交があった。張は中央美術学院院長だった画家・張仃の息子。文革前「太陽縦隊」という文学サークルを作り、それが反動組織とされて逮捕され、十年間獄中にあった。文革後「中国美術報」、香港企業の北京駐在事務所などで働き、８９年天安門事件後国外に出て、今はアメリカに住む。六五年ごろ張郎郎は牟敦白という人物の家で開かれていた秘密の集まり［中国語では<沙龍>。以下サロンと書く］の常連だった。このサロンには甘恢理［文革期に密かに流行した小説「当芙蓉花重新開放的時候」の作者。経歴など不詳］などが出入りしており、後には郭路生も参加するようになった。張郎郎はここで郭路生と知り合った。張郎郎によれば、このサロンで彼らは「秘密の詩作遊戯、飲酒。金はなく、安物の酒だけ。つまみはいつも漬物」という時間を過ごした(9)。こうした経歴が示すように、張郎郎とその仲間たちは当時の中国社会の認めるはずのない、デカダンな雰囲気を生きた青年たちだったようである。文革前夜の中国社会で年長の文学青年たちと、知られれば身の破滅をもたらすかもしれない危険な「遊戯」にふけった体験、あるいはそのサロンで学んだことが、郭路生の詩の色彩に大きな影響を与えていることは疑いない。

文革中から詩を書き始めたというが、今見ることのできる最も早いものは６７年の作品である(10)。その「相信未来」は当時の紅衛兵に愛唱され、彼の名を高めた。１９６８年１２月山西省汾県杏花村に挿隊［中学、高校の卒業生が農山村に入り定住すること］した。７０年工場に入り労働者となり、７１年には解放軍に入隊した。これは同世代の青年の中ではかなり恵まれた経歴といってよく、その背後には革命幹部だった両親の影響力が感じられる。軍隊時代に「強烈な刺激を受け、精神分裂」を病むようになる。精神を病むほどの「強烈な刺激」が何だったかはよく分からないが、楊健によれば、当時郭路生は賽福鼎［サイフジン］の娘と悲劇的な恋愛をし、それが発病と関係があるのだという（詳しくは後述）。サイフジンはウイグル族の高級幹部で長く中共新疆ウイグル自治区第一書記を努め、６８年には新たに成立した自治区革命員会主任、７２年には解放軍新疆軍区政治委員だった。彼はこの病気のため人に侮辱され、馬鹿にされ、背後から指差される［中国では人を指差すのは大変な侮辱である］といった屈辱を体験した。「食指」［人差し指］というペンネームはこの体験に由来する。

１９７３年軍籍を離れ、一時、光電技術研究所で働いた。はっきりした時期が分からないが、結婚・離婚の経験がある。相手は中国共産党の指導者だった李立三の娘である。李立三は左翼冒険主義と批判された三〇年代の李立三路線の責任者で、解放後は党中央委員、党華北局書記、中央人民政府委員などの要職にあった。文革開始の際も華北局書記だったが、６７年５月紅衛兵・造反派による抄家［不法家宅捜索］を受け、以後激しい闘争にかけられた。６月造反派に逮捕され、私設監獄で死んだ。逝去の翌日その夫人李莎と二人の娘も逮捕された。娘たちは釈放されたが李莎は八年間獄中にあった。李立三が正式に名誉回復されたのは８０年３月のことである(11)。郭路生が結婚相手としたのはこの二人の内の一人だった。知り合った事情も、結婚や離婚のいきさつも明らかでないが、一つ明らかなことは郭路生の生活圏がこうした政治的上層社会に属していたことである。

７３年には精神病が悪化して長期入院した。入院中も断続的に詩作は続けていた。多々は７４年に郭路生と知り合ったが、当時彼は「精神崩壊」だったと書いている(12)。７８年末《今天》が創刊されると、彼の作品が次々に発表され始める（後述）。しかし病気は依然一進一退の状態だったようである。八〇年代初めのころの郭路生について阿城はこう書いている。

「郭路生は「精神の崩壊」後、安定医院で治療した。彼は安定医院の模範的病人だった。いつも自分でおかしいぞと思うと、十四番のバスで安定医院に行った。症状が重いと、暫く入院し、それから十四番に乗って帰った。十四番は徳勝門内大街を通る。郭路生は行き帰りに私の家の前で下車し、入ってきてだべることがあった。だが彼がよくだべりに来たというのは、彼がしょっちゅう精神病の発作を起こすという意味ではない。しょっちゅう来たというに過ぎない。私も阜城門外の彼の家に行ったことがある。両親と一緒に住んでおり、建物は典型的な五〇年代のソ連式の単元楼だった。そこでぎょうざを食べたことがある。煮えて皮が破れた、具は大雑把な切り方だったがいっぱい詰まっていた。／冬になると郭路生は「豚の耳」といわれていた帽子を被った。この手の帽子は六〇年代を過ぎると跡を絶ったが、路生は依然上手にそれを被っていた。ある人達は流行の装いをすると立派にみえる。ある人々は、例えば郭路生がそうだが、装いが流行であろうがあるまいが、やはり品格がある。路生がノックすると、窓ガラスの向こうに彼が見える。目を上に向け、両手を袖に入れ、静かにドアが開くのを待っているのは、雪の夜に柴の扉を叩いている古人といった風情があった。」（阿城「昨天今天或今天昨天」）

八〇年代以後の郭路生は、阿城の回想に現れるような、入院や退院を繰り返しながらひっそりと日々を送る精神を病む詩人として生きている。９３年、彼の詩は俄に脚光を浴び、北海公園近くの文采閣で彼の詩をテーマに討論会が開かれたという(13)。５月には黒大春との共著の形式でではあるが、詩集（前出『食指　黒大春現代抒情詩合集』）も刊行されている。そして恐らくこうした動きを受けて《中国作家》９３年３月号が彼の詩をまとめて掲載した。詩集収集の作品によれば９３年現在、彼は北京市の第三福利医院に入院中である。

2　「相信未来」

郭路生の名が最初に知られるようになったのは、その詩「相信未来」が紅衛兵たちによってによって手書きで広まったからである。「相信未来」―「未来を信じる」という己れ自身の確認とも、「未来を信じよう」という仲間に対する呼び掛けともとれるこの詩の末尾には「一九六八年・北京」と記されている[14]。

相信未来	未来を信じよう
当蜘蛛網無情地查封了我的爐台	蜘蛛の糸が俺の爐台を無情にも封印してしまったとき
当灰燼的余烟嘆息着貧困的悲哀	灰燼からまだ微かに立ちのぼる煙が貧困の悲哀を嘆いているとき
我依然固執地鋪平失望的灰燼	俺は相変わらず失望の灰燼をしつこく平らにならし
用美麗的雪花写下：相信未来	美しい雪片で書き残す―　相信未来、と
当我的紫葡萄化為深秋的露水	紫色の俺の葡萄が更けゆく秋の露と化したとき
当我的鮮花依偎在別人的情懐	俺の鮮花が他人の気持ちに寄り添っているとき
我依然固執地用凝霜的枯藤	俺は相変わらず霜の降りた藤の枯れ枝でしつこく
在凄涼的大地上写下：相信未来	凄涼たる大地に書く―　相信未来、と
我要用手指那涌向天辺的排浪	俺は天のかなたに押し寄せるあの波を手で指差そう
我要用手掌那托住太陽的大海	俺は太陽を支えているあの大海原を手で支えよう
揺曳着曙光那枝温暖漂亮的筆杆	明け方の陽光をゆらゆら揺るがせている暖かく美しいあの筆で
用孩子的筆体写下：相信未来	子供の字体できちんと書く―　相信未来、　と
我之所以堅定的相信未来	俺が断固として未来を信じるわけは
是我相信未来人們的眼睛	未来の人々の目を信じるからだ
她有撥開歴史風塵的睫毛	彼女には歴史の風塵を払い除ける睫毛があり
她有看透歳月篇章的瞳孔	歳月の篇章を見通す瞳があるからだ
不管人們対于我們腐爛的皮肉	俺たちの腐乱した皮と肉
那些迷途的惆悵、失敗的苦痛	彷徨の悲しみ　失敗の苦痛に
是寄予感動的熱泪、深切的同情	人が熱い感動の涙　深い同情を寄せようと
還是給以軽蔑的微笑、辛辣的嘲諷	軽蔑の笑い　辛辣な嘲諷を寄せようと
我堅信人們対于我們的脊骨	俺は断固として信じる　俺たちの背骨
那無数次的探索、迷途、失敗和成功	あの無数の探索　彷徨　失敗と成功に
一定会給予熱情、客観、公正的評定	人々が必ずや熱情こもる客観的で公正な評価を与えてく

	れるだろう、と
是的、我焦急地等待着他們的評定	そうなのだ　俺は彼らの評価を待ち焦がれている
朋友、堅定地相信未来吧	友よ　断固として未来を信じよう
相信不屈不撓的努力	不撓不屈の努力を信じよう
相信戦勝死亡的年軽	死に打ち勝つ若さを信じよう
相信未来、熱愛生命	未来を信じ　生命を熱愛しよう

１９６８年・北京

この詩の書かれた１９６８年は中国共産党中央が紅衛兵運動を終結させる意志を固めた年である。

もともと紅衛兵は６６年５月に生まれた。郭路生十七歳の年である。彼らは自ら紅衛兵とは毛主席の革命路線を守る反修防修の尖兵なのだと考えていた。この年８月毛沢東が紅衛兵の「造反」を支持し、彼らを接見したことから紅衛兵は急速に全国に広まった。紅衛兵たちは「旧世界」を破壊し毛沢東の革命路線の貫徹する新世界を創り出すべく、学園から街頭でて過激な活動を開始した。四旧［旧文化、旧思想、旧風俗、旧習慣］打破のスローガンの下に文物の破壊、ブルジョア的と見なされる衣服を身につけた者への攻撃、伝統ある商店の襲撃、由緒ある地名の変更などが次々に行われた。この他に反革命修正主義路線を歩むとされた指導者や旧地主、資本家の居宅の襲撃、個人への暴行なども頻発した。北京市だけでも８～９月の二か月間で一千人以上が殺され、四千九百余の文物が破壊され、三万三千六百余戸の住宅が「抄家」と称する不法な捜索・襲撃に遭っている。同年九月以降、紅衛兵たちは「串連」［経験交流］と称して国内を移動しはじめた。「串連」は交通機関は無料、各地での宿泊、食事には国家機関の費用補助が行われた。紅衛兵以外にも多くの青年がこれに参加、全国を移動した。地方に出掛けた紅衛兵にはそこの紅衛兵とともに地方党機関やその指導者たちの襲撃を行う者も少なくなかった。各地の党機関、政権機構は軒並み機能を果たさなくなった。大学から小学校まで授業は停止、工場でさえ生産中止をして「革命」を行うところもあった。これが少なくとも現象的に見た紅衛兵運動とその結果の素描である、紅衛兵運動が全国に政治秩序の混乱、経済的損失をもたらしているのは確実であった。

こうした運動が党や国家の利害と衝突するのは当然である。張春橋、江青ら中央文革小組は初め紅衛兵組織を自分の統制下におき、彼らを利用して実権派を叩こうと考えていたようだ。しかし紅衛兵組織の中には中央文革小組に言うことを聞かず、むしろ実権派を擁護するグループもあった。６７年に入ると中央の政治闘争を反映して紅衛兵組織は大きく二派に分裂、それは末端組織にまで及び、両派は学園内外で多数の死者をだすほどの激しい武闘を展開するようになる。また８月にはイギリス大使館に乱入、放火するなど外交関係にも影響する事件を起こすまでになった。中央文革小組は事態収拾のため６７年３月武闘を中止し「革命的大連合」を実現するようよびかけ、９月には周恩来、江青、陳伯達らが首都の大学紅衛兵組織の代表を集め「今は正に紅衛兵たちが過ちを犯す可能性のある時期だ」という毛沢東の意見を伝達したりした。毛沢東のいう「過ち」

とは紅衛兵運動が党や国家の利害を浸食しその統制をはみ出して暴走することだった。１０月党中央は「学校に戻って革命をやる」方針を打ちだし、大学から小学校までの授業再開を決めた。しかし紅衛兵は社会と学園を動き回り、全国的な武闘は依然として続いた。

こうした事態を背景に毛沢東は紅衛兵組織の解体を決意するのである。６８年７月２７日、解放軍と労働者代表によって組織された「工人宣伝隊」が大学など学校に入った。これは紅衛兵の武闘を終わらせ、学園を正常化するための実質的な軍事管制であった。紅衛兵組織はこれに抵抗、例えば清華大学では紅衛兵側の発砲で工人宣伝隊に五名の死者と多数の負傷者が出た。２８日夜明け、毛沢東は林彪らとともに北京の大学紅衛兵組織の重要指導者五人を呼び付け、学校内の武闘と混乱を迅速に終わらせるよう厳しく要求した。これは実際には「紅衛兵に歴史の舞台から退場するよう要求する」ものであった。８月５日毛沢東はアフリカの賓客からプレゼントされた金色のマンゴーを首都労働者毛沢東思想宣伝隊に贈った。その意味は明白であった。学校に次々と宣伝隊が進駐し始めた。８月２６日「人民日報」に姚文元の論文「工人階級必須領導一切」が発表され宣伝隊が学校に長期にわたって駐留し学校を指導しなければならないと述べていた。６８年夏の政治劇は、紅衛兵たちにとっては恐らく事態の唐突な変化であった。毛主席の革命路線を守る反修防修の尖兵だったはずの自分たちが、外から入ってきた宣伝隊の管理下におかれることになった。「文革」はもはや自分たちの手の届かぬところに遠ざかってしまったのである[15]。

「相信未来」はこうした歴史的文脈の中で読む必要がある。第一連と第二連は運動の突然の終焉に対する批判である。第一連冒頭の一節「爐台」とは「コンロやストーブの上面の平面で物を置く所」（『中日大辞典』）である。かつて赤赤と燃えていた「爐」は火が消えはや蜘蛛が糸を張ってそこに近付けないようにしているが、しかし「俺」はまだくすぶり微かな煙を立ち上ぼらせる灰を執拗に均し、そこに「相信未来」と書きつける、というのである。ここに描かれた情景からかつて理想に燃えて紅衛兵運動に参加した青年の鬱屈した挫折の姿を読み取ることはたやすい。「爐」は燃え盛っていた紅衛兵運動や文革の理想の、「蜘蛛の糸」はそれを禁じた政治の力の比喩であろう。「無情」や「貧困」には政治の指導者に対する憤懣無念の思いが込められていようし、「嘆息」「失望」という語は紅衛兵たちの状況を物語っていると考えてよかろう。第二連も同じである。「紫色の葡萄」や「鮮花」は運動や理想を象徴し、「更けゆく秋の露と化す」や「他人の気持ちに寄り添う」が運動の挫折の、「凄涼たる大地」が紅衛兵たちの目に映じた退潮期の文革の比喩であることも確かだと思う。第三連以下は、未来の評価を信じて運動の退潮期を乗り越えようとする作者（たち）の断固たる姿勢を形象化したものであろう。

文革の時期（いやそれ以前の十七年の共和国の時代に）一人の人間の精神世界の風景を、このように悲劇的な情念に塗り込めて描き出したものは誰もなかった。それは個人的な悲劇などあるはずがないことを建て前とする共和国に対する異議申し立てにほかならず、一種の〈政治犯罪〉を構成したからである。だが郭路生はこのように生々しく紅衛兵の心情の真実を綴った。その詩は公的な世界で流布することはできなかったし、七〇年代初めには江青から名指しの批判さえ受けた。だが正にその故に、郭路生の名とそ

の「相信未来」は六〇年代末期の中国に密かに伝わっていった。楊健は次のように記している。

「《相信未来》というたった一編の詩によって、食指（郭路生）の名は満天下に轟いた。彼の詩は当時の青年の間に密かに非常に広範囲にる流伝していった。山西、陝西北部であれ、雲南、海南島や北大荒であれ…およそ知識青年のいる場所であれば、手書きの食指の詩が秘密裏に伝わった。当時の人々は食指について様々な推測をし、神秘的に言い伝えた。」（楊健『文化大革命中的地下文学』）

では、知識青年たちはこの詩をどう読んだのだろうか。林莽はこう回想している。

「瞬く間にもう二十数年がたった。あれは“文化大革命”の時期のことだが、私は挿隊落戸の小屋の中で初めて彼の詩を読み心を揺さぶられた。私はあの仄の暗くゆれる小さな灯を今もなおはっきり覚えている。“当蜘蛛網無情地查封了我的爐台／当灰燼的余煙嘆息着貧困的悲哀／我依然固執地舖平失望的灰燼／用美麗的雪花写下:相信未来……”理想と憧憬が不意に破滅したあの時代、望みもなく憂いと悲しみの僻地での下放生活の中で、辺境と農山村に赴いた何万もの青年学生の心の中で、食指（郭路生）の詩は限りない回想と渇望を呼び起こしたものだった。あの文学のない時代、空漠としたわれわれの精神世界の中では、彼の詩こそがわれわれに一条の暖かい陽光をそそいでくれたのだ」（林莽「生存与絶唱」）

郭路生はこのように六〇年代末期の中国に、彼の世代の精神の風景を歌う歌手、あるいは内面の真実を記録する記録者として登場してくる。

ところで「相信未来」という詩の題名には、郭路生よりもう一つ上の世代の青春にまつわるエピソードが秘められている。ここではやや迂遠にわたるがそのことに触れておきたい。詩人・郭路生を生み出した環境を説明することにもなると思うからである。

近年、とりわけ天安門事件以降国外に出た文学者たちの回想等によって次第に分かってきたことだが、六〇年代の北京には高級幹部や知識人の子弟が作ったいくつかの（或いはいくつもの、というべきかも知れない）地下文芸サロンがあった。サロンといっても多くは彼らの通学する名門中学［高校］の同級生の集まりで、主な活動も「黄皮書」［幹部だけに購読が許される内部出版の小説］の読書会、自分たちの書いた作品を持ち寄っての批評会、朗読会、西洋音楽のレコード観賞会といった活動が中心だったようである。そうしたサロンの一つに前述の張郎郎［中央美術学院の学生］らが６３年に結成した文学グループ「太陽縦隊」があった。しかし結成大会を開いて数日後このサークルは自ら解散した。張郎郎の北京一〇一中学時代の同級生だった郭士英［郭沫若の息子で当時北京大学哲学科在学、Ｘ小組という哲学サークルを組織］のサークルが摘発され逮捕されたからである。一方、中央美術学院には画学生のサロンもあり、張郎郎はそのメンバーとも親交があった。６４、５年ころその一人袁運生の卒業制作「水郷的回憶」がブルジョア美術観の産物とみなされ批判されることになった。これを聞いた張はその絵を

学校から盗みだした。絵がなくなったため批判はできなくなった。これは重大な政治事件とされ公安機関が駆けつけて調査したが、結局当局は犯人を見付けることができなかった。１９６６年張は「太陽縦隊」、袁運生の絵、秘密のサロン活動等種々の理由で公安に追われ、南方に身を隠す。そして逃亡直前にサロンの仲間王東白のノートに「相信未来」と書き残したのだという。そして郭路生の「相信未来」は張郎郎のこの語をそのままタイトルにしたのだというのである。張はその回想記にこう書いている。

「郭路生（食指）が“幸存者詩歌節”［幸いにも生き残った者たちの詩歌祭］の参加の誘いに私を訪ねてきて、食指［人差し指］で私を指しながらこう言った。「遠慮することはありませんよ。僕のあの《相信未来》の詩は、あなたから題をもらったんですから」あの名作については、私も獄中で聞いたことがある。七十年代に地下でその名が轟いた時期がある。白洋淀の好漢たち［文革期に河北省白洋淀に下放していた北京の文学青年たち］は、ほとんど皆知っており、読んでいた。ある者は、あれは火種を手渡したのだ、と言った。／あの「相信未来」という四文字が、たとえ私が先に言ったものだとしても、それが何だというのか。本当の力は彼の詩自体に、彼の誠実真摯に、彼の敏感に、彼の激情にあるのだ。」（張郎郎「“太陽縦隊”伝説」）

「相信未来」とは、自らの行為や思想は否定されたが、しかし後世は必ずやそれを正当に評価してくれるであろうと信じる〈確信犯〉の言葉である。張郎郎の行為は〈たった一人の反逆〉だったが、しかしそれは六〇年代中国の政治や社会道徳に対する同世代の青年の異議申し立てを代表していたといえよう。後世はそれを理解するであろう――「相信未来」にはそういうメッセージが込められていた。郭路生が張郎郎から借りたのは単なる文字だけではなかったであろう。

3　孤立と幻滅―「命運」その他

郭路生の詩で今読むことのできる最も早いものは６７年の作品である。「命運」「魚群三部曲」がそれで、それに次ぐのが６８年の作品群、「烟」、「酒」、「相信未来」、「我最後的北京」などであり、やはり紅衛兵の間で書き写され広まった。阿城は６９年内蒙古に挿隊したが、そのときそこで知り合った挿隊仲間から「酒」を見せられ自分のノートに書き写したと回想している。６８年にやはり内蒙古に挿隊した北京女子師範大付属中学（高校）の卒業生斉簡は「命運」を読んだときのことを「これらの詩句を心の中で繰り返し吟唱した。まるで自分の心から沸き出してくるような、自分の血管の中を流れているような気がして、激しく心揺さぶられた」と書いている[16]。

命運	運命
好的声望是永遠找不開的鈔票、	善き名声は永遠にくずせない紙幣
壊的名誉是永遠掙不脱的枷鎖；	悪しき名誉は永遠に脱げないカセ

如果事実真是這様的話、	もし事実が誠にそうだとすれば
我願在単調的海洋上終生漂泊。	俺は単調な海上で生涯漂っていたい
哪兒找得到結実的舢舨？	どこに行けば頑丈なサンパン（運搬用の小船）
	が見付かるだろうか？
我祇有在街頭四処流落、	俺はあちこちさすらうだけ
祇希望敲到朋友的門前、	友の戸を叩き
能得到一点菲薄的施舎。	いくらかの施しを貰えればと願うだけ
我的一生是輾転飄零的枯葉、	俺の一生は転々と転がり散る枯れ葉
我的未来是抽不出鋒芒的青稞；	俺の未来は穂の出ない裸麦
如果命運真是這様的話、	もし運命が本当にそうだとすれば
我願為野生的荊棘高歌。	俺は野のイバラのために声高く歌いたい
哪怕荊棘刺破我的心、	たとえイバラが俺の心臓を刺し破ったとしても
火一様的血漿火一様地燃焼着、	火のような血漿が真っ赤に燃え
掙扎着爬進喧鬧的江河――	もがきながら騒々しい江河に這い入るのだ―
人死了、精神永不沈黙！	人が死んでも精神は沈黙せずに生きつづける！

１９６７年

冒頭の対句は北島の「回答」の書き出しを連想させる。「回答」の冒頭が七六年当時の中国の状況を述べたのだとすれば、「命運」の書き出しはその十年前、文革初期の社会状況（ないしは社会意識）に対する詩人の認識を述べたものである。どんな「善き名声」も何の役にもたたない。だが一旦「悪しき名声」（例えば反革命分子、裏切り者、右派分子等々のレッテル）を得たらもはや前途はない。それならば「単調な海上で生涯漂って」いる方がましだ。かといって自分を乗せて生涯漂うような船も見付からない。自分を受け入れてくれる友人の間を転々としながら生きるほかないのか。それが自分の運命だとすれば、俺は光栄ある孤立を甘受し、棘あるイバラ（他者を拒絶し不屈に生きる人）と連帯しよう。そのために肉体は死ぬとしても、その精神は生き続けるだろう。

こうした詩句の背後にはむろん、今日の勝利者は明日の敗者、昨日の革命家が今日は反革命として追放されるといった変幻極まりない現実が横たわっている。表面的に読むと、詩人はそういう現実を逃避して「単調な海上で生涯漂っていたい」といっているように見える。しかしそれでは第三、第四連の断固たる姿勢と矛盾する。この詩には紅衛兵として旗幟を鮮明にしながら闘いの日々を送った詩人の体験が強く反映されているように思う。それを根拠に、私は、ここのところを「こういう変幻極まりない時代を乗り切るために、多くの人々は態度を曖昧にし、旗幟を明らかにしない生活を送っている。だが精神性を欠いたいい加減な生活をして何になろう。それぐらいなら旗幟を鮮明にして生涯海上に漂うような孤立の生き方を選ぶ」という意味に取りたい[17]。

この詩の読みとして私が重要だと思うのは、この詩から闘いに勝利した者の声を聞き取ることができないという点である。文革は始まってようやく一年、紅衛兵運動が絶頂

期にあった６７年、郭路生はすでに闘いに敗れた者の歌を唱い始めている。

「烟」は次のように書かれる。

烟	煙
燃起的香烟中飄出過未来的幻夢、	燻りはじめた煙草の中から未来の幻夢が飄い出したことがある
藍色的雲霧是掙扎過希望的黎明。	青い雲と霧が希望の黎明を妨げたことがある。
而如今這烟縷卻成了我心中的愁緒、	だが今や　この煙草の煙は心中の憂いの緒となり
匯成了低沈的含雨未落的雲層。	集まってどんよりした雨雲の層となった。
我推開明亮的玻璃窓、	俺は明るいガラス窓をおし開け
迎進郊外田野的清風。	郊外の田野を吹く清風を入れた。
多想留住飄散的烟縷——	飛び散る煙の糸を残しておきたい——
那是你向我告別的身影。	あれは俺に別れを告げる君の姿だから。

１９６８年

タバコを喫う。煙の彼方に「未来の幻」を追う。だが、やがて煙は「希望にみちた黎明」を遮る雲や霧のイメージに変わる。タバコを喫う詩人の胸に憂愁がひろがる。そうした思いを振り払おうと、煙のこもった部屋に清々しい外の風を入れる。しかしそれは「未来」をも追い出すことだ。

煙の彼方に彼が眺めた「幻夢」が何であったかは、書かれていない。しかしそれが文革に賭けた紅衛兵たち夢や理想であったことは疑いないと思う。「煙」はしかしそういう夢や理想を妨げる何か——その実体は煙のように朦朧として定かではない——や、そのために胸に広がる得体のしれないもやもやとした感情（不安や不快や憂い）をも象徴しているだろう。詩は、紅衛兵運動に確信をもてないでいる青年の心情を表現しているといえる。政治過程としての、権力闘争としての文革はなお続いているが、郭路生の心の中では文革はもはや煙のように不確かな存在となっている。

４　悲恋—「酒」「還是干脆忘掉她吧」

酒	酒
火紅的酒漿彷彿是熱血釀成、	火のように赤い酒液はまるで熱い血で醸成したようだ
歓楽的酒盃是盛満瘋狂的熱情。	歓楽の酒盃は狂気の熱情を盛っている。
如今、酒盃在我的手中顫慄、	いま酒盃は俺の手のなかで震えている
波動中仍有次你一双美麗的眼睛。	波動の中にはなお君の美しい目がある。
我已在歓楽之中沈酔、	俺は歓楽の中でひどく酔っている

但是為了心靈的安寧、	しかし心の安寧のために
我還要干了這一盃、	やはりこの一杯を飲み干し
喝尽你那一片痴情。	君のあの一片の痴情を飲み尽くそう。

恋の歌であろう。恋といえば楊健は陳小雅という人物の回想に基づいて、郭路生が当時新疆ウィグル自治区党書記であった賽福鼎の娘・賽莎莎に恋したこと、彼の詩の多くは賽莎莎に書き与えられたものであること、しかし賽家は彼らの恋を許さず、それが郭路生の精神病をもたらしたものであることを紹介している[18]。だが、この詩も賽莎莎に捧げられたものなのかどうか、今確かめる材料はない。次の詩も同じ時期の――これはもうはっきりと恋を歌った詩である。

還是干脆忘掉她吧	やはりきっぱり彼女を忘れよう
還是干脆忘掉她吧、	やはりきっぱり彼女を忘れてしまおう
乞丐尋不到人世的温存、	乞食には人の世の温かさなど見付けられない
我清楚地看到未来、	俺には未来がはっきり見える
漂泊才是命運的女神。	漂泊こそ運命の女神だ。
眼泪可是最貼心的愛人、	涙は最も心の通い合う恋人？
就象露珠親吻着花唇、	露の玉が花の唇に口づけするように
苦澀裏流露着浸泌的甘美、	苦渋の中に次第に滲み出る甘美が姿を現す
甘美尋不到一屑俗塵。	甘美には俗塵など見付けられはせぬ。
幻想可是最迷人的愛人、	幻想は最も魅惑的な恋人？
就象没有站穩脚跟的初春、	足元ふらつく初春のように
一手扶着摇曳的垂柳、	片手はゆらゆら揺れる枝垂れ柳にもたれ
一手招迴南去的雁群。	片手は南に行った雁の群れを招き返す。
繆斯可是最漂亮的愛人、	ミューズ（詩神）は最も美しい恋人？
就象展翅飛起的鴿群、	羽を広げて翔び立つ鳩の群れのように
遅緩地消失在我的藍天裏、	ぐずぐずと俺の青空に消え
只留下鴿鈴那嫋嫋的余音。	鳩の鈴のあの嫋々たる余韻を残すだけ。
眼泪幻想啊終将竭尽、	涙の幻想よ　それも終いには尽きるだろう
繆斯也将眠於荒墳。	ミューズも荒れ塚に眠るだろう。
是等愛抛棄我呢？	恋人が俺を捨てるのをまつか
還是我也抛棄愛人？	俺の方も恋人を捨てるのか？
還是干脆忘掉她吧、	やはりきっぱり彼女を忘れてしまおう
乞丐尋不到人世的温存、	乞食には人の世の温かさなど見付けられない

我清楚地看到未来、　　俺には未来がはっきり見える
漂泊才是命運的女神。　　漂泊こそ運命の女神

ここに吐き出されているのは、諦めようとして諦めきれぬ恋の未練である。ここで重要なのは郭路生が「俺」を「乞丐（乞食）」と形容していることである。なぜ「乞食」なのか。これは恋人の親たちから言われた言葉なのではないか。郭路生はこのころすでに賽莎莎と恋に陥っていたのではないか。新疆ウィグル自治区党書記のサイフジンはいわば新疆の王である。「門当戸対」［家柄のつりあい］という語は社会主義中国でも、とりわけそうした観念と最も遠くなければならないはずの高級幹部によって形成される上流社会では死語ではなかった。ウィグル族社会では家柄の観念は濃厚であった。サイフジンは自らも詩人だったがこうした伝統観念から自由であったとは考えにくい。郭路生と賽莎莎との恋が成就しなかった最大の理由は、イスラム教徒であるウィグル族と非イスラムの漢族との結婚に対する危惧だったと思われる。事実その後サイフジンは解放軍の大将だった葉剣英の孫と自分の娘との結婚もその理由で拒否している[19]。だから家柄の問題だけが障害になったとは言えないけれども、党の高級指導者で、新疆の名族たる賽莎莎の親の眼に郭路生など「乞食」同然に映った可能性はあり、そうしたやりとりのあった可能性も排除できない。以上まったくの想像にすぎないが「乞食」という語にこだわったのは、郭路生の詩でしばしば自分を否定的な存在に例える表現が現れるからであり、この詩がその最初のものだからである。

5　上山下郷―「這是四点零八分的北京」

１９６８年１２月２２日は文革、特に紅衛兵運動にとって重大な日付である。この日《人民日報》が「知識青年が農村に行って貧農下層中農の再教育を受けることは大変必要である。都市の幹部とその他の人を説得して、初級中学、高級中学卒の自分の子弟を農村に送るよう動員をかけねばならない」という毛沢東の指示を発表した。この結果知識青年［都市の高校卒業生、ときには大学や中学卒を含むこともある］の農村定住運動、いわゆる「上山下郷運動」が全国に巻き起こり、かつての紅衛兵たちが続々と辺境の農山村に移り住んだ。こうして紅衛兵運動は実質的に終りを告げる。１２月２２日は紅衛兵運動が上山下郷運動へと質的転換をとげた、その終焉の日なのである。

その二日前の６８年１２月２０日の日付で、郭路生は「這是四点零八分的北京」という詩を書いている。上山下郷運動は毛沢東の指示より前に各地の紅衛兵たちの間で始まっており、例えば北京では六八年夏に最初の高揚があった[20]。２２日の指示はそれを政策として全国的に展開することを提起したものであった。もしこの日付を信じるならば、彼はこの日北京を離れて下放先の山西省汾陽県杏花村に向かったのである。

這是四点零八分的北京　　四時八分の北京
這是四点零八分的北京、　　これは四時八分の北京

一片手的海浪翻動；	一面の手の海が波のように揺れ動く。
這是四点零八分的北京、	これは四時八分の北京
一声雄偉的汽笛長鳴。	勇壮な汽笛が鳴り響いた。
北京車站高大的建築、	北京駅の巨大な建物が
突然一陣劇烈的抖動。	突然激しく震えた。
我双眼吃驚地望着窓外、	俺は驚いて窓の外を眺めている
不知発生了什麼事情。	何が起こったのか分からない。
我的驟然一陣疼痛、一定是	俺の心が不意に痛んだ　きっと
媽媽綴扣子的針綫穿透了心胸。	ママのボタンを縫う糸が胸を突き抜けたのだ。
這時、我的心変成了一隻風箏、	この時　おれの心は風箏（タコ）に変わった
風箏的綫繩就在母親的中。	風箏糸はママの手に握られている。
綫繩繃得太緊了、就要扯断了、	糸がきつく張っていまにも切れそうになった
我不得不把頭探出車廂的窓欞。	俺はしかたなく汽車の窓から顔を出した。
直到這時、直到這時候、	この時　ああこの時
我才明白発生了什麼事情。	俺はやっと何が起こったか知ったのだ。
——一陣陣告別的声浪、	——別れの声が波のように湧いては消え消えては起こり
就要巻走車站；	駅舎を巻き上げ連れ去りそうだ。
北京在我的脚下、	北京は俺の足元で
已経緩緩地移動。	もう　ゆっくりと移動し始めている。
我再次嚮北京揮動手臂、	俺はもう一度北京に向かって手を振った
想一把抓住她的衣領、	彼女の襟を掴もうと思った。
然後対她大声地叫喊：	それから大声で叫んだ
永遠記着我、媽媽啊北京！	「永遠に忘れないでくれよ　ママ　北京！」
終于抓住了什麼東西、	とうとう何かを掴んだ
管他是誰的手、不能松、	誰の手だろうとかまうもんか　緩めるな
因為這是我的北京、	なぜならこれは俺の北京
這是我的最後的北京。	俺の最後の北京なのだから。

１９６８年１２月２０日

郭路生の作品の中ではこれだけが異質だという印象を受ける。彼の詩はふつう具体的な事実をかなり抽象化し、それを悲哀や幻滅などの感情で染めあげるという手法を採るのに、この詩は事実に即きすぎているためだろう。しかしこの詩は郭路生詩の中では最も知名な作品の一つで、洪子誠『中国当代新詩史』などは高い評価を与えている[21]が、

私には完成度の高い詩とは感じられない。この詩は後に《今天》第四期（７９年６月）に発表され、これを初出とみなしていいが、一般の目に触れるようになったのは、そえより更に遅く《詩刊》８１年第１期に発表されてからのことだった。《詩刊》掲載作は初出と対照すると幾つかの語句の異同がある。洪子誠は《詩刊》掲載作を根拠に、後の朦朧詩を生み出すような心理的背景をこの詩に見ている[22]がいかがであろうか。この詩が文革期の知識青年の間で広く読み伝えられたが、その理由は、一つには市民的意識からみた上山下郷運動の一面という珍しい素材を扱っているため、もう一つはこの詩のリズムが音楽的に美しく、朗読にふさわしいからであろう。

農山村に赴く知識青年とその家族の駅頭での別れは六〇年代末から七〇年代半ばまで絶えず繰り返されてきた情景だった。多くの青年たちが毛沢東の呼び掛けを信じ、新しい可能性を求めて農村に赴いたであろう。だがそうでない若者も決して少ない数ではなかった。しかしそうした若者のいわば女々しい心情が、当時、文学として描かれることは有り得なかった。上山下郷運動が毛沢東の呼び掛けである以上、それに応じる青年たちが革命者でないはずがなかったからである。郭路生の詩は当時決して公の文字になることのなかった上山下郷運動の真実の一面（革命的な貌の下に隠された青年たちの女々しい心情）のほとんど唯一の記録である。そしてそのことが朗読に向くリズムを内在させていたことと相俟って、この詩を当時の青年たちの間に流伝させることとなったのである。

６　疎外感と怒り—「寒風」「憤怒」

下放先の杏花村は杜牧の「借問す酒家は何処に有りや、牧童遥かに指す杏花村」で知られる名酒汾酒の産地である。だがそこでの生活は決して愉快なものではなかったようだ。次の「寒風」は制作年代から見れば、下放先での体験を述べたものと思われるが、郭路生はこの詩でも「俺」を「四方を流浪する」「乞食」だと書いている。

寒風	寒風
我来自北方的荒山野林、	俺は北方の荒れ果てた山野から
和厳冬一起在人世降臨。	厳しい冬とともに人の世に降りてきた。
可能因為我粗野又寒冷、	俺が荒々しく凍えるほど寒いからだろう
人們対我是一腔的讐恨。	人びとは俺をひどく憎んでいる。
為博得人們的好感和親近、	人に好かれ仲善くしたいため
我慷慨地散落了所有的白銀、	俺は持ってる銀貨全部を気前よくばらまき
並一路狂奔着跑向村舎、	直走りに走って村の家々に向かい
給人們送去豊収的喜訊。	人びとに豊作の吉報を届けたものだ。
而我却因此成了乞丐、	だが俺はそのため反って乞食になり

四処流落、無処栖身。	四方を流浪し身を置くところもない。
有一次我試着闖入人家、	一度試しに人の家に押し入ってみたが
却被一把推出窓門。	ひと押しに窓と戸口から押し出された。
緊閉的門窓外、人們聴任我	人びとはぴたっと閉まった戸や窓の外で　俺が
在飢餓的暈旋中哀号呻吟	ひもじさに眩暈し悲しく叫び呻くのに知らん顔。
我終於明白了、在這地球上	俺にはとうとう分かった　この地球で
比我冷得多的、是人們的心。	俺よりももっと冷たいのは　人びとの心だ。
１９６９年夏	

上山下郷運動を賛美した詩として有名な高紅十ら北京大学工農兵学員による「理想之歌」では、農村に入った知識青年が貧農下層中農の教育によって成長していくさまが描かれている[23]。だが現実はやはり甘くはなく、下放した知識青年と受入れ先の農民との関係がうまくいかない例が少なくなかった。ただそうした事実が文学作品に描かれた例は、公然文学の作品にはまずなかった。郭路生詩のように地下で流通した作品にもそれがあるかどうか。ここに「寒風」と「人びと」との関係として描かれているものが、都会からやって来た、農作業もなにも知らない下放知識青年たちとそれを迷惑がる農民との関係の比喩であるというのが、私の理解である。もしそういう理解が正しいならば、ここには実際にはよく知られていながら、誰も口にしようとしなかった、当時の農村における下放知識青年の位置（歓迎されざるよそ者）が書き留められていることになる。

だが、この詩は必ずしも下放青年と農民の関係をテーマにしたものではないかもしれない。この詩の主人公（「寒風」「俺」）はもともと人に嫌われても仕方のない存在である。そうした存在がある時新しい土地にやってくる。そして、なんとかして新しい環境に馴染もう、そこに住む人たちに受け入れてもらおうと努力する。だが、結局受け入れられず、ついにはそこから弾き出されてしまう。これが詩を構成する物語であり、そこから生まれる主人公の疎外感、孤立感、そしてこんなに一生懸命やったのに、という屈折した怒りや敵意などが、この詩のポエジーを形成していると言える。だとすれば、それは嫌われものの紅衛兵たちが、その歴史的使命を終えて、社会各層に入り込もうとしたとき、社会全体から被らざるを得なっかったさまざまな抵抗の物語と読むことができる。それは下放先の農村に限らず、工場や商店や事務所など（あるいは家庭でさえ）、元紅衛兵たちの行く先々で普遍的に起こり得た物語だった。だとすれば、この詩は、新しい環境に入り込もうとして、疎外感や孤立感に襲われていた同世代の青年たちに共通の感情を定着したものということになる。私は先にも言ったように、この詩を下放体験を書いたものと見るけれども、このように個人体験を描いて、世代に共通な意識を獲得し得ている点に、郭路生詩の優点があるといわねばならない。

同じことは「憤怒」についても言える。「憤怒」は制作時期がはっきりしないが、おそらく同じ頃に書かれた、次のような作品である。

憤怒	憤怒

我的憤怒不再是泪雨滂沱、	俺の憤怒はもはや滂沱と流れる涙の雨ではない
也不是圧抑不住的満腔怒火、	押さえきれぬ全身の怒りの炎でもない
更不指望別人来幇我復讐、	まして人が復讐してくれることなど望みもしない
尽管曽経有過這様的時刻。	かつてそんな時もありはしたが。
我的憤怒不再是忿忿不平、	俺の憤怒はもはや鎮め難い不満ではない
也不是無休無止的評理述説、	止むことなく口を出る黒白の訴えでもない
更不会為此大声地疾呼吶喊、	ましてそのために大声で喚き叫ぶことなどありえぬ
尽管曽経有過這様的時刻。	かつてそんな時もありはしたが。
雖然我的臉上還帯着孩子気、	俺の顔にはまだ稚気が残り
尽管我還説不上是一個彊者、	自分が強者だなどとはまだ言えないが
但是在我未完全成熟的心中、	まだ完全には成熟していない俺の心の中で
憤怒已化為一片可怕沈黙。	憤怒はもはや全くの恐るべき沈黙と化している。

「もはや…ではなく、まして…ではない」というリフレインは、かつてはそうであったことを示している。かつてはどうであったか。かつては憤怒の余り滂沱たる涙を流し、抑え切れぬ怒りの炎を持て余し、誰かが復讐してくれればいいとさえ思った。かつては不平不満を抑えられず、自分を正当化する理屈をひっきりなしに述べたて、大声で叫びもした…。だが今それは「一片の恐るべき沈黙と化し」た。顔にまだ幼さの残る自分の心はもはや老成した成人のように情熱を失っている。

この詩の成立に何か具体的な物語を想定することが許されるなら、それは破局に終わった恋であろう。つまりこの詩は「酒」「還是干脆忘掉她吧」の系譜に連なる作品だというのが私の想像である。しかしこの詩もまた紅衛兵運動を闘った青年の、歴史から弾き出された憤激と、時間の経過とともに激した感情が宥められ、やがて「恐るべき沈黙」に変わって行く心情の変化を歌ったものと読むことができる。こういういわば痛ましい心情の成り行きは、普通人のそれであっても同情を感じさすものだが、紅衛兵世代は、そこに個々人の具体的な闘い――挫折の体験を投入しすることで、この心情を共有することができた。郭路生の詩が強い文学的共感をひきおこすことができた理由もそこにある。

7　被害者意識の歌―「瘋狗」

林莽は「１９６７―１９７０年の間に、食指は初期の創作における最も重要な作品を書き上げてしまった」、彼の初期の重要な作品は「ほとんど１９６７年と６８年の間に完成した」と書いている[24]。詩集には全て二十五首の作品を収めるが、そのうち制作時期のわかる二十一首中七首が６９年までに書かれている。われわれが次に読み得るのは七八年の日付をもった「瘋狗」である。林莽が「十年近い沈黙の後、７９年彼の短詩《瘋

狗》が再び人々の重視を引き起こした」[25] と言っているように、６９年以後の約十年、彼はほとんど作品を書かなかったようである。そしてこの十年の間に、伝記の項で紹介した農村を離れて工場労働者になり、解放軍に入り、そして除隊するという経歴があり、また賽莎莎との破局に終わった恋愛、精神病の発症といった体験が挟まれているわけである。

この間、郭路生の名は細々ながら非公然文学のネットワークを作り上げていた「地下詩人」たちの間ではすでによく知られるようになっていた。だが、彼の詩が印刷物の形で一般の目に触れるようになるのは《今天》を通じてである。《今天》は第２期（７９年２月刊）に「相信未来」「命運」「瘋狗」を掲載したのを皮切りに、「魚群三部曲」（３期）、「這是四点零八分的北京」（４期）、「烟」（５期）、「還是干脆忘掉她吧」「酒」（８期）、「憤怒」（「今天文学研究会資料」）と次々に彼の作品を載せた[26]。それらのうち、最も新しい日付（７４年）をもつのが「瘋狗」だった。詩の末尾に記された１９７４年という年代を信じるならば、これは郭路生が文革期に書いた最後の作品ということになる。だが、実はこの詩は詩集では７８年の日付になっている（詩の語句と構成は全く同じ）。その上、《今天》発表時にはなかった「致奢談人権的人們」（大いに人権を談ずる人達に）という副題がついている。「人権」という語およびその観念は７８年秋の北京の民主化運動で盛んに提起されていた。郭路生はそれに触発されてこの詩を書いたのではないかと思う。だが厳力にも「文革期には紅衛兵の中に彼の詩は流布していた。「我是一条瘋狗」は人口に膾炙したものだ」という回想[27] があるので《今天》掲載詩の「７４年」は誤植ではないだろう。とすれば、この詩の原形は七四年に完成していたが、詩人が７８年当時の民主化運動に触発され、詩の結びを「放棄所謂神聖的人権」と変え７４年の作品として発表した。だが詩集に入れるに当たって副題を添え最終稿の日付に改めた、と考えるのが一番合理的な解釈かもしれない。

瘋狗	狂犬
受够無情的戯弄之後,	情け容赦もなくたっぷりなぶりものにされた後
我不再把自己当成人看,	俺はもう自分を人と思わなくなり
彷彿我成了一条瘋狗,	まるで狂犬にでもなったように
漫無目的地遊蕩人間。	あてもなく人の世をふらついている。
我還不是一条瘋狗,	俺はまだ狂犬ではないから
不必為飢餓寒去冒風険,	飢えと寒さのために危険を冒す必要はない。
為此我希望成条瘋狗,	だから俺は狂犬になり
更深刻地体験生存艱難。	生存の困難をいっそう深く体験したいのだ。
我還不如一条瘋狗！	俺はまだ狂犬にも及ばない
狗急它能跳出墻院,	犬なら苛立てば塀を跳び越えて外に出ることもできる。
而我只能黙黙地忍受,	だが俺は黙って堪え忍ぶのみ
我比瘋狗有更多的辛酸。	狂犬よりももっと辛く哀しい。

假如我真的成条瘋狗,	もし本当に狂犬になったら
就能掙脱這無形的鎖煉鏈,	この無形の鎖から脱け出せるのに……
那麼我将毫不遅疑地	そうすればいささかのためらいもなく
放棄所謂神聖的人権。	いわゆる神聖なる人権など放棄するのに。

林莽によれば、郭路生が精神分裂症を発病し入院するのは７３三年のことである。精神病には大きく分裂病と躁鬱病の二つがあるといわれる。精神医学者の内沼幸雄によれば、分裂病によく見られる症状は妄想と幻覚で「その妄想としてよくみられるのは注察妄想（他人に付き纏われたり、見られたりすると思い込む）、被害関係妄想、迫害妄想などである。それらの妄想に共通するのは得体の知れない他者の出現である」。さらに分裂症には思考吹入、思考奪取等という「得体の知れない他者の巨大な力によって翻弄されるままとなる」症状があり、これに対抗するには「自閉よりほかに手段がない」のだという。また躁鬱病の特徴は「自己の無価値に対する妄想的確信」と「世間が自分の思いどおりになると思い込む」「自我感情の高揚した誇大妄想」にあるという[28]。

こういう記述を読むと「瘋狗」には「時代」という以外に特定のしようのない「得体の知れない巨大な力に翻弄され」「黙って堪え忍ぶ」より仕方のない郭路生の分裂症的感じ方と、自分を「人間と思わなくなり」「狂犬にもおよばない」と感じる鬱病の「自己無価値感」的感じ方の両方が混在しているように思う。想に過ぎない。郭路生の詩にはその初期から強い被害者意識（ときには被迫害者的意識）が見られ、それが彼の詩の魅力や迫力（時代を告発する力）の要因になっていたが、それは多分に生得の病的気質に起因するものだったのであろう。徐敬亜は《今天》の詩を論じた「奇異的光」の中で「瘋狗」を引いて「これは作者たちが発狂した自己の魂を嘲っているというよりは、むしろ発狂した時代を憤怒の鞭で激しく打ち据えていると言うほうがいい」と書いている[29]。だが私にはこの詩は彼自身の心の風景を描いているように思える。迫害や被害に過敏に反応してしまう彼の病的な感受性が写しとった心の世界は、そのまま時代における彼らの世代の悲劇的な位置でもあったのである。

8　文革期文学における郭路生詩の位置

以上郭路生の詩を文革期の作品を中心に紹介してきた。では「文革期文学」という視点からみた彼の詩の位置はどういうものだろうか。次にこの問題を考えてみよう。ただ、文革期文学という用語は、その内容規定も含めまだ成熟した用語ではない。そこではじめに用語の内容を簡単に説明しておきたい。

文革期文学の定義　ここで文革期文学というのは１９６６年―７６年の期間、つまり文革期に出現した文学（作品、批評、文学理論）を指す。従って文革後に書かれた、文革に取材した文学はここに含めない（これは「文革文学」とよぶべきであろう）。

二種類の文学　文革期の文学には、A、体制に公認された出版物の形で流布した文学

（これをとりあえず「公然文学」とよぶことにする）と、B、回覧や手抄、手紙などの形で個人やごく狭いグループ間で流布した文学（これを「地下文学」ということにする）の二種類があった。この二種の文学は基本的に交わることがなかったので、これを別々に考察するほかないが、地下文学については今のところ資料がほとんどない。そこで小論では、とりあえず先に公然文学について述べ、それとの対比で郭路生詩の特徴を考えることにしたい。

時期区分

文革期の公然文学にもその発展消長歴史があった。私見によればそれを大きく前期・後期の二つに区分することができる。前期は６６―７２年であって、いわゆる十七年の文学が批判され、文壇が解体した時期である。文学活動は紅衛兵などの新聞、雑誌に細々と展開されるに過ぎなかった。詩や民間芸能の形式を利用した実権派批判などが主流で、小説も文芸批評もほとんど見られない。いわば文革期文学の混沌・萠芽期といっていい。後期は７２―７６年で、停刊していた雑誌を復刊させ、労農兵出身の作家を養成し、既成作家を部分的に解放したりして、新興労農兵勢力による文壇構築をはかった時期である。いわば文革期文学の展開期である。ただそれも「四人組」の逮捕によって唐突に終焉する。

文学的特徴

次に文革期公然文学の特徴というものを考えてみる。今考えていることを列挙すると、次のような幾つかが挙げられる。

１　創作動機と主題の政治性（文革の政治過程のそれぞれの時期の政治目標に奉仕するという明確な創作目的、ないし動機がある）

２　作者の非私性・無名性・匿名性（作者は個人の私的な感情や思想を表現せず、仮想された集団［我々］の思想や感情を述べている。また作品自身がしばしば本名ではなく集団［例えば三結合写作小組等］の名で発表される）

３　言語・文体の戦闘性・煽動性（「敵」の暴露と打倒、「味方」の士気高揚にむけて読者の感情を組織しようとする言語・文体の意図的多用）

４　感性の偏向（感傷、哀感、繊細な［暗い・しっとりした］感性の徹底的排除、逆に豪快、粗放、殺伐、激越な［暴力的な、ドライな］感性の重視）

これはもう少し整理が必要だが、さしあたって文革期に書かれたいろんな文学作品の共通の特徴をこの四つにまとめてみたのである。

以上が私の考える、文革期公然文学の内容の概略である。次はこの規定を基準に、彼の詩の文革期文学における位置を探る段取りである。

郭路生の位置

まず郭路生の詩は個人の手抄の形で流布したものであり、地下文学に分類される。時期的に言えば、（詩集所収の作品に拠るかぎりでは）その執筆活動は６７―６９年の間に集中しており、公然文学の区分で言う前期に活躍した詩人ということになる。

作品の特徴はどうであろうか。

主題・創作動機

これまで見てきたように、彼の詩作品はそのすべてが、紅衛兵運動と上山下郷運動を

下降の感性で受け止めた知識青年の内面を主題としたものである。そこには、文革の政治目標に奉仕しようというふうな動機は些かもない。彼はひたすら彼個人の（郭路生という一個の青年の）内部世界の風景を描こうとしている。そういう点から言えば彼の詩のモチーフは極めて非政治的、私的、文学的なものであった。またこの点において、公然文学の多くがその文学的感性、文学の質において前の時代（十七年）の文学と繋がっていても、次の時代（新時期文学）に継承される「質」をもたないのに対し、郭路生詩は（《今天》の詩人たちを介して）新時期文学に繋がることができたのである。

心情的モチーフ(30)

その作品の心情的モチーフは孤立感、疎外感、被害感、憤激、悲哀感、自己無価値感といった、いわば負の感覚である。そういう心情を生み出しているのが、歴史の参与者であった者が突然その位置から追われた、文革運動から弾き出され、世に容れられないという被害者意識である。そして彼自身の気質的傾向がそれを助長していると思われる。

言語的特徴

言語の面では感傷的な、暗いイメージや情感を表す語彙が多用される点に特色がある。例えば、形容詞や動詞では悲哀、嘆息、無情、失望、凄涼、迷途、惆悵、失敗、苦痛、冷漠、、徘徊、昏迷、消亡、憤怒、漂泊、告別、呻吟、低沈、流落など、名詞では流浪児、乞丐、眼泪、枯葉、寒風、寒雨、細雨、泪雨、幻夢、命運、荒墳などがそれである。こうした語彙のこれほどまでの使用は、文革期だけでなく、それまでの解放後のどの詩作品にも見られない特徴である。

文学形式

文革期文学前期の作品、特に紅衛兵新聞などの詩作品はそのほとんどが絶句、律詩といった伝統的定型詩のスタイルで書かれている。郭路生はそういう伝統的なスタイルをそのまま用いていない。しかし、その詩は全て四句一連から成るという特徴をもつ。また、それらは短いもので二連（例えば「烟」）、長いものは三十七連（「魚群三部曲」）に及ぶが、各詩各連は現代漢語の範囲で緩やかな韻を踏んでいる。各連の字数は必ずしも一定ではないが、四句一連の内部は意味的なまとまりをもつ前二句と後二句の二つの部分から成るのである。こうした点からみて、郭路生の定型意識はかなり強いということができる。そしてこのスタイルは朗読に適し、彼の詩が広まるのに大いに与かって力があったと思われる。

最初にあげた四点の特徴を備えたものを文革期の公然文学のある典型というとすれば、郭路生の詩は、この四つのどの特徴も備えていない。彼の詩の特徴はどの一つをとってもこれらの対極にある。そういう点では彼の詩は「反」公然文学的あるいは「非」公然文学的といわざるを得ない。地下文学の文学的特徴を整理するにはまだ資料が少なすぎるが、郭路生詩の持つ右のような性格は、今後地下文学の特徴を考えるときの有力な材料になるだろう。

9　郭路生詩成立の根拠

さて、しかし、イデオロギー面で特に厳しい統制下におかれていた文革期に、どうして郭路生詩のような「反」文革的、あるいは「非」文革的作品が生まれ、流通することができたのだろうか。

その理由の一つは、文革という権力闘争が、権力闘争の必然として生み出さざるをえなかった膨大な敗者たち心情の存在である。

真善美の価値の判定を「党」に委ね、私的な真善美の価値判断を躊躇または停止する、というのが従来の感性の在り方であった。解放後の文学はそういう感性によって形成されていたし、そういう感性を盛った作品のみが流布していたといって過言ではない。「感性の在り方」に限っていえば、文革は、こうした在り方（「党」の判断以外の判断を許さない）を強化する運動にほかならなかった。だが、一方で文革は理念的な党権力を強化するために、現実に機能している党権力を解体一再編する激しい権力闘争であった。権力闘争の参与者たちはその過程で必然的に様々な人間性の悲劇や喜劇に出会わざるをえない。紅衛兵運動一つとっても、そこにはセクト間の対立抗争があり、家族や友人や自分の恩師たちとの対立、愛憎、集合別離といった体験があった。闘いの中では死や負傷、病気、裏切り、恐怖心、家族関係や集団内部での人間関係など、さまざまな理由で闘いから離脱したり、脱落したり、疎外されたりする者が生まれた。それとともに死者、負傷者、裏切り者、脱落者、挫折者、こうした闘いの敗者たちのいろいろな思い――恨み、悲しみ、諦め、嘆き、不安、孤独、閉塞感、無常感など――が生まれた。だが文革期の中国には、こうした負の感情は反社会的、非プロレタリア的だという共通の認識があった。個々人にはそれをを吐き出すことへのためらい、ぶちまけてはならないという自己規制が広く存在していた。こうした心情は中国社会の底に沈殿するほかなかったのである。こうした感情ははじめは運動における敗者個人のものでしかなかった。しかし６８年暮れ上山下郷運動が始まり、かつての紅衛兵全体が文革の政治運動から切り離される事態になるや、こうした感情はこの世代に共通のものとなったといえるだろう。郭路生の詩はそれを歌ったのである。

もう一つは、文革の権力闘争の結果、日常的な社会統治機能が弱まり、その空隙に「地下文学」を発生させ、その存在を許容する空間が生まれたということである。

繰り返せば、文革期の権力闘争の結果、日常生活の隅々まで貫徹していた党の支配機能が停止したり、混乱したりした。その混乱が社会に支配権力の及ばない空間を作り出していた。それは例えば紅衛兵の内の文学好きの仲間の小さなサークルだったり、知識人も含む秘密のサロンだったり、後には辺境の農山村に下放した青年たちの住むあばら屋だったりした。そうした空間内部には、公認の真善美感に必ずしもよらない、あるいは著しくそれに反するような作品が書かれても、それを正当に評価し、歓迎し、それを保護する人々が存在したのである。六〇年代の都市知識人社会にすでに秘密サロンの形で存在したこうした空間は、文革期には全国に拡大していた。その一つ一つは小さな点に過ぎなかったが、全国に散在する無数の点は友人同士の手紙のやり取りやノートの交換といった私的手段で繋がれ、その私的ルートを通じて、公的には流通しない作品が流布されていった。ある作品が流布するかどうかは全く個人の審美眼に拠った。余りうまい比喩ではないが、それは真善美の判定権を個人が奪還した感性と審美の共同体であっ

た。その領域がどれだけあり、その人口がどれだけか、誰も知らない。しかしそれは確かに実在し、そこでは不健康な主題も、退廃的な感情も、感傷的な文字も、個人がよしと判断すれば直ちに流通ルートにのって広まった。

文革期といういわば詩の困難な時代に、郭路生のような反時代的な詩が成立し、流布した根拠は以上の二点にあると思う。

以上をまとめれば、次のようになろうか。紅衛兵（政治的主人公、都市の知識青年）から下放青年（再教育の対象、貧困な農村の農業労働力）へのコースを辿った文革期の青年たちの心の底には「落魄者の悲哀」や「被害者の恨み」といった感情が澱のようにたまっていたと思われる。だがそうした感情は、それ自身が国家権力への批判であるため、公然化することはなかった。郭路生の詩は彼の同世代の心にたまったこのような感情（内面の真実）を歌ったものだった。それゆえ彼の詩は一定の普遍性をそなえ、広く紅衛兵＝下放知識青年たちに読み伝えられることとなった。しかし同時にそれは地下文学として流通するほかなかったのである。だがその詩が内面の真実を描いていたがゆえに、彼は八〇年代の新しい文学の源流になることができた。郭路生詩のこのような在り方は、文革期公然文学に対する彼の作品の優越性を示すものである。

終りに―郭路生詩の現在

初めにも紹介したように、９３年郭路生詩をテーマとする討論会が開催された。《中国作家》９３年３期は彼の詩をまとめて掲載した。様々な出版物に彼の名が現れ始めた。郭路生詩は二十五年の歳月を経て地下から地上に現れた。それは既成詩壇に彼を正当に評価しようという気運が生まれたということであろうか。むろんそうには違いない。しかし一歩進めて考えれば、そういう気運が生まれたのは、中国社会が文革体験を相対化（より正確には風化）しうるほどに〈成熟〉したためである。だが郭路生の詩は文革後の中国社会にすんなり適応し、体制にとって〈無害〉なものに変わっているのだろうか。私にはそうは思えない。文革期の公然文学に対するアンチであった彼の詩は、文革後の時代に対しても一つの〈異和〉として存在しているように見えるのだ。それは文革後の詩についても同様である。

人們会問你到底是什麼	人々は問うだろう　お前は一体何者かと
是什麼都行但不是詩人	何者だってかまわないが　詩人ではない
只是那些不公正年代里	あの不公正だった時代の
一個無足軽重的犠牲品	取るに足りない一人の犠牲者に過ぎない

「詩人的桂冠」の最終連、「一九八六年精神病院にて」とある。文革の記憶や意味が、八〇年代以後の中国社会の〈成熟〉とともに、日常性の中に拡散し、風化していくとき、彼は精神病院の孤立の中で生々しく〈あの時代〉と格闘している。その苦闘の中から紡ぎ出される詩は「あの時代」のことを語っているのに、現在（いま）の現実を描いている

ように見える。私たちは彼の詩に、文革後の社会の〈成熟〉必然的に生み出す新たな（現在の）敗者たちの感情（文革後の時代を告発する声なき声）を聞くことができる。これが郭路生詩の中国社会の現在に対してもつ意味である。

１９９５年５月６日未明
１９９６年１月整理

［注］

(1) 一々挙げないが、例えば北島は「私は一九七〇年から現代詩を書き始めました。当時私は北京の青年詩人の影響を受けました。彼の名は郭路生で、ペンネームを実子（食指の誤り―岩佐）といいます」（ミシェル・ボーナンら「訪問北島」《争鳴》1985 年８期）と明言している。江河は「郭路生を読んで初めて自分たちにも詩が書けるということを知った」（王光明『艱難的志向』［注４-B］に引く）と言っている。

(2) 「地下」の含意については本稿第９節参照。

(3) 拙稿「〈近代〉を獲得しようとする詩人たち―《今天》覚書き―」『中国詩人論　岡村繁教授退官記念論集』汲古書院、1986 年 10 月刊参照。

(4) 郭路生についてのある程度まとまった紹介に次のものがある。

A．阿城「昨天今天或今天昨天」《今天》1991 年３期。

B．王光明『艱難的志向―“新詩潮”与二十世紀中国現代詩』時代文芸出版社、1993 年６月刊の第三章、第四章。

C．楊健『文化大革命中的地下文学』朝華出版社、1993 年１月刊、の第三章。

D．『食指詩集』［注６］の林莽の序「生存与絶唱」。以下本文で阿城、王光明、楊健、林莽とあればそれぞれＡＢＣＤの資料に拠ることを意味する。

(5) 『食指　黒大春現代抒情詩合集』成都科技大学出版社、1993 年５月刊。全 78 頁、うち郭路生の作品は１―42 頁。

(6) 文革期文学研究はこれまでずっと無視されてきた。管見の限り、その最初のものは潘凱雄、賀紹俊「文革文学：一段値得重新研究的文学史」《鐘山》1989 年２期（なお《鐘山》同号は文革期文学研究特集）である。93 年１月に楊健『文化大革命中的地下文学』［注４－C］が出版されるや、これに刺激され謝冕ら「研究文革文学」《文芸争鳴》1993 年２期などが現れ、専論として新宇「“文革”詩歌略論」《斉魯学刊》1993 年３期、劉火「自卑与自大共演的悲劇―論“文革”的文学精神」《飛天》1993 年９期などが書かれている。

(7) 王光明（注４－B）による。

(8) 阿城（注４-A）による。

(9) 張郎郎「“太陽縱隊”伝説」《今天》1990 年２期。

(10) 王光明によれば最初に影響力をもった詩に「再掀不起波浪的海」（「もう波を起こせない海」）があり、紅衛兵の自己に対する信仰と動揺、幻滅を描いているという。

(11) この事情は、唐純良『李立三伝』黒龍江人民出版社、1984 年 10 月刊、および李永編『”文化大革命“中的名人之死』中央民族学院出版社、1993 年８月刊所載の「華北局書記李立三

之死」による。

(12) 多々「１９７０—１９７８北京的地下詩歌」《今天》1991年１期。

(13) 斉簡「詩的往事」《今天》1994年２期。

(14) 郭路生の詩は多分多くが手抄によって流布したためだろう、テキストによって字句の異同がある。小稿では基本的に『食指詩集』（注５）に従う。

(15) 以上の記述は主として火木『光栄与夢想—中国知青二十五年史』成都出版社、1992年８月刊によった。

(16) 斉簡［注13］。

(17) 『中国探索詩鑑賞辞典』河北人民出版社、1989年８月刊には「四点零八分的北京」と「命運」が採られている。ここの解釈は陳超の説から示唆を受けている。

(18) 楊健（注４－C）。その第３章。陳小雅の文は雑誌《海南紀実》（不詳）に掲載されているというが未見。

(19) 新疆師範大学講師リズワン女史（ウィグル族）よりの聞き取り（1995年４月）

(20) 杜鴻林『風潮蕩落　中国知識青年上山下郷運動史』海天出版社、1993年３月刊、その第２編による。知識青年の上山下郷運動については九十年代以降当事者たちによる歴史的整理が行われ始めており、注16の火木の著書などはその早い時期の成果である。

(21) 洪子誠・劉登翰『中国当代新詩史』人民文学出版社、1993年５月刊。

(22) 例えば第２連「北京車站高大的建築、突然一陣激烈的抖動」の「抖動」（震えた）が《詩刊》では「晃動」（ぐらりと揺れた）となっている。洪子誠はそれを「傾斜的感覚」と呼び、この感覚は「この世代の青年のうち比較的早く思考に入った者たちの心理状態」で「こういう精神的矛盾の存在を、新潮詩の懐胎・出現の心理感情的基礎あるいは背景と見なすべきだ」と書いている。

(23) 北京大学中文系文学専業72年級工農兵学員『理想之歌』人民文学出版社、1974年９月刊、に所収。なお拙稿「文革期文学の一面——高紅十と『理想之歌』を中心に」神戸大学中文会《未名》創刊号、1982年２月刊を参照されたい。

(24) 『食指詩集』［注６］の林莽の序「生存与絶唱」。

(25) 『食指詩集』［注６］の林莽の序「生存与絶唱」。

(26) 是永駿編「『今天』総目録（初稿）」《野草》55号、1995年２月を参照した。

(27) 内沼幸雄『羞恥の構造—対人恐怖の精神病理』紀伊国屋書店、1983年２月刊。その第５章の「対人恐怖から見た二大精神病論」。

(28) 許行「今天派和星星画派—在香港見到厳力」《九十年代》1985年６期。

(29) 徐敬亜「奇異的光—《今天》詩歌読痕」《今天》９期、1980年３月刊。

(30) 「心情的モチーフ」という考え方、およびこの節の着想は見田宗介『近代日本の心情の歴史流行歌の社会心理学』講談社学術文庫版（1978年４月）の恩恵を受けている。

［補注］

1．郭路生の作品集については、その後以下の２種が出版されている。

A．林莽・劉福春選編『詩探索金庫・食指巻』作家出版社、1998年６月

＊本書は９７年３月までに存在が明らかな作品131首のうち81首を収録する。巻頭に林莽によ

る「食指論」をおくほか、巻末に「食指（郭路生）生平年表」（写真付）「食指詩歌創作目録（現存部分）」が付されている。郭路生詩の研究資料としては最も基本的なものといってよかろう。編者の二人のほか、担当編集者として出版に当たった唐暁渡ら友人たちの友情が感じられる書物である。

B．食指『食指的詩』人民文学出版社、2000年12月

＊本書は2000年7月までの作品、合計122首を収める。97年3月以前の作品で、Aに収録しないものが35首含まれているから、文革期の郭路生詩の研究にはこちらが参照されるべきである。巻末に林莽による「食指（郭路生）年表」を付す。

2．資料の補足：小稿執筆以後に見た資料に次のものがある。

中国当代文学研究会、北京大学中国新詩研究中心、首都師範大学新詩研究室編集、首都師範大学出版社刊の詩理論雑誌『詩探索』1994年第2輯（総14輯）が特集（「関于食指」）を組み、林莽の郭路生論（「並未被埋葬的詩人――食指」）と詩人自身が自作について述べた文章（「《四点零八分的北京》和《魚児三部曲》写作点滴」）を掲載した。郭路生の文は短いものだが詩の背景を知る上で貴重である。

3．郭路生の近況。

2003年3月北京に行って郭路生に会った劉燕子氏（大阪の現代中国文学研究誌『藍』編集発行人）によれば郭路生は入院していた第三福利医院の看護婦と結婚し、すでに退院して自宅で暮しているとのことである（私信）。

（2000年3月）

資　料

第６章

文革期上海における文学出版物の執筆者たち*

１．

文革期文学について、全面的な評価を下すには、この時期の文学活動についての具体的な資料が蓄積される必要がある。その作業の一環として、１９７０年から７６年１０月までの間に、上海で出版された文学出版物について調査をおこなった。本章はその調査報告である。文学出版物の範囲は、小説、詩、散文（随筆）を主とし、短劇や演芸の戯曲もごく少数含んでいる。この調査を行った目的は、労農兵の業余作家とは具体的にどのような人々であり、重点的に養成の対象とされていたのはどういう人たちであったか、それらの業余作家たちは文革後の新時期文学の世界でも活躍したのか、また文革前から執筆を始めていた作家で、７２年ごろから執筆再開を許される人々がいることが知られているが、上海の場合それはどういう作家だったのか、等を明かにするためである。文革期文学の最も重要な刊行物だった『朝霞』叢書および雑誌『朝霞』は含んでいない。これは次章で示す。また、今回は調査の範囲を収集しえた書物のうち、単著のものは除き、複数の執筆者の作品を集めた書物（３節に示す３９冊）に限った。これは、調査の目的が労農兵業余作家の顔ぶれを知ることにあり、労農兵業余作家が単独で作品集を出す可能性は少なく、彼らの書くものは、多くこうした作品集に収められているからである。だが収書数が少ないため、資料的には限界がある。今後、増補を続けていきたい。

２．

はじめに単著文学出版物を中心にについて、文革期上海における文学状況を概観しておきたい。

６６年の文革開始後、江青ら文芸界の指導権を握った文革左派の手で、それまでの文芸界（中国での「文芸」は文学とその他の芸術、映画、演劇、美術などを総称していう）は解体されてしまう。文革左派の戦略は、彼らがブルジョア的、反社会主義的とみなしていた既成の文芸界をまず解体し、その廃墟（文革左派から見ればまっさらの土地）の

* 本章は平成９～11年度文部省科学研究費補助金による〈「文革期文学」の基礎的研究〉（研究課題番号：9010459）の研究成果の一部である。

上に、プロレタリアートの革命精神を身につけた文芸創作者たちの手で、新しい文芸の世界（これを仮に「労農兵文壇」とよぶことにする）を建設することだった。この夢想を実現するために、文革左派が始めたのが労働者、農民、兵士の中から文芸創作者を作り出すことだった。それが労農兵業余作家とよばれる人々である。上海で文学作品の類が出版されはじめるのは１９７０年からであるが、それはまず業余作家の作品の出版から始まるほかはなかった。試みに７０～７１年の出版物を見ると以下の４冊がある。（この時期は上海の出版機構はまだ再建されておらず、「上海市出版革命組」が出版元である。）

仇学宝『金訓華之歌』上海市出版革命組、1970年８月

上海海港工人業余写作組『海港紅旗』上海市出版革命組、1970年９月

九四二四工人写作班『鉄水奔騰』上海市出版革命組、1971年６月

上海中華造船廠工人創作組『船台春潮』上海市出版革命組、1971年９月

これらは、「写作組」「創作組」「写作班」と名前は異なっても、例えば『鉄水奔騰』の後記が、大型冶金企業による冶金工業の建設過程を第一線の労働者が描いたルポだと記すように、労働者の業余作家グループの手になるものである。また初期の文学出版物は個人名ではなく、さまざまな名の業余作家グループの集団創作という形をとるのが普通であった。

ところが、仇学宝『金訓華之歌』は、個人名で出版されている。異例である。おそらく文革期に最もはやく個人の名で出された詩集であろう。こうしたことがなぜ起こったのだろうか。仇学宝は1929年生まれ。上海の貧困家庭の出で、解放初期に入党、54年から詩作を開始、59年上海市作家協会会員となり、雑誌『上海文学』の編集者を経て62年から専業作家となった人物である。経歴からいって「文芸界の黒い糸」に連なるような詩人ではない。また、金訓華は、文革初期に上海市中等学校紅衛兵代表大会常務委員だった人物で、69年５月黒龍江省の農村に定住、８月国家の物資を救出するため山津波で死んだ「革命的青年の手本」（『紅旗』）として当時大きく宣伝されていた人物である。『金訓華之歌』はそういう政治宣伝の必要から作られた長編叙事詩だった。業余作家の手に余る仕事であり、専業詩人の手を煩わす必要があったであろう。文革開始間もなくすぐれた専業作家・詩人はほとんど打倒されていた。しかし政治的宣伝のためには、出身がブルジョア家庭ではなく、政治的にも旧文芸界の指導層とは無関係の、しかも一定の芸術的力量のある人間を使用する必要があった。仇学宝はそういう存在として登用されたのである。

3.

１９７２年は文革期文学がいよいよ新しい歩みをはじめる年である。文革で停刊していた地方の文学雑誌の復刊（『新港』→『天津文芸』、『河北文学』→『河北文芸』のように誌名を変えたものもある）がはじまる。辻田正雄が文革（一部は文革前）で停刊した31の雑誌を調査したところ[(1)]によれば、71年に復刊した『北京文芸』が最も早く、継

---

(1) 辻田正雄「中国当代文芸雑誌の変遷」神戸大学文学部東アジア研究センター『神戸大学文学部蔵　中国報刊目録』1983年３月、39 - 54頁。辻田は「1971年３月15日から７月22日にか

いで72年に復刊（あるいは誌名を変えて「創刊」）したものは９誌、73年８誌、74年５誌、75年５誌、76年２誌、それ以後１誌であった。上海は『収穫』の復刊がようやく79年、途中77年に『上海文芸』（79年１月から現在の『上海文学』に改名）の創刊があるなど他地区より遅れたが、これは74年に『朝霞』が創刊されるなど、文革の影響が最も深かったため再建に手間取ったためであろう。

その７２年、上海で文革期文学最初の長編小説が出版された。

上海県《虹南作戦史》写作組『虹南作戦史』上海人民出版社、1972年２月

である。これは上海近郊の農村の集団化を扱った作品で、土地改革から農業合作化運動への歩みを、社会主義堅持派（貧農・下層中農）と走資派（党幹部、地主・富農）の路線闘争として描いた小説である。

この小説は、文革期文学の中で大きな注目を受ける。それは小説の執筆グループ（写作組）がその後の「三結合」の原型になるものだったからである。「後記」によればこの写作組は、「貧農･下層中農の土記者を主体とした写作組」であったが、「写作組の中で、土記者と農村基層幹部の結合、業余と専業の結合を実行した」のだという。つまり、多少は文章の書ける素人の農民、文学は余りよく分からないが政治意識は高い農村の党幹部、「専業」（プロのもの書き作家、「後記」によれば「文匯報などの単位と少なからぬ同志」とある）この三者が協力して小説を書いたというわけである。また、作品は「1年近い時間で、4回、合計200万字近い原稿を書き、「意見徴集稿」を印刷、広く労農兵、革命的幹部、革命的知識分子の意見を聞き、再度書き換えをおこなって」完成したのだという。つまり『虹南作戦史』は、素人（労農兵）＝執筆・幹部（党）＝思想指導・専門家（作家）＝技術指導、という３結合グループによる創作、および作品をまず大衆に読ませて、その意見を聞いて書き改めるという、大衆路線による創作という新しい創作モデルを提示したのであり、その点で大きな注目を浴びることとなったのである。

「三結合」モデルには、もう一つ「文学創作は基本的に個人の精神労働だ」という考え、創作によって名を高め、利益をうるというブルジョア的観念に対する批判が含まれていた。周天の論文（「文芸線戦上の新生事物――三結合の創作」）[(2)] はもっぱらそういう観点から「三結合」を論じ、プロレタリア文化大革命は、文芸の黒い路線支配のもとでの、文学を個人の事業、名利を追求する道具とみなす局面を根本的に変えたが、その中から生まれた「三結合」は、それに参加した専業創作者たちが「創作私有」の観念を打破するのに役だっている、と述べている。

初期の文革期文学は、個人名ではなく集団の写作組の名とか、筆名で発表されることが多い。周天の文章は、その理由を反面から説明してくれているようである。つまり個人名で作品集を出すのはブルジョア的な名利思想（創作私有思想）に影響されているからだ、そういうふうに思われるようなことはしたくない、という暗黙の抑制が業余作家たちに強く働いていたことが想像されるのである。

けて、国務院の指示によって「出版工作座談会」が北京で開かれた。この座談会の報告に基づいて、文芸雑誌が復刊に向っていったと思われる」（41頁）と推測している。

(2) 周天「文芸線戦上的一个新生事物――三結合の創作」『朝霞』1975年12期

4.

７２年の上海ではこうした集団創作の作品だけでなく、５月、鄭加真『江畔朝陽』、6月、沙群『春風楊柳』、8月、周思良『飛雪迎春』など個人名の長編小説が出版されている[(3)]。全国的にみてもこの年には李雲徳『沸騰的群山』、黎汝清『海島女民兵』、李心田『閃閃的紅星』、鄭直『激戦無名川』など個人の作品が出版されている。作者はすべて専業作家であって、多く文革前の作品を書き換えて再版したものである。こうした状況は、労農兵作家を中心にした新しい「労農兵文壇」を建設するという文革左派の構想が直ちに実現するものではないことを示すものだった。

７３年には3月に叢敏『新橋』が出た。著者は個人名になっているが、実は前者は「崇明県革命委員会が組織した労農兵創作組」に「復旦大学中文系創作組」が参加した三結合の創作グループの筆名である。6月に郭先紅『征途』が出た。郭先紅は専業作家。「われわれは１９７０年秋に創作を組織することに着手した」とある後記からみて集団執筆かもしれない。９月には孫景瑞（解放軍作家）の『難忘的戦闘』が出るがこれは1958年に書かれたものである。詩集では6月に専業詩人の李学鰲『太行炉火』、７月に姜金城『海防線上的歌』が出ているが内容は６０年代の作品を書き換えて出版したものである。

文革左派による「労農兵文壇」建設の歩みが形をとりはじめるのは７４年と考えていいのではあるまいか。この年１月に創刊された雑誌『朝霞』は、“四人組”の陰謀文学の拠点として文革後激しい批判を受けるものだが、この雑誌の創刊を「労農兵文壇」建設の具体的な第一歩と見るのである。『朝霞』は文革左派が自らの文学理念を作品や評論として実現する場であり、同時に労農兵業余作家たちの発表の場でもあった。（『朝霞』については次章で述べる）

７４年9月、汪雷『剣河浪』が出版された。これは「上山下郷知識青年創作叢書」の１冊であった。この叢書が何冊刊行され、作者にどういう人がいたかを詳らかにしないが、翌７５年２月には章徳益、龍彼徳『大汗歌』（詩集）がこの叢書で出版されている。文革後新時期文学の旗手の一人となる張抗抗の長編小説『分界線』もやはり７５年に叢書の１冊で出版されている。７４年５月李良傑、兪雲泉『較量』が出るが、これは『朝霞叢書』の前身で７３年5月に出た「上海文芸叢刊」第１冊『朝霞』に「長編選載」として掲載されていたものである。

７６年には6月徐剛『潮満大江』（詩集）、莫応豊『小兵闖大山』（児童文学）が出る。徐剛は解放軍出身。労農兵の学生として北京大学で学び、卒業後故郷の崇明県党委員会写作組長だった。莫応豊は70年まで解放軍文工隊にいたが復員、71年から創作をはじめる。二人とも、労農兵業余作家とみなしてよかろう。

---

(3) いずれも上海人民出版社刊。以下特に断らないかぎり、すべて同社刊。

５．

以上、上海人民出版社刊の単著文学出版物を手がかりに、文革期上海の文学状況をスケッチしてみた。その結果、上海では７０年から単著文学出版物の刊行がはじまるが、７３年までは集団創作が主で、個人の名前はできるだけ出さない傾向があったこと、７２年『虹南作戦史』が出版されるが、これは「労農兵業余作家―党指導者―専業作家」の「三結合」創作モデルの原型になったこと、この創作モデルは「創作私有」のブルジョア的観念を打破し、作者が作品を個人の名で出版することを抑制する契機として働いたこと、文革前から創作活動をしており、当時の文芸界指導部との関係がうすく、出身も労農家庭であるような作家は、７０年ころから活動を再開していたこと、７２年から専業作家の個人作品が出版されはじめるが、これは旧作を書き直したものが多いこと、７４年ころから労農兵業余作家・詩人の個人著作も出版され始めたこと、などが分かる。

以上は単著文学出版物について見たわけだが、文革期には労農兵業余作家の作品を集めた小説集、随筆集、詩集の類が多数出版された。こうした出版物に作品の載った人々が文革期文学の担い手、「労農兵文壇」の構成員として期待されていた人たちであった。ではそれはどういう人々であろうか。

それを明らかにするために、筆者は１９７０～１９７６年の間に上海人民出版社より出版された３９冊の労農兵業余作家作品集掲載作品の執筆者調査を行った。その書誌的概要は次ページ以後に示す（ピンイン順）通りである。刊行時期で言えば、１９７０年２冊、７１年3冊、７２年２冊、７３年５冊、７４年９冊、７５年１２冊、７６年６冊である。抽出した作家数は延べ９９０名。重複をはぶけば８００名程度であるが、これを次ページに示す凡例に従い87頁以後に掲げた。

文革期上海文学出版物執筆者索引

凡例

1．執筆者は姓のピンイン順に従って配列した。

2．該当する出版物に執筆者の所属（職場）が記されている場合はそれも添えた。

3．（与某某）となっている場合は共著であることを示す。

4．集団創作である場合、執筆者として氏名の明らかな人名だけを採っている。

5．作品が収録されている出版物は、例えば《边疆的主人》は《边人》のように略記している。略記については以下を参照していただきたい。

［B］

《边人》《边疆的主人》

1975年5月刊、主に中ソ国境の黒龍江生産建設兵団に挿隊した知識青年の習作。「少年児童読物」。

《碧水》《碧水长流(短篇小说集)》

1973年12月刊。「文匯報」「解放日報」副刊に発表された上海の労農兵業余作家の成果.［C］

《雏》《雏鹰》

1974年4月刊。上海閔行地区の上海汽輪機廠、上海電機廠、上海鍋炉廠、上海重型機器廠、上海滾動軸承廠の労働者業余作家の叙事詩集。

《创作谈》《短篇小说创作谈》

1974年3月刊。上海師範大学中文系編。上海の労農兵業余作家の作品に関する創作の体得、評論。

［F］

《发光》《发光的年代》

1974年5月刊。電気工事等の労働者の物語。

［G］

《高度》《新的高度》

1971年9月刊。工業、農業、部隊、漁民、海員などの生活を描いた作品。

《工厂》《工厂天地有多大(散文集)》

1975年5月刊。閔行区工人業余作者の散文と上海電機廠五一大学文科班の集団創作。

［H］

《海底激流(小说・散文集)》

1976年6月刊。上海石油化総廠小説散文創作学習班メンバーによる小説、散文。

《焊花》《焊花朵朵》

1975年6月刊。造船工業をテーマにした小叙事詩集。作者は大部分が造船労働者。

［J］

《建设的脚印》

1976年5月刊。上海市建設工程局工会《建設者的脚印》三結合創作組作者の叙事詩集。

［K］

《快马》《快马加鞭》

1974年９月刊。上海市儀表電訊工業局工会業余創作組の１０名による９編。

［L］

《列车》《列车奔腾》

1974年11月刊。上海鉄路分局工人業余創作組のメンバーによる少年児童向け読物。

［N］

《农春》《农场的春天》

1974年７月刊。上海市属国営農場三結合創作班。「上山下郷知識青年創作叢書」の１冊。

［P］

《批林》《批林批孔诗选》

1976年６月刊。《批林批詩選》三結合編輯小組編。「本市の多くの工場、人民公社、部隊、機関、学校等の指導者、労農兵業余作者及び《文匯報》《解放日報》《朝霞》、上海市工人文化宮、各区・県文化館等の支持を得た」（後記）。

《浦江》《浦江哨兵》

1973年２月刊。上海警備区征治部編、２２名の１８編の作品集。

［Q］

《千歌》《千歌万曲献给党》

1971年６月刊。中国共産党５０周年紀念のために書かれた７２首の詩集。

《前进》《前进!》

1975年９月刊。前進農場業余大学の１５名による小説１０編、散文４編の作品集。

［S］

《颂》《颂歌献给毛主席》

1970年９月刊。文革発動以来の上海地区の詩歌作品。作者の多くは工場、人民公社、部隊などの所属。

［T］

《团结》《团结战斗的歌—热烈庆祝四届人大胜利召开》

1975年１月刊。上海の工場、農場、軍、大学など所属の業余作家の詩集。

［W］

《沃土》《沃土新苗》

1972年８月刊。上山下郷運動で辺境に行った知識青年を主人公にした短編集。上海市革命委員会上山下郷弁公室編。作者も知識青年か。

《五・七干校散文集》

1974年５月刊。上海市の各五七幹部学校に所属する業余作者による散文集。

［X］

《向阳》《向阳列车》

1971年９月刊。上海《文匯報》の副刊「風雷激」と《解放日報》副刊「看今朝」は1970年以来、業余作家の小説１００余編を掲載した。そのうちから選んだ３５編の小説集。

《小兵》《小兵上阵(短篇小说集)》

1975年５月刊。南京部隊第２期業余文学創作学習班に所属する戦士の作品集。

《小将》《小将》

1973年４月刊。上海電機廠五一工大文科班工人業余創作班所属の作者の短編小説集。

《校园》《校园春色—教育革命诗颂》

1975年5月刊。教育革命賛美の児童詩集。作者は専業詩人。

《下水》《布水那天》

1975年9月刊。中華造船廠工人創作組の作者による作品（小説、散文）集。

《新伙》《新伙伴》

1973年5月刊。児童詩、１９首を収める。

《新课》《新课堂》

1974年7月刊。復旦大学中文系文学創作専業の学生の小説、散文集。

《新绿》《新绿集》

1976年7月刊。上山下郷知識青年の1975年の投稿から選んだ知識青年詩集。

《新苗》《新苗集—评“上山下乡知识青年创作丛书”》

1976年8月刊。評論集。《农场的春天》、《大汗歌》、汪雷《剑河浪》、张抗抗《分界线》などを批評した評論集。汪雷と張抗抗の創作談を収める。

《新芽》《新芽》

1975年4月刊。８人の作者による７編の児童短編読物。

［Y］

《延》《延安的种子(小说・散文集)》

1972年6月、《文匯報》の副刊「風雷激」と《解放日報》副刊「看今朝」の掲載作品、および文芸講話３０周年記念作品募集の応募作品から４０編を選んだ。

《一代》《一代更比一代强》

1975年1月刊。児童詩集。作者は小学生から張秋生のような専業詩人まで。

《１２５》《“一二五”赞歌》

1970年5月刊。労働者業余作者によるルポ。

《一张》《一张考卷》

1974年9月刊。少年児童向けの劇と曲芸（「快板」「相声」など）脚本集。

《勇敢》《勇敢的闯将》

1975年5月刊。紅衛兵と紅小兵の物語集。少年向読物。

［Z］

《战地》《战地黄花》

1976年8月刊。文革期に頭角を顕わした詩人たちの詩集。

《战斗》《新的战斗(革命故事)》

1973年4月刊。上海警備区業余創作組のメンバーによる革命故事集。

《这里》《这里并不平静》

1975年2月刊。上海の医療・衛生戦線の文革による変化を描く。三結合の産物。「作者はこの戦線の第一線で戦う戦士。その多くは初めて創作を行った者」（後記）

[Bai]

白守圣　《一张》
柏才兴<松江县泗联公社>　《颂》
同上　《千歌》

[Bao]

薄海坤(与夏谊)　《快马》
薄海同　《沃土》
鲍长兴　《创作谈》
鲍春　《小将》
鲍道佐　<上钢一厂>　《延》
包凯生　《125》

[Bei]

北艺文　《向阳》

[Bi]

毕华珠　《批林》
上海交电采购供应站
同上(与王成荣)　《团结》

[Bing]

冰天<上海仪表工业公司>　《批林》
兵战保　《沃土》

[Cai]

蔡威林　《校园》

[Cao]

曹刚强　《胜天》
曹骥　<南市区大兴中学>　《批林》
曹秀莉　《工厂》

[Ceng]

曾溢滔　《延》
上海第一结核病总院
曾萱　《125》

[Cha]

查志华　《新苗》
复旦大学工农兵学员
常竹渚　<复旦大>　《新课》

[Chao]

巢福群　《千歌》
静安区威海房管所

[Chen]

陈安安　《批林》
上海延安机模厂
同上　《千歌》
同上　《团结》
同上　《战地》
陈春生　《列车》
陈传俊<市公路所桥染场>　《批林》
陈大鹏　《团结》
复旦大学工农兵学员
陈德　《工厂》
陈德明<南汇县坦直公社>　《千歌》
陈官煊　《一代》
陈辉　《千秋》
陈惠莹(与江华南)　《延》
上海长江塑料厂
陈继光　《列车》
陈可雄　《边人》
陈世义　《雏》
陈学峰　《新绿》
云南
陈毅然　《前进》
陈志铭　《新绿》
福建
陈忠干　<上海警备区>　《千歌》
同上　《颂》
陈子法　《海底》
陈宗海　<黄山茶林场>　《新苗》
陈祖言　<上海铁路局>　《批林》
同上　《战地》
谌家兆　<前进农场　《新苗》
晨曦　《战斗》

[Cheng]

成莫愁(与程仁祥)　《批林》

上海长征机修厂
同上<日用五金机修厂> 《团结》
同上 《校园》
同上 《一代》
程刚 <吉林> 《新绿》
程华 《新苗》
程仁祥(与成莫愁) 《批林》
上海拉链条厂
承纪福 《颂》

[Chou]
仇伟染 《延》
仇宪民<长江农场> 《农春》
仇学宝<上海市内电话局> 《批林》
同上 《颂》

[Chu]
初梨 《快马》

[Chun]
春木 《校园》

[Cong]
聪聪 《一代》

[Cui]
崔保善 《快马》
崔合美 《向阳》
崔希贤(与方文) 《边人》
崔秀库 《千歌》
上海市海洋渔业公司

[Dai]
戴炳海(与沈勇强) 《海底》
戴崇德 《下水》
同上(与钱勤发) 同上
戴慕仁 《沃土》
同上 《向阳》

[Dao]
道诚(与茂林) 《在昔》

[Deng]
登艺 《新伙》
邓文方 《颂》

[Diao]
刁云义 《一代》

[Ding]
丁林发 《批林》
同上 《千歌》
同上 《颂》
丁卫华 《千歌》

[Dong]
东虹 《新绿》
董德兴 《小说》
董凤 <复旦大> 《新课》
同上<复旦中文系·上海第21棉纺积厂> 《延》
董福光 《小将》
同上 《小说》
董良 《建设》
董奇去 《前进》

[Du]
杜惠忠 《小兵》

[Duan]
段瑞夏 《创作谈》
同上 《快马》
同上 《小说》

[Fan]
樊天生 《碧水》
范潮龙 《建设》
范湖龙(与稽一明) 《战地》
范建生 《前进》
范伟民 《新伙》

[Fang]
方劲戎 《批林》
方克强 《工厂》

方文　《边人》

[Feng]
冯永杰　《千歌》
同上　《颂》
同上　《团结》
风华茂　《125》

[Fei]
非立　《新芽》

[Fu]
傅丹(与思黛)　《新苗》
傅宁军　《小兵》
傅韵　《千歌》

[Gan]
甘孺文　《125》

[Gao]
高歌红　《向阳》
高国相(与朱国明)　《工厂》
高海良　《工厂》
高炯浩　《新绿》

[Ge]
戈扬　《沃土》
葛乃福　<复旦大>　《新课》

[Gong]
龚斌　<崇明县新河公社>　《千歌》
龚金凤(与文磊)　《下水》
龚咏燕　《批林》
上海沪东纺织机械厂
同上　《千歌》
同上　《团结》
同上　《颂》
龚志雄(与王明言)　《向阳》
贡吉荣(与周关东)　《勇敢》

[Gu]
谷兵　<上钢一厂>　《千歌》
同上　《颂》
谷亨利　《批林》
同上(与金明善)　《团结》
上钢一厂
谷雨　《小说》
顾锦泉　《碧水》
顾美华　《勇敢》
顾戍耕　《快马》
顾吾浩<金山县朱行公社>　《千歌》
同上(与张宗铭)　《延》

[Guan]
管善斌　<驻沪空军某部>　《批林》

[Guo]
郭昌萍　《雏》
郭耿泉<"风庆"轮电厂>　《团结》
郭谷　<长江农场>　《团结》
郭建国(与张继春)　《一代》
郭修德　《一张》

[Hai]
海江红　《125》

[Hao]
郝铭鉴　《批林》
同上　《一代》
浩然　《新芽》

[Han]
韩凤娟<复旦工农兵学员>　《新苗》
韩洪奎　<驻沪空军>　《千歌》
同上　《颂》
韩胜宝　《一张》
韩小和　<南京部队业余文学创作学习班>　《延》
韩兆焕　《工厂》

[Hang]
杭艺兵　《新伙》

[He]

何国梁 <江西> 《新绿》
何红先 <长江饭店> 《批林》
何培新(与潘国钧) 《校园》
何维莹<上海市第三建筑工程公司> 《批林》

同上 《团结》
同上 《战地》
同上(与嵇一明) 《建设》
何重建 <前哨农场> 《农春》
贺寿光 《浦江》

[Hong]
红石 《向阳》
红运兵 《125》
虹曾兵 《向阳》
洪国斌 《新伙》
同上 《建设》
洪海松 《向阳》
洪雷 《向阳》
洪尚凯 《125》
洪尚田 《125》

[Hou]
侯阜晨(与敏璨) 《浦江》
同上 《战斗》
侯远帆 《一代》

[Hu]
呼延镇 《一代》
胡宝华 《高度》
同上 《小将》
胡本常 《沃土》
胡兵兵 《延》
胡才功 《雏》
胡惠黄 《高度》
胡惠英 《小说》
胡良骅 <上海第二钟厂> 《颂》
胡明海 <上海钢窗厂> 《批林》
同上(张振华) 《建设》
同上(与吴少山) 《团结》
胡霜 《一代》
胡顺生 <南京路好儿连> 《批林》
胡天麟 <南汇县工会> 《团结》
胡同伦 《一代》
胡晓庭(与杜惠忠) 《小兵》
胡永槐 《雏》
同上 <上海汽轮机厂> 《批林》
胡员青 《发光》
胡月伟 《边人》
胡正 《前进》
胡正言 《小兵》
扈栋 《焊花》

[Hua]
华峰 《颂》
华彤 《创造谈》
同上 《小说》
同上 <解放军某部> 《延》

[Huang]
黄持一 《批林》
同上 《团结》
同上(与朱金晨) 《校园》
上海刀片
黄大平 《海底》
黄剑 《边人》
黄胜兴<上海第十机床厂> 《千歌》
黄世益 《批林》
同上 《千歌》
同上 《颂》
同上(与赵笑平) 《团结》
上海汽轮机厂
黄曙云 《一代》
黄亚洲 <浙江> 《新绿》
黄亦浓 《一代》
黄益元 <上海搪瓷一厂> 《颂》

[Ji]
嵇一明(与范湖龙) 《战地》
嵇一明(与何维莹) 《建设》
纪秩 《焊花》
季渺海<上海有色特选厂> 《颂》

季振印<崇明县汲渍?公社　《颂》
同上　《战地》

[Jia]
贾立夫<上海天线电三厂>　《批林》
贾叙伦　《一代》
贾铁豪　《一代》
贾晓晨　《碧水》
同上　《小说》
同上(与徐明灿)　《浦江》
同上　《浦江》
同上　《小兵》

[Jian]
践波　《快马》
剑文　《边人》

[Jiang]
江华南　《碧水》
同上　《向阳》
同上(与陈惠莹)　《延》
上海长江塑料厂
江寄涛　《小兵》
江胜(与施东武)　《小兵》
江锡铨　《新绿》
安徽
江莹　《向阳》
姜彬　《在昔》
姜长祚　《这里》
姜金城　<上海警备区>　《千歌》
同上　《团结》
蒋崇仁　《列车》
蒋洪发　《雏》
蒋奇　《工厂》
蒋苏平(与金炯)　《工厂》

[Jin]
金果临(与袁天福)　《一代》
金海龙<东海舰队>　《千歌》
金洪运(与李士平)<上海染化一厂>　《批林》
同上(同上)<上海石化一厂>　《团结》
金稼仿(与王小鹰)<黄山茶林场>　《农春》
金江宁　《浦江》
金炯(与蒋苏平)　《工厂》
金明善(与谷亨利)<上钢一厂>　《团结》
金培奇　《这里》
金瑞华　《批林》
金晓东<金山县生产资料公司>　《批林》
同上　《千歌》
同上　《团结》
金喻?　《雏》
金超岭　《创作谈》
金昌林(与赵平卿)　《125》
金忠汪（与朱文龙）　《125》

[Jing]
经绍珍(与姚焕章)　《一代》

[Ju]
居有松　<沪东造船厂>　《批林》
同上　《颂》

[Kang]
康铮才<南汇县兴灶公社>　《批林》
同上　《千歌》

[Kong]
孔太和　《前进》

[Lang]
郎松源　《列车》

[Le]
乐汉星　《延》

[Lei]
雷恩明　《焊花》

[Li]

李大志 《125》
李德宝(与沈中其)<上海友谊商店> 《延》
李福祥 《列车》
李根宝 《颂》
李红(与李伟民) 《一代》
李家荣<上港六区> 《团结》
李锦雄(与钱云富) 《工厂》
李军 《延》
李连泰 《批林》
同上<上海钢锉二厂> 《千歌》
李良文(与钟原) 《小兵》
李上华 《一代》
李士平(与金洪远)<上海染化一厂> 《批林》
同上(同上) 《团结》
李树? 《这里》
李树荣(与斐琦) 《这里》
李无星 《一代》
李伟民(与李红) 《一代》
李雯 《一代》
李学中 《校园》
李云良 《战地》
李振国 《海底》

[Liang]
梁晓声 《边人》

[Lin]
林静墨 <新海农场> 《农春》
林茂春 《向阳》
同上 同上
林宁宁 《前进》
林青<上海> 《新绿》
林向阳 《一代》
林耀辉 《批林》

[Ling]
凌冬 《小兵》
凌辉 《战斗》

[Liu]
刘秉钢 《一代》
刘戈 《边人》
刘国镇 《发光》
刘鸿毅<上海浙江南京路食品商店> 《千歌》
同上<上海市禽类蛋品公司> 《团结》
刘洪俊 《125》
刘沪生 《勇敢》
刘军次 《小将》
刘荣跟 《小将》
刘山民 《小兵》
刘树辰 《小将》
刘文笑 《沃土》
刘希涛 <国际电影院> 《批林》
同上 《团结》
同上 《校园》
同上 《一代》
刘亚平 《团结》
江南造船厂
刘晏惠 《边人》
刘永新 《创作谈 300B
刘征泰 《勇敢》
柳良(与薛全荣)<前哨农场> 《新苗》
六建坤 《列车》

[Long]
龙彼德 <黑龙江> 《新绿》
龙维雅 《浦江》

[Lou]
娄继玉 《创作谈》
楼耀福 《勇敢》

[Lu]
卢文鸾 《颂》
卢朝晖 《向阳》
同上 《小说》
陆炳元 《小将》
陆惠荣<金山县廊下公社> 《千歌》

陆佳一<上海汽轮机厂>　《团结》
陆俊　《125》
陆康勤　《边人》

陆萍　《批林》
同上<上海国棉二厂>　《千歌》
同上　《颂》
同上<上海第二棉纺厂>　《团结》
陆伟　《焊花》
同上　《战地》
路鸿　《焊花》
同上(与钱国梁)　《战地》
路石(与瞿强)　《战斗》
同上　《战斗》

[Lü]
吕铭唐　《一代》
吕武全<上海警备区>　《团结》
吕兴臣　《高度》

[Luan]
栾良锡　《焊花》

[Luo]
罗达成　《颂》

[Ma]
马长旺(与张兆群)　《工厂》
马加鞭　《延》
马开元<上海第二印染厂>　《千歌》
马昱华<复旦大>　《新课》

[Mao]
毛炳甫<上棉八厂>　《批林》
同上　《一代》
毛信宝<上海化工机械厂>　《批林》
毛震郁<上海供电局>　《千歌》
同上　《颂》
同上　《团结》
茅晓峰<上海毛巾十厂>　《千歌》
茂林(与道诚)　《延》

[Mei]
梅子涵<星火农场>　《批林》
同上　《农场》

[Mi]
糜佳乐<上海无线电九厂>　《千歌》
同上　《颂》

[Miao]
苗看(与晓阳)　《125》

[Min]
敏璨(与侯阜晨)　《浦江》
敏晃(与严深)　《战斗》

[Mu]
穆慧瑛　《这里》
木青　《新芽》

[Nan]
南湛文　《向阳》
同上　《小说》
南祥(与谢光)　《战斗》

[Ni]
倪振良<复旦大中文系>　《新课》

[Ning]
宁宁　《批林》
同上　《千秋》
同上　《颂》
同上　《新伙》

[Pan]
潘国钧(与何培新)　《校园》
潘国祥(与凌纾)<上海电影制片厂>　《延》
潘礼和　《雏》
潘伟生<卢湾区红小兵>　《批林》
潘新华(与苏承志)　《雏》

[Pei]

裴琦(与李树荣) 《这里》

[Peng]
鹏春 《向阳》
彭瑞 《碧水》

[Pin]
品山 《碧水》

[Ping]
萍青 《边人》
萍之 《批林》
同上 《新伙》

[Pu]
浦洲 《战斗》

[Qi]
戚永芽<松江县新五公社> 《颂》
齐立<复旦大> 《新课》
齐鸣河 《边人》
祁洪波 《批林》
祁群拉 《工厂》

[Qian]
钱程 《团结》
钱钢 《创作谈》
同上 《浦江》
同上(与张云福) 同上
同上 《团结》
同上(与杨晓驯) 《校园》
同上<上海警备区> 《延》
同上 《战地》
同上 同上
钱光辉<奉贤县金汇公社> 《颂》
钱国梁<东方红造船厂> 《颂》
同上 《焊花》
同上<中华造船厂> 《批林》
同上(与周林发) 《千歌》
同上(与路鸿) 《战地》
钱建良 《前进》
钱建群 《碧水》
同上<上海市海洋渔业公司> 《延》
钱军 《沃土》
钱康 《千歌》
钱佩衡 《沃土》
同上 《延》
钱勤发(与戴崇德) 《下水》
同上(与汤祖刚) 同上
钱小平(与王勇龙)<新建机器厂> 《批林》
钱永林<徐家汇新华书店> 《批林》
同上 《千歌》
钱云富(与李锦雄) 《工厂》

[Qin]
秦昌桂 《浦江》
秦节<南汇县> 《延》
秦剑兰 《这里》
秦培春<上海戏剧学院> 《颂》

[Qu]
屈家礼<上海警备区> 《颂》
瞿晨渔(与谭嘉) 《下水》
同上(与汤祖刚) 同上
瞿强(与路石) 《战斗》

[Ren]
任斌武 《向阳》
任定文 《延》
任莉华<东海船厂> 《团结》
任允江<上海警备区> 《批林》

[Ruan]
阮生江 《小兵》

[Shao]
邵敬敏 《新伙》
同上 《向阳》
邵钧林 《小兵》
邵胜英 《一代》

[Shang]

尚军　《列车》

[Shen]

申?　《一代》
沈安京<前进农场>　《农春》
沈飚?<上海市东方红农场>　《千歌》
同上<上海冶金设计院>　《团结》
同上(与张炜)　《一代》
沈炳龙　《碧水》
沈度<泸定华工机修厂>　《团结》
沈汉芽　《创作谈》
沈慧敏　《小将》
沈金俊(与郁俊英)<华东电业管理局>　《发光》
沈林根　《团结》
沈荣兴<上海货车制造厂>　《千歌》
沈善增　《这里》
沈新民　《一张》
沈阳　《前进》
沈永昌<金山县山阳公社>　《千歌》
沈勇强(与戴炳海)　《海底》
沈郁　《发光》
沈中海(与项明华)　《一张》

[Sheng]

盛石华<南汇县周甫公社>　《千歌》

[Shi]

施东武(与江胜)　《小兵》
施伟华(与张圣隆)　《下水》
施新兵　《向阳》
施选青(与陶伟)<黄山茶林场>　《新苗》
施照　《千歌》
施镇平　《这里》
施芝鸿　《前进》
石定　《沃土》
石良(与包凯生)　《125》
石千　《战斗》
石文美　《一代》
石武炼<上海市汽车运输公司>　《延》
石言志　《沃土》
时学艺(与杨正国)　《小兵》
史根娣<上海化纤五厂>　《批林》
史汉富　《创作谈》
同上　《小说》
史民富　《发光》
史玉新<上海石夕钢片厂>　《团结》
士敏　《碧水》
同上　《创作谈》
同上　《小说》

[Shuo]

烁渊　《一代》

[Si]

思黛(与傅丹)<黄山茶林场>　《新苗》

[Song]

宋跃良　《边人》

[Su]

苏承志(与潘新华)　《雏》
苏海　《创作谈》
苏增才　《延》
社员

[Sun]

孙安琴　《校园》
同上　《新伙》
孙涵定(与陈子法)　《海底》
孙华文　《一代》
孙景琦　《一代》
孙颗<前哨农场>　《农春》
同上　《新苗》
孙克刚　《列车》
孙明义(与张涛)<长航上海分公司　《批林》
同上<长航 902 轮>　《团结》
孙念亭(与苏增才)<社员>　《延》
孙伟民　《一代》
孙愚　《校园》
同上　《新伙》

[Tan]

谈奋发 《125》
谈实文 《向阳》
谈树仪<海丰农场> 《农春》
谭嘉(与瞿晨渔) 《下水》
同上(与文磊) 同上

[Tang]

汤炳生(与宛世照)<松江县城西公社> 《批林》
汤云为(与姚尔发) 《发光》
同上 同上
汤昭智<上海> 《新绿》
汤祖刚(与钱勤发) 《下水》
同上(与瞿晨渔) 同上
同上(与文磊) 同上
唐渭源 《这里》
唐克新(与张英) 《125》

[Tao]

陶伟(与施选青)<黄山茶林场> 《新苗》
陶小栋<"风庆"轮机匠> 《团结》

[Tian]

田学茂<上海沪东造船厂> 《千歌》
田永昌<东海舰队> 《颂》

[Tong]

童尔莲 《浦江》
童新运<上海重型机器厂> 《千歌》

[Tu]

屠林明 《颂》

[Wan]

宛世照(与汤炳生) 《批林》
同上 《颂》
万良顺<驻沪空军> 《团结》

[Wang]

汪厚龙<上海电影系统"五·七"干校> 《颂》
汪雷<江苏省滨海县振东公社> 《新苗》
汪婉华<上海第八丝段厂> 《颂》
同上 《校园》
汪锡麒 《列车》
同上 《千歌》
同上<上海铁路分局东车辆 《颂》
王常滨 《校园》
王成荣(与毕华珠)<上海医药采购供应站> 《团结》
王承刚 《前进》
王传江(与陈大鹏)<复旦大工农兵学员> 《团结》
王传诗<东风农场> 《农场》
同上(与施选青) 《新苗》
王春凤 《创作谈》
王德安 《一代》
王贵章 《小将》
王和平 《一代》
王红军(与晓路) 《小兵》
王洪林 《列车》
王辉 《碧水》
王慧骐 《一代》
王家林<东海舰队某部> 《批林》
同上 《校园》
王家泉 《沃土》
王捷<上海电力建设公司> 《团结》
王锦园(与俞天白) 《新芽》
王淦文 《雏》
王立伟(与严忠喜) 《建设》
王连喜 《团结》
王明高(与龚去雄) 《向阳》
王荣联(与吴新伟、高海良) 《工厂》
王佩华 《125》
王森<上海玻璃厂> 《批林》
同上 《团结》
同上 《颂》
同上 《千歌》
同上 《一代》

同上　《新伙》
王竖　《125》
王伟谷<上海天平仪器厂>　《团结》
王文忠　《一代》
王小鸽　《小兵》
王小鹰(与金稼仿)<黄山茶林场>　《农春》
王晓元<复旦大>　《新课》
王修国<上钢五厂>　《批林》
王循<安徽>　《新绿》
王亚法<上海电焊条厂>　《批林》
同上　《校园》
王亚美(与肖雨)　《小兵》
王永康(与志远)　《小兵》
王勇军　《小将》
王勇龙(与钱小平)<新建机器厂>　《批林》
王友良　《战地》
王宇航　《雏》
王玉　《新伙》
王周生(与段济蓉)<东风农场>　《农春》

[Wen]
文可<吴淞工人文科大学>　《颂》
文磊(与龚金凤)　《下水》
同上(与谭嘉)　同上
同上(与汤祖刚)　同上
文新　《碧水》

[Weng]
翁 ?荣<复旦大中文系>　《新课》

[Wei]
魏爱群　《小兵》
魏秀生(与邵钧林)　《小兵》

[Wu]
乌维钧　《工厂》
吴边　《胜天》
吴鼎强　《海底》
吴广川<江苏>　《新绿》
吴家荣　《工厂》
吴金杰　《高度》
同上<驻沪空军>　《千歌》
吴克毅　《前进》
吴林奎(与郑帆)　《碧水》
同上(同上)　《新课》
同上(同上)　《小说》
吴少山(与胡明海)<上棉12厂>　《团结》
吴树敬　《一代》
吴树勋　《一代》
吴新伟(与王荣联、高海良)　《工厂》
吴永进<上海煤油厂>　《团结》
同上　《战地》
吴幼甫(与张文刚)　《工厂》
吴芝麟　《碧水》
同上　《快马》
伍戚军　《沃土》
武佩牛(与何维莹)<上海第三建筑工程公司>　《批林》
同上　《团结》
同上　《校园》
同上(与朱金晨)　《建设》
武齐文(与肖斌)　《延》
武兆强　《校园》

[Xia]
夏莲荣<上海第 14 机床厂>　《批林》
夏宜(与薄海坤)　《快马》
夏永璋　《团结》

[Xian]
娴子　《校园》

[Xiang]
项纯丹　《小将》
项明华　《勇敢》
同上(与沈中海)　《一张》

[Xiao]
肖关鸿　《创作谈》
同上　《小将》

同上 《小说》
肖翔(与周文娟) 《雏》
肖雨(与王亚美) 《小兵》
萧健
萧亮 《这里》
萧兵 《125》
小柳 《边人》
晓黄 《边人》
晓纪 《新伙》
晓路(与王红军) 《小兵》
晓明 《小将》
晓章 《战斗》

[Xie]
谢光(与南祥) 《战斗》
谢金良 《一代》
谢其规 《批林》
同上<上海工程机械厂> 《颂》
同上 《团结》
谢则林 《碧水》
同上(与朱大刚) 《勇敢》

[Xin]
新苗文 《创作谈》
同上 《小说》
辛亚芬 《小将》

[Xiong]
熊尊茂<上海第一印刷机械厂> 《批林》
同上 《千歌》

[Xu]
徐伯金<同济大学"五·七"公社> 《千歌》
徐大林 《向阳》
徐尔鉴 《工厂》
徐刚<崇明县合作公社> 《批林》
同上<北京大学中文系学员> 《延》
徐根荣 《一代》
徐红 《向阳》
徐怀堂<上海冶炼厂> 《颂》
徐怀金 《快马》
同上 《这里》
徐静娥 《工厂》
徐明华(与朱正练) 《浦江》
徐明灿 《碧水》
同上 《浦江》
同上(与贾晓晨) 同上
徐如麒 《战地》
同上<上海戏剧学院> 《团结》
徐天德<复旦大> 《新课》
徐学文 《创作谈》
徐永年 《一张》
徐永田 《一代》
徐跃华<红小兵> 《一代》
徐照瑞<驻沪海军> 《团结》
同上 《校园》
徐忠美(与郑天明) 《前进》
许宏根(与陈宗海)<黄山茶林场> 《新苗》
许荣根 《一张》
许？泉 《一代》
许维龙 《小将》

[Xue]
薛大伟 《海底》
薛家柱 《一代》
薛全荣(与柳良)<前哨农场> 《新苗》
学宝→ 仇学宝 《高度》

[Ya]
雅亚 《战斗》

[Yan]
严丽明 《快马》
严良华<奉贤县> 《批林》
严祥炫<上海电影工业公司> 《批林》
同上<上海立新造纸厂> 《千歌》
同上 《颂》
同上 《战地》

严忠喜(与王立伟)　《建设》
阎宗之　《一张》
颜文亮(与烨珉)　《这里》
岩泉　《战斗》

[Yang]
杨春山　《创作谈》
杨春章　《延》
杨大平　《一代》
杨代潘(与张成珊)<黄山茶林场>　《农春》
同上　《新绿》
同上　《新苗》
杨德昌<东海舰队>　《批林》
杨德田　《高度》
杨戈　《高度》
杨红妹<上海汽轮机厂>　《颂》
杨怀运<工农兵五号轮>　《颂》
杨纪根　《这里》
杨康焰<上海低压电器一厂盲工人>　《团结》
杨眉<新疆>　《新绿》
杨明<南汇县革委会>　《批林》
同上　《颂》
同上　《团结》
同上　《向阳》
同上　《新伙》
杨士龙<金山县山阳公社>　《千歌》
杨晓驯(与钱钢)　《校园》
杨雪云　《小兵》
杨映生　《向阳》
杨正国(与时学艺)　《小兵》

[Yao]
姚尔武(与杨云为)　《发光》
姚海红(与邬盛林)<南汇县农业局>　《批林》
同上<南汇县排灌所>　《千歌》
同上　《颂》
姚鸿恩　《雏》
同上<上海锅炉厂>　《批林》
同上　《校园》
姚华　《勇敢》
姚焕章(与经绍珍)　《一代》
姚克明　《碧水》
同上　《创作谈》
同上　《高度》
同上　《向阳》
同上　《延》
同上　《小说》
姚美芳(与姚忠礼)　《团结》
同上<上海>　《新绿》
姚振裕　《海底》
姚忠礼(与姚美芳)　《团结》

[Ye]
叶波　《一代》
叶宏途　《125》
叶珈山　《新苗》
叶勉　《碧水》
同上　《创作谈》
同上　《小说》
同上<上海第一棉纺段厂>　《延》
叶文艺　《向阳》
叶舟(与雨水)　《战斗》
烨珉(与探宝)　《这里》

[Yi]
伊克昭　《一代》
易杰祥　《浦江》
益勉

[Yin]
殷济蓉(与王周生)<东风农场>　《农春》
殷银珠<国棉十九厂>　《颂》
银传(与友珍)　《碧水》
尹必桥　《一代》
尹一兵　《向阳》

[Yu]
于成鲲<复旦大>　《新课》
余恩涛　《勇敢》

余方德 《小兵》
余冠雄<上海七区> 《批林》
同上 《一代》
同上(与赵乃？) 《战地》
余右光<上海县梅陇公社> 《千歌》
余云<练江牧场> 《农春》
宇岑文 《125》
俞福星<松江县泖港公社> 《团结》
俞建光<上海县> 《批林》
俞康华<前卫农场> 《农春》
俞亮鑫 《海底》
俞泉林 《125》
俞天白 《碧水》
同上 《向阳》
同上(与王锦国) 《新芽》
同上<上海江浦中学> 《延》
俞吾金 《海底》
俞镛江<前进农场> 《农春》
同上 《前进》
俞中保 《一代》
雨水(与叶舟) 《战斗》
郁俊英(与沈金祥)<创作学习班> 《发光》
郁小雯<新海农场> 《农春》

[Yong]

咏之 《校园》

[You]

尤维雅 《浦江》
友珍(与银传) 《碧水》

[Yuan]

袁金康 《焊花》
同上 《批林》
同上<沪东造船厂> 《团结》
同上 《战地》
袁军<运输队> 《焊花》
同上<上海石油煤炭运输公司> 《批林》
同上<上海交电局> 《颂》
同上 《团结》
袁峻 《战地》
袁天福(与金果临) 《一代》
袁真 《一代》

[Zang]

臧贵昌 《一代》

[Zhang]

张阿大 《颂》
张秉珏<驻沪海军> 《团结》
张成珊(与杨代藩) 《农春》
同上<黄山茶林场> 《新苗》
张成新 《勇敢》
张呈富 《雏》
同上<上海汽轮机厂> 《批林》
张春利 《胜天》
张达明 《校园》
张道余(与张正余) 《高度》
同上 《小说》
同上 《向阳》
张东方<上海天线电 21 厂> 《千歌》
同上 《团结》
同上 《一代》
张凤武<驻沪海军某部> 《延》
张英(与唐克新) 《125》
张海根<青甫县城西公社> 《颂》
张海龙 《海底》
张鸿喜 《批林》
同上<上海建筑机械制造厂> 《千歌》
同上 《颂》
张鸿翔 《千秋》
同上<沪东造船厂> 《颂》
张惠琴红小兵 《一代》
张继春(与郭建国) 《一代》
张厥新 《发光》
张抗抗 《新苗》
张礼寿<上海汽轮机厂> 《颂》
张良华<上海建筑机械厂> 《批林》
张路平<红小兵> 《一代》
张乃清<上海县> 《批林》
张启萍 《一代》

张琼	《一代》
张秋生	《新伙》
同上	《一代》
张圣禄	《碧水》
同上	《向阳》
同上	《延》
张圣隆(与施伟华)	《下水》
张少文	《海底》
张寿彭	《一代》
张顺忠	《焊花》
同上(与周辍鸣)	同上
同上(与赵笑平)	《战地》
张松林(与虞和静)	《小号手》
张涛(与孙明义) <上海汽车配件修配厂>	《批林》
张为工	《边人》
张伟<黄山茶林场>	《批林》
同上	《延》
同上	《一代》
张炜	《一代》
同上(与沈飚 ?)	同上
张文刚(与吴幼甫)	《工厂》
张晓林	《浦江》
张幼华(与周杏芳)	《这里》
张有汉	《一代》
张玉<黄山茶林场>	《新苗》
张玉贞<南京路好八连>	《批林》
张云福(与钱钢)	《浦江》
张兆群(与马长旺)	《工厂》
张振华(与张志国)<华东建筑机械厂>	《批林》
同上(与胡明海)	《建设》
张振芝	《一代》
张震麟	《村园》
张正余(与张道余)	《高度》
同上	《小说》
张志国(与张振华)	《批林》
市建七公司	
张重光	《新芽》
章德益<新疆>	《新绿》
章国强<上海市水产供销公司水产冷冻装卸站>	《千歌》
章家文	《创作谈》
章伟文	《向阳》

[Zhao]

朝生	《战斗》
赵华生<上海警备区>	《团结》
赵宏之	《海底》
赵建新<黄浦汽车修配厂>	《团结》
赵杰<嘉定县城东公社>	《团结》
赵金贵	《胜天》
赵龙宝<上海市第六建筑工程公司>	《颂》
赵乃 ? <上海七区>	《颂》
同上(与余冠雄)	《战地》
赵平卿(与金昌林)	《125》
赵平之(与王照亮)<上海东风农场>	《延》
赵仁童	《一代》
赵锡臣	《胜天》
赵笑平(与张顺杰)	《战地》
赵志坚	《海底》
赵自	《高度》
赵祖云	《小将》

[Zheng]

郑钊习(与金忠法)	《125》
郑成义<上海第七印染厂>	《批林》
同上	《颂》
同上	《一代》
郑帆(与吴林奎)	《碧水》
同上<复旦大>	《新课》
同上(与董凤)	同上
同上(与吴林奎)	同上
同上(与吴林奎)	《小说》
郑和中	《海底》
郑华	《一代》
郑胜国<长兴岛邮政所>	《颂》
郑天明(与徐忠美)	《前进》
郑宪	《雏》
郑玉慧	《碧水》
郑仲耀	《校园》

[Zhi]

志远(与王永康) 《小兵》

[Zhong]

钟高渊 《新伙》
钟亮 《新课》
钟原(与李良文) 《小兵》

[Zhou]

周成<上海市海运局材料供应站> 《千歌》
周辍鸣(与张顺忠) 《焊花》
周关东(与贡吉荣) 《勇敢》
周国邦安徽 《新绿》
周家礼<上海警备区> 《千歌》
周嘉俊 《碧水》
同上 《胜天》
周林发(与钱国梁) <上海东方红造船厂> 《千歌》
周林兴 《向阳》
周美华<上海国棉九厂> 《千歌》
同上 《颂》
周乔 《一代》
周威 《一代》
周伟民 《碧水》
周文娟(与肖翔) 《雏》
周杏芳(与张幼华) 《这里》
周银宝<上海新风造纸厂> 《千歌》
同上 《战地》
周勇闯 《小将》
同上 《小说》

[Zhu]

朱大刚(与谢则林) 《勇敢》
朱栋<“风庆”轮政委> 《团结》
朱国明 《雏》
同上(与高国相) 《工厂》
同上<上海滚动轴承厂> 《批林》
朱家麟<福建> 《新绿》
朱金晨<上海基础工程公司> 《团结》
同上(与黄持一) 《校园》
同上(与武佩牛) 同上
同上 《战地》
同上(与武佩牛) 《建设》
同上 《建设》
朱晋杰 《一代》
朱妙其<上海> 《新绿》
朱敏慎 《碧水》
同上 《创作谈》
同上 《向阳》
同上 《延》
朱平顺<红小兵> 《一代》
朱三棣 《海底》
朱贤明<上海航海仪器厂> 《千歌》
同上 《颂》
朱祥贵 《浦江》
朱亚天<浦江仪表厂> 《批林》
朱永祥<上海人造板机器厂> 《千歌》
同上 《颂》
朱玉民<东海舰队> 《颂》
朱正练(与徐明华) 《浦江》
诸燮昌<上海汽轮机厂> 《批林》
祝春源 《校园》

[Zhuang]

庄道珍 《一代》
庄新儒 《碧水》
同上 《新芽》
庄云飞 《一张》

[Zong]

宗涛 《发光》
宗延沼 《在昔》

[Zuo]

左山虎 《发光》

第７章

『朝霞』『朝霞叢刊』の執筆者たち*

本章は文革期文学の展開期に、この文学の実質をもっとも典型的に具現することとなった作品群を掲載した雑誌『朝霞』および『朝霞叢刊』の解題と、その執筆者、および作品題名の索引である。

１．『朝霞』と「朝霞叢刊」

『朝霞』および「朝霞叢刊」は文革期文学の中で最も評判の悪い出版物である。例えば中国の大学教科書である、山東大学等２２院校編写組『中国当代文学史』の「一九六六～一九七六の文学」の章[1]では、「朝霞叢刊」はこう書かれている。

> 1973年張春橋、姚文元が直接支配下に置いていた中共上海市委員会執筆グループ（羅思鼎、方岩梁、方沢生、任犢などはこの反動グループのペンネーム）は“四人組の宣伝誌”である《朝霞》（叢書、上海人民出版社）を創刊し、江青反革命集団の仲間、御用執筆グループの積極分子らが自らでっち上げた《初春的早晨》、《金鍾長鳴》、《第一課》などの短編小説を続けさまに打ち出し、それによって一月反革命の嵐をほめたたえ、王洪文、張春橋、姚文元一味を美化した。

また雑誌『朝霞』については、次のように書いている。

> 1974年、彼らは今度は月刊《朝霞》を創刊し、反革命世論の陣地を拡大し、““文化大革命”の闘争生活生活を反映するよう努めよう”というテーマで原稿を募集した。（中略）彼らの目

---

*本章は平成９～11年度文部省科学研究費補助金による〈「文革期文学」の基礎的研究〉（研究課題番号：9010459）の研究成果の一部である。

(1) 山東大学等２２院校編写組『中国当代文学史』第３巻第３編「一九六六～一九七六的文学」福建人民出版社、1985年９月。なお、坂田完治、溝口喜郎らによる翻訳（『文革期文学概説　1966年～1976年の文学』九州大学大学院言語文化研究院（岩佐）研究室、2001年３月）がある。引用の訳文はそれに従った。

的は非常にはっきりしていた。すなわち、これを利用し周恩来同志に圧力をかけ、極左思潮を維持し、また彼らの生命線を繋ぎ止めようとしたのである。

この余り品のよくない文章から知られるように、「朝霞叢刊」と雑誌『朝霞』は文革期の政治過程で“四人組”（文革左派グループ）の政治目的を主張し、それを実現する道具だったというので、文革後は誠に評判が悪く、また激しい批判[2]を受けることともなっているわけである。

「朝霞叢刊」と雑誌『朝霞』の執筆者たちの主観的意図がどうであれ、この２種類の文芸刊行物が“四人組”（文革左派グループ）の政治的プロパガンダの道具として機能したことは疑いない。自前の軍事力をもたず、辛うじて宣伝機関を掌握していた文革左派にとって、政治権力の拡大と維持のために完全に自己のコントロール下に置けるメディアが必要だった。政治的観点から言えば、『朝霞』はそのために創刊されたのである。すでに述べたように１９７２年から地方の文芸誌が次々に復刊される。最も早い『北京文芸』は前年１１月には復刊を遂げ[3]ている。またそれら復刊された文芸誌はしばしば停刊時の誌名を変更している。例えば、内蒙古の『草原』が『内蒙古文芸』になり、遼寧省の『鴨緑江』が『遼寧文芸』に、陝西省の『延河』が『陝西文芸』に変ったように。だが、上海では文革前の有力文芸誌『収穫』は復刊されず（７９年にようやく復刊）、それとは別に『朝霞』が創刊された。この背後に人的関係や権力配分の問題など、どういう事情があったか、それを明かにする資料をもたない。だが、文革期文学の理念との関連で言えば、『朝霞』創刊の背景には（人脈的にも文学理念的にも）十七年の旧文芸界と絶縁し、その解体の上に新たな「労農兵文壇」を建設したい、という文革左派の強い意思が働いているように思う。

では「朝霞叢刊」『朝霞』とは具体的にどういう出版物か。以下にその書誌的な説明をしておきたい。

２．「朝霞叢刊」について（解題と略記号）

「朝霞叢刊」は初め「上海文芸叢刊」の名で出版され、７４年から「朝霞叢刊」と名を変えた。７３年から７６年までの４年間に以下の１２冊を出版した。

『朝霞』１９７３年５月（索引では［朝］と略記）

「上海文芸叢刊」の第１冊。段瑞夏「特別観衆」や、書名にもなった史漢富「朝霞」など１４編の小説、２首の詩（うち１首は仇学宝のもの）、散文１編、伝記（石一歌の魯迅伝）１編、合計１８編の作品が掲載されている。また最後に「編者」署名の後書き

---

[2] 枚挙に暇ないほどだが、例えば、桑城「評“四人邦”的邦刊《朝霞》」人民文学出版社編輯部編『“陰謀文芸”批判』人民文学出版社、1978年7月、王国栄・徐家麟「也読《朝霞》一年」『文芸論叢』第1輯、上海人民出版社、1977年9月など。

[3] これらについては辻田正雄「中国当代文芸雑誌の変遷」神戸大学文学部東アジア研究センター『神戸大学文学部蔵　中国報刊目録』1983年3月、45—54頁に詳しい。

（「致読者」）がおかれているが、それは次のように書き出されている。

プロレタリア文化大革の偉大な勝利と修正主義批判運動の深まりにつれ、上海では全国各地と同じく、革命にも生産にも活気にみちた繁栄ぶりが現れている。それと共に、毛主席の革命文芸路線の導きの下で、大衆的な革命的文芸創作運動もはつらつと勃興しつつある。文芸創作の繁栄をいっそう促進し、創作隊列の発展をより推進するために、われわれは不定期に「上海文芸叢刊」を出版することを決定した。

このたび出版する「叢刊」の第１輯は、小説を主としているが、作品の絶対多数は労農兵業余作者の手になるものである。作者の半数近くは創作を始めたばかりの新人である。燃えるような闘いの生活が、彼らに文芸の武器を取らせ、革命的英雄像の造型を通じて、努めてこの偉大な時代の姿を反映し、熱情をこめて毛主席の革命路線の勝利を歌い上げるよう、激励しているのだ。

『金钟长鸣』１９７３年８月（索引では［金］と略記）

小説９編、散文５編、」伝記（石一歌「魯迅伝」）、文学理論２編から成る。小説には書名と同名の立夏「金鍾長鳴」、谷雨「第一課」が含まれている。この２編は「“走資派”はまだ歩み続けている、警戒せよ、階級闘争、路線闘争への警鐘を長く鳴らせ（「金鍾長鳴」）、団結して明日に向おう、明日の闘争は必ずさらに厳しく、さらに複雑になるだろう（「第一課」）などと暗示した」「これらの作品は江青反革命集団の高い賞賛を獲得し」たと名前を挙げて批判されているものである[(4)]。文学理論のうち常峰「努力塑造工農兵英雄形象」は文革期文学の創作理念ともいうべき「努力して労農兵の英雄像を作り上げよう」という語についての解説で、「これは時代が社会主義文学に提出した根本任務である。（中略）［現在］各種の文学様式は小説、ドラマ、詩歌、散文のジャンルを問わずすべて労農兵の英雄像を作り出すことを主要任務としているが、これはプロレタリア文化大革命の重大な勝利である」として、いかにそれを作り上げるかを様々な点から解説している。文革期文学研究の重要な資料と言っていい。

『钢铁洪流』１９７３年１２月（索引では［钢］と略記）

話劇シナリオ３編、映画（「電影文学」）シナリオ２編。

『珍泉』１９７３年１２月（索引では［珍］と略記）

映画シナリオ２編、話劇シナリオ３編。巻頭の「編者的話」に「本専輯の作者は三大革命闘争の実践の第一線で闘う労農兵の業余文芸戦士である。彼らは初めて映画、大型話劇の文芸様式を運用して火のように燃える革命闘争の生活を反映している」とあり作者所在の単位と協力を得た単位への感謝が述べられている。作者名だけ記しておく。高爽、劉征泰、陸天明、于炳坤、方勝、史漢富。

『青春颂』１９７４年４月（索引では［青］と略記）

この号より「《朝霞》叢刊」となる。小説４編。「農場青年習作」のタイトルで散文４

---

(4) 注（1）に同じ。

編、詩４首。詩６首。話劇シナリオ１編。映画シナリオ１編。「本編は上山下郷知識青年の闘争生活を反映した［作品］の特集である。（中略）発表された作品は、大部分が青年業余作者の手になる。特に多くの農場の青年が筆を執り、自らの戦闘生活を描いてくれた。これは誠に喜ばしい現象で、激励さるべきである」との「編后」を付す。

『碧空万里』１９７４年１０月（索引では［碧］と略記）
小説６編、詩３首、一幕劇シナリオ２編、映画シナリオ１編。古華が小説「仰天湖伝奇」の作者として顔を出しているのが注目される。

『战地春秋』１９７５年３月（索引では［战］と略記）
中篇小説２編、叙事詩１首、話劇シナリオ１編。小説「戦地春秋」の作者は胡万春、もう１編王立信「歓騰小涼河」は「江青反革命集団のために反革命の輿論をでっち上げた」と評された[5] 同名の映画の原作だろう。

『序曲』１９７５年６月（索引では［序］と略記）
「努力反映文化大革命的闘争生活—提倡更多地創作反映文化大革命的文芸作品」（応募作品選）と銘打たれ、小説２０編、詩２首を収め、巻頭に任犢「熱情歌頌新的人物新的世界（代序）」をおく。すでに朝霞叢刊や雑誌『朝霞』に発表されたものの再録。２２院校当代文学史は「“文化大革命”が身ごもった鬼子、つまり造反奪権、紅衛兵運動、労働者宣伝隊の進駐、幹部の下放などの賛歌である２３編の作品を集め《序曲》と題した。この《序曲》を江青は大いにほめたたえた（中略）《序曲》は後に彼女たちの鎮魂歌となり、また彼女たちの陰謀文芸の罪行録となった」と評する[6]。

『不滅的篝火』１９７５年８月（索引では［不］と略記）
小説３編（うち書名にもなった「不滅的篝火」は黄山茶林場創作組集団創作、楊代藩執筆）、映画シナリオ１編、詩１首、一幕劇シナリオ１編。

『闪光的工号』１９７５年１２月（索引では［閃］と略記）
叙事詩１首、映画シナリオ１編、小説３編、話劇シナリオ２編。

『千秋业』１９７６年４月（索引では［千］と略記）
映画シナリオ４編。「千秋業」は解放軍を舞台にした映画シナリオだが、文革後「軍に反対し、軍を乱し、わが長城（解放軍の比喩）を壊し、プロレタリア独裁を転覆させて資本主義を復活させようと企み、“四人組”が党と国家の最高指導権を奪い取らせんがために反革命の輿論を作り出そうと企む大毒草である」と批判された[7]。

---

(5) 注（1）に同じ。文革後の『序曲』批判に、復旦大学・傅頸文「篡党奪権的狂想曲—評《序曲》」人民文学出版社編輯部編『“陰謀文芸”批判』人民文学出版社、1978年７月がある。
(6) 注（1）に同じ。
(7) 孟森輝「一株反軍乱軍的大毒草—批判“四人邦”策画炮製的反動影片《千秋業》」人民文学

『火，通红的火』１９７６年6月（索引では［火］と略記）
中編小説２編、書名と同名の話劇シナリオ１編。

３．雑誌『朝霞』について

雑誌『朝霞』は１９７４年1月２０日に創刊号が出され、以後、１９７６年9月２０日まで、２年９ヶ月間に３３冊を出版した。出版は「朝霞叢刊」と同じく上海人民出版社である。

一般に新しく創刊された文芸雑誌は何らかの文章を掲げて、その雑誌が目指す文学的な主張や目標を宣言するものである。だが『朝霞』はそういう文章を掲げていない。これについて、翌年１月『朝霞』一年の歩みを振り返った文章で、任犢[8]は、こう書いている[9]。

「『朝霞』第１期は「創刊の言葉」など発表しなかったが、側面からその役割を果たしている文章がある。原稿募集案内の「文化大革命の闘争生活を描くよう努力しよう」がそれである」

それでは「文化大革命の闘争生活を描くよう努力しよう」（努力反映文化大革命闘争生活）はどういう文学的主張を展開しているのか。

毛主席の指示に基づき、党の十回大会の文献は「このような革命は、今後まだ何回も行わなければならない」と」述べている。これはわれわれに、プロレタリア文化大革命の精神で当面の各種の工作を立派になしとげねばならない、と呼びかけているのだ。文学の事業も、党の事業の一部として必ずこの精神を貫徹しなければならない。熱情をこめてプロレタリア文化大革命の輝かしい勝利を歌い上げ、プロレタリア文化大革命の中で次々に現れる新生の事物を大いに宣伝し、プロレタリア文化大革命の精神を具えた英雄像を作り上げるよう努めよう。この文学形式を通して「このたびのプロレタリア文化大革命が、プロレタリア独裁を強固にし、資本主義の復活を防ぎ、社会主義を建設する上で、完全に必要であり、非常に時宜にかなったものである」ことを示そう。これはいうまでもなくわれわれ業余作者と革命的文学者の光栄な任務である。

文学をより直接的に「プロレタリア文化大革命」という政治に奉仕させること、「プロレタリア文化大革命」をさまざまな側面から肯定的に熱情をこめて描くこと、そのためには各分野でこの革命を推進する様々な「英雄」を造型すること、これが現在の文学の任務である。『朝霞』はそのような作品掲載の舞台として創刊される。やや敷衍して

出版社編輯部編『“陰謀文芸”批判』人民文学出版社、1978年7月。

(8) 文革期の上海労農兵文壇でしばしば重要な評論を発表するこの執筆者は中共上海市委員会の執筆グループのペンネームであった。

(9) 任犢「読《朝霞》一年」『学習与批判』1975年第1期。

言えばこの文章はこう読むことができる。事実、『朝霞』はそうした作品を掲載しつづけ、文革期文学の内容を具現する雑誌となったのである。

4.「朝霞叢刊」『朝霞』掲載作品題名・執筆者索引凡例

本索引は原則として「朝霞叢刊」・『朝霞』掲載作品のうち、小説、散文、随筆、ルポルタージュ、シナリオ、詩歌の執筆者と作品題目に限った。従って、理論や決意表明の類は採っていない。

「朝霞叢刊」と『朝霞』の作品題目、執筆者索引の記載は以下の原則によった。

1.「1. 小説・散文・随筆・シナリオ」と「2. 詩歌」の2部に分けた。以下の原則は1、2に共通である。
2. 各項目は執筆者名、掲載雑誌・掲載書、作品題目の順とした。
3. 人名はピンイン順とした。
4.『朝霞』掲載作品は何年何期かを「76-8」のように数字で示し、「朝霞叢書」掲載作品は書名を、例えば［序］のような略記号で示した。略記号については、本章第2節参照。
5. 小説と詩以外は、随筆＝（随笔）、（散文）、映画シナリオ＝（电影剧本）、話劇シナリオ＝(话剧)などで示した。
6. 共著である場合は共著者のそれぞれの人名から検索できるようにした。
7. 集団創作で人名のない場合は1. 2. の末尾に掲げた。
8. 集団創作で執筆者として署名されている場合は、個人執筆者として扱い、末尾に集団創作作品の執筆者であることを示した。

『朝霞』『朝霞叢刊』掲載作品題名・執筆者索引

１．小説・散文・随筆・脚本

[A]

艾会竹	76-8	「我们什么也不怕」（随）

[B]

边风豪	74-2	「钢厂新人」
	74-3	「号子嘹亮」（包裕成と共著）
	74-11	「新的镜兴」
	75-6	「考勤」
包裕成	74-3	「号子嘹亮」（边风豪と共著）

[C]

查志华	76-6	「“忙人”与“闲人”」（随）
蔡期立	76-8	「我是一个兵」（随）
曹刚强	74-2	「火上加油」
	74-7	「主角」（姚忠礼と共著）
	76-8	「抗震救灾胜利歌」（弹词）
曹秋强	76-6	「送给母校的礼物」（散）
曹雨煤	75-4	「水妹子」
曹仲高		「金色的呵夏河」（电影剧本）［闪］
陈伯玉	75-7	「带班的人」
	76-7	「你代表谁」
陈传瑜	76-3	「幼儿园的钟声」
陈大康	76-1	「谈“算帐”」（随）
	76-4	「光明与黑暗」（随）
	76-6	「“饮食结构”改善种种」（随）
	76-8	「理想谈」（随）
陈继光	74-8	「铁道工人之歌」（散）
	74-11	「上海啊，你的未来——理想颂」（散）
陈关龙	76-4	「泥沙辨」（随）
陈　光	76-1	「新的课题」（李萃と共著）
陈述之	75-8	「急性子的人」
陈思和	76-6	「且谈“黄绢之术”」（随）
陈先法	74-10	「秧田新绿」（赵兰英と共著）
	75-12	「胜似春光」（周林发と共著）（散）

	76-1	「未受邀请的“代表”」
陈心中	75-9	「在骆峰上」（徐一鸣，林伟平と共著）
陈　星	75-6	「接班的钟声」
陈足智	74-3	「浦江潮」（征文）
		「浦江潮」［序］
成　群		「高山尖兵」（六场话剧）［战］
程　鹏	76-3	「山口把关」
崇学余	74-7	「渔灯」（散）
崔洪瑞	74-4	「一篇揭矛盾的报告」

［D］

殿　群		「林海雪梅」［金］
董德兴	75-1	「归心似箭」
	10	「无产者」（汤淼と共著）
	76-1	「高瞻远瞩」（胡延楣と共著）
		「前进，进！」［序］
		「前进，进！」［金］
董国新	76-4	「阵地」（徐根生と共著）
董　蕾	76-3	「柳河川记事」
董庭泓	76-7	「苍山红叶」（散）
段荃法		「青砖歌」（中篇小说）［火］（张有德，樊俊智と共著）
段瑞夏	74-1	「电视塔下」
	3	「怒吼 —上海市批林批孔战斗巡礼」（特写）
	9	「典型发言 —读≪一篇揭矛盾的报告≫」
	11	「上海啊，你的未来 —理想颂」（散）
	75-1	「十年树人」
	7	「这不是偶然的」
	76-1	「为革命委员会站岗的人」（征文选刊）
		「特别观众」［朝］
		「做伟大时代斗争生活的记录员」（创作体会）［金］
	9	「毛主席永远指挥我们的战斗」（追悼文）

［F］

范希平	76-6	「“团结”号」（诸宏建と共著）
方国平	76-8	「破冰的人」（单慧玉，龚金凤と共著）［学习班园地］
方　敏	76-8	「高路入云」（散）
方　胜		「进攻」［碧］
		「金色的熔炉」（六场话剧）［珍］（于柄坤と共著）
方同德	75-2	「出国之前」
方　学	76-7	「在党旗下」（散）

费明迪	76-1	「“四不象”析」(随)
傅北雄	76-6	「动力」

[G]

高　陈		「雪原前哨」[不]
高启道	76-8	「书记拜师」
高　爽		「珍泉」(电影文学剧本) [珍]
高　信	76-3	「不同的眼光」(随)
高义龙	76-4	「从“不是奴隶”到“做‘星期五’”」(随)
葛军力	76-4	「登山赋」(随)
古　华		「仰天湖传奇」[碧]
谷　雨	76-2	「报春花礼赞」(随笔)
		「第一课」[序]
		「第一课」[金]
谷　苇	76-2	「且说“改造”」(随)
顾绍文	74-11	「金色的路」(秦节と共著)
顾成耕	75-3	「万年青」
郭京生	75-1	「沙枣花」(散)
郭　宁	74-3	「组织委员」
		「珠水湖边」[碧]
郭振庭	74-5	「绿荫重重」(散) (钱红春と共著)
龚金凤	76-8	「破冰的人」(方国平，单慧玉と共著) [学习班园地]

[H]

韩　源	75-8	「洁白的饭单」(何琪琦と共著)
菡　子		「大海之歌」(散) [金]
何康平	76-6	「动向记录簿」
何琪琦	75-8	「洁白的饭单」(韩源と共著)
贺国甫	74-6	「工厂的主人」(话剧) (黄荣彬と共著)
侯苏豫	76-5	「小伟造反」(儿童文学)
侯陶珠	75-7	「填湾记」
华　彤		「理想之歌」[朝] (刘阳と共著)
黄荣彬	74-6	「工厂的主人」(话剧) (贺国甫と共著)
胡延楣	74-9	「车长」
	74-12	「崭新的记录——一个话务员的小簿子」(散) (余金锁と共著)
	75-1	「马灯赞」(散)
	10	「沿着黑龙江的激流」(散)
	76-1	「高瞻远瞩」(董德兴と共著)
	3	「红旗在我们心中飘扬」(散)

	7	「农大赞歌」（散）（张克必，金忠强と共著）
	8	「“工农兵业余作者”这个称号」（随）
胡万春	74-9	「新人小传」
	75-10	「永不停步」
		「战地春秋」（中篇小说）［战］
花　萌	76-8	「崭新的等号」（随）
黄蓓佳		「补考」［朝］
黄进捷		「离舰之前」［金］
黄新心	75-8	「长在屋里的竹笋」
黄宗英	75-12	「可敬的人们—长寿支路采场的日日夜夜」（散）（蒋小馨と共著）

［J］

季为民	76-9	「前哨」
计红绪		「千秋业」（电影剧本）［干］
贾平凹	75-6	「弹弓和南瓜的故事」（儿童文话）
	12	「队委员」
贾晓晨	76-6	「写在火红的枫的叶上」（散）
		「星星寨」（散）［金］
江曾墙	76-1	「向前看」（随）
	2	「莫把延安当西安」（随）
江华南	75-8	「大海捞针」
蒋明德	75-9	「潮兴」
	10	「光明磊落」（刘绪源と共著）
	76-4	「套红的号外」（征文）（施伟华，张福荣と共著）
蒋小馨	75-3	「店堂前的红灯」
	6	「演出前后」
	12	「可敬的人们　长寿支路菜场的日日夜夜」（散）（黄宗英と共著）
姜善伸	76-2	「谈“第一”」（随）
	4	「拉车，挡车及其它」（随）
焦租尧		「矿山的春天」（电影剧本）［干］
金江宁	74-5	「列车，迎着朝阳飞驰」　（散）
金钱峰		「一封支持信」（独慕剧）［不］
金忠强	76-7	「农大赞歌」（散）（张克必，胡延楣と共著）
践　波	74-6	「签订合同的时候」

［L］

郎松源	75-6	「一杯蜂蜜」
李　纯	75-9	「涛涛」

李凤杰	75-6	「文艺班里的风波」(儿童文学)
李良杰		「较量」(长篇细选载) [朝] (愈云泉と共著)
李　莘	76-1	「新的课题」(陈光と共著)
李振国	75-2	「海难路」
立　夏		「金钟长鸣」[序]
		「金钟长鸣」[金]
廖东风	75-3	「珞巴姑娘雅嘉」(叶唏と共著)
林启菌	74-8	「“铁手”」
林伟平	75-5	「献给庐山的歌」(散)
	9	「在驼峰山」(散) (陈心中, 徐一鸣と共著)
林正义	74-2	「闪光的军号」
	75-10	「写在朝如霞火的清晨」(散)
	76-5	「五月惊雷」
	9	「在严重的考验面前一写在唐山, 丰南地震之后」(散)
		「孟新英」[金]
凌　岩	75-12	「昔阳半月」(散)
	76-8	「初夏」
凌　云	76-6	「从“列宁奖金”说起」(随)
刘本夫		「小海蛟」[朝]
刘　川		「第二个春天」(六场说剧, 1973 年修改本) [钢]
刘成洁	74-12	「磨之歌」(散)
刘迪云		「金沙水拍」(电影剧本) [千]
刘殿玉	74-11	「迎春的窗花」(散)
刘观德	75-9	「钢厂笛声」
	12	「立春」
	76-2	「岗位」
刘绪源	75-8	「女采购员」
	10	「光明磊落」(蒋明德と共著)
	76-2	「凌云篇」
刘　芽	75-4	「区革委会的大楼」(散)
刘　阳		「理想之歌」[朝] (华彤と共著)
刘载德	75-6	「“主人栏”前」(话剧)
刘增新	74-9	「大合唱」(散)
刘征泰	74-1	「奔腾向前」(散) (周勇闯, 卫国珍と共著)
	5	「海难脚印」(散)
	11	「上海啊, 你的未来理想颂」(散)
		「陈玉成」(电影文学剧本) [珍]
楼耀福	75-2	「钢筋」
	74-5	「凌云」
	7	「一往无前的人」

陆俊超	74-1	「女船长」
陆丽劳	76-1	「赞美你, 火车兴」(随)
陆天明		「樟树泉」(话剧) [序]
		「火, 通红的火」(四幕话剧, 征文选刊」 [火]
		「扬帆万里」(三幕话剧) [珍]
陆振华	74-12	「机床大夫」
陆志平	75-6	「退休笛一天」
路遥	74-5	「江南春夜」(散)
吕兴臣	74-4	「野营途中」
		「弹着点」 [朝]
罗达成	75-7	「兴业路抒怀」(散)
	12	「古炮的壮歌」(散)(吴振标と共著)
	76-5	「炮火篇」(散)
罗建国	74-12	「远航书简」

[M]

毛炳甫	75-6	「签名」
梅子涵		「我和小白榆」 (散)(农场青年习作) [青]

[P]

潘颂德	76-5	「真仪辨」(随)
樊俊智		「青砖歌」(中篇少说)(张有德, 段荃法) [火]
樊天胜		「故乡散记」(散) [朝]
庞兆麟	76-7	「也谈“秤砣”」(随)
彭吉安	76-5	「再闯落马坡」

[Q]

漆启泰	74-9	「前进, 黄甫江的主人一写自上海市技术革新展览会的报告」(报告)
钱　钢	75-1	「钢浇铁铸」
	12	「金环岛畅坏」(散)
	76-1	「指路的明灯, 继续革命的动力一学习毛主席词二首的一点体会」
		「钢浇铁铸」 [序]
钱红香	74-5	「绿荫重重」(散)(郭振庭と共著)
钱建群	74-10	「再阅虎口洋」
钱世梁	75-7	「砂粒」(散)(诸燮昌と共著)
	76-6	「光明的事业」(散)
秦　节	74-11	「金色的路」(顾绍文と共著)

清　明		「初春的早晨」［序］
		「初春的早晨」［朝］
邱茂中	75-9	「产值问题」
邱伟坚	76-1	「一道考题」
瞿晨渔	76-9	「不尽的航程」(张圣隆, 施正国と共著)［学习班园地］
瞿铭	76-8	「弧光曲」(汤君と共著)［学习班园地］(散)
曲信先		「狂澜曲」(电影文学剧本)［碧］
群　文		「车轮滚滚」(散)［金］

［R］

任大霖	74-2	「路」(散)
任雨人	75-4	「橱窗内外」(散)
任志高	76-1	「第五十一个学员」
鲁　风	76-1	「社员」

［S］

沙　群	72-6	「春风物抑」
单慧玉	76-8	「破冰的人」(方国平, 龚金凤と共著)［学习班园地］
邵　华	76-5	「中流砥柱」
施伟华	74-10	「序曲」(征文)
	76-4	「套红的号外」(征文)(张福荣, 蒋明德と共著)
		「序曲」［序］
施　方	74-12	「鼓声」(散)
	75-2	「铁英队长」(速写)
	5	「矿山苍松」(散)
史汉富	74-8	「布告」(征文)
	75-4	「百分之九十五」
	9	「普通一员」
	76-7	「东西南北中」(征文)
		「布告」［序］
		「光明的道路」(四落话剧)［珍］
		「朝霞」［朝］
士　敏	74-1	「担子」(散)
	76-1	「标灯闪闪」
		「暗礁」［朝］
		「胸怀」［金］
盛华海	75-3	「友谊手」
		「青月生于蓝」［朝］
盛慕真		「茶花」(散)(农场青年习作)［青］
苏桂波	76-3	「新鲜婶儿」(征文)

孙　颙	74-6	「长江后浪推前浪」
	75-5	「老实人的故事」
	12	「窗口」(散)

[T]

谭留根	75-3	「火花」
唐水明	74-9	「珍珠」(散)(徐东达と共著)
	76-8	「本色」
陶志豪	74-8	「长龙忧虎记」
田　谷	75-7	「叶正青」

[W]

王成君	75-1	「文革嫂」
王传诗		「早晨」(散)(农场青年习作) [青]
王　蓬	75-9	「假日」
	76-3.1	「菜苗事件」
王国荣	76-5	「敬礼! 五星红旗」(随)(易志祥と共著)
	7	「“换岗”赞」(随)
王　建	74-10	「集大叔」(散)
王金富	74-5	「试航」(征文)(王金富, 朱其昌, 余彭年と共著)
		「试航」[序]
王锦园	75-7	「爆竹声声」(散)(愈天白と共著)
王立信		「欢腾的小凉河」(中篇小说) [战]
王琪霞	75-9	「冠车赛」
	76-6	「风口」(征文)
王端阳	75-5	「重任在肩」
王小鹰	74-10	「花开灿烂」(散)
王晓元	76-1	「小菁和小健」
王修亚	76-4	「小楼风雨」
王振栎	75-5	「浪花」
王仲翔	75-12	「百分之百」
王周生	76-3	「晨光从这里升起」(散)
青国华	75-1	「跑发前进」
卫国珍	74-1	「奔腾向前」(散)(周勇闯, 刘征泰と共著)
	8	「明天」(散)
	76-6	「渔场剪影」(散)
		「城乡路上」(散) [金]
吴　集	75-4	「流水钱的波澜」(散)
吴若春	75-2	「朝阳升起的时候」
吴胜昔		「助手」(于炳坤と共著) [朝]

吴小丽	76-8	「一张列宁的照片と共著）（随）
吴振标	75-12	「古炮的壮歌」（散）（罗达成と共著）
吴芝麟	74-2	「在列车上」（散）
伍元新	75-3	「洪雁度假」
	76-2	「可爱的年轻人一来自大类山的报告」

［X］

奚　青	74-12	「路霞」
夏坚勇	76-2	「掌印」
夏　兴	74-1	「初试蜂艺」（征文）
		「初试蜂艺」［序］
向阳红	74-10	「赛诗」
肖　麓	76-7	「太阳赞」（随）
谢炳锁	74-9	「焊条钢」（散）
	75-9	「爆破牛的传统」（散）
	76-7	「“看火”」（散）
	8	「交班」
谢其规	76-1	「指路的明灯继续革命的动力一学习毛主席词二首的一点体会」
忻才良	76-5	「长城赞」（随）
	7	「压力与动力」（随）
徐东达	74-9	「珍珠」（散）（唐水明と共著）
	74-5	「涛声」（散）
	11	「上海啊，你的未来一理想颂」（散）
	75-2	「光明颂」（散）
	76-5	「革命摇篮颂」（散）
徐根生	74-6	「一杆敲断的教鞭」
	76-4	「阵地」（董国新と共著）
徐国粱	74-5	「列车，迎着朝阳飞驰」（散）（金江宁と共著）
徐开垒	75-10	「生活的大树一国庆抒情」（散）
徐一鸣	75-9	「在驼峰上」（散）（林伟平，陈心中と共著）
徐友良	74-5	「夜空哨兵」（散）
许崇义	75-1	「友谊号」（散）

［Y］

严　捷	76-2	「新坝合龙的时候」
严祥炫	76-1	「指路的明灯继续革命的动力一学习毛主席词二首的一点体会」
杨代藩	74-6	「会燃烧的石头」
	75-4	「春笋岭」

	10	「迎可松」(散)
	76-4	「只要主义真」(征文)
		「不灭的篝火」[不]
杨德昌	75-5	「剪春罗」
杨福根	76-2	「郭大妈的“万宝全书”」
杨辉周	75-12	「柝拆的人」
杨美清	74-6	「岩龙和小平」
杨少云	75-1	「鱼水井」(小歌剧)
杨　淼	74-12	「师生」
	75-10	「无产者」(董德兴と共著)
	76-8	「金色的水路」(散)
杨文达	75-1	「鱼鹰初试」
杨宇照	74-9	「价日卡的历史」(散)
杨中言	74-7	「一往无前的人」(楼耀福と共著)
		「铁牛新歌」(独幕剧)[碧]
姚　华		「青春颂」[序]
		「青春颂」(征文选刊)[青]
姚建明	74-7	「起宏图」
姚金才		「新的扬程」(愈云泉と共著)[闪]
姚克明	74-3	「挂红花的那天」(征文)
	9	「起重工的手」(散)
	11	「上海啊,你的未来一理想颂」(散)
		「挂红花的那天」[序]
		「踏着晨光」[金]
姚胥正	75-3	「老门卫」
	76-9	「老姐妹」
姚　真	74-1	「红卫兵战旗」(征文)
	4	「灿烂的画卷—≪户县农民画展≫巡礼」(报告)
	76-1	「峥嵘岁月」(征文选刊)
		「红卫兵战旗」[序]
姚忠礼	74-7	「主角」(曹刚强と共著)
叶公觉	74-12	「竹林深处」(散)
叶　勉	74-8	「劲梅」
	75-1	「榔兴篇」
叶启明	76-2	「农大散记」(散)
叶蔚林	75-8	「大草塘」
叶文艺	74-6	「组网」(散)
叶　唏	75-3	「珞巴姑娘雅嘉」(廖东风と共著)
		「金珠」(长篇小说≪金珠≫选载)[不]
易杰祥	76-5	「敬礼!五星红旗」(随)(王国荣と共著)

俞亮鑫	74-12	「永不停步」
俞天白	75-2	「高空的闪光」(散)
	7	「爆竹声声」(散)(王锦园と共著)
	76-5	「第一号文件」(王锦园と共著)
俞云泉	74-4	「潜力」
		「新的扬程」(姚金才と共著) [闪]
		「较量」(长篇选载)(李良杰と共著) [朝]
余方德		「桐花盛开」[金]
余慧斌	76-5	「托洛茨基的幽灵和塔斯社的呓语」(随)
余金锁	74-12	「崭新的记录ー一个话务员的小簿子」(散)(胡廷楣と共著)
余彭年		「试航」(王金富, 朱其昌) [序]
余秋雨	75-7	「记一位县委书记」(散)
余思涛	74-11	「笔」(散)(征文)
		「笔」[序]
于炳坤		「助手」(吴胜昔と共著) [朝]
		「金色的熔炉」(六场话剧) [珍]
于　水	75-5	「为了明天, 向前」
	76-8	「前线」(选文)
雨　煤	75-7	「山寨钟声」
郁俊荧	75-4	「钥匙」(沈金祥と共著)
袁　航	74-5	「东风扑面」
	7	「闪闪发光的日方」(散)
袁和平	76-2	「边寨新曲」(散)
		「马背上的教师」(电影文学剧本) [不]
袁文耀	75-12	「我的家」(散)

[Z]

张步真	76-1	「毕业归来」
		「高山鱼跃」(碧)
张长公	74-11	「最后一个工班」
张成珊	74-6	「会燃烧的石头」(杨代藩と共著)
张达邦	76-6	「不寻常的车厢」
	9	「两改通知」
张道余	74-1	「植保姑娘」
张凤生	75-12	「连心坝」(散)
张福荣	76-4	「套红的号外」(征文)(蒋明德, 施伟华)
张建中	76-8	「龙江花」
张斤天		「龙潭虎跃」[朝]
张克必	76-7	「农大赞歌」(散)(胡廷楣, 金忠强と共著)

张莉萍	75-8	「红色的箭兴」
张盛荣		「春回龙泉」（六场话剧）［闪］
张圣隆	76-9	「不尽的航程」（瞿晨渔，施正国と共著）（学习班园地）
张圣禄	76-7	「罩不住的光」
张士敏	75-3	「深度」
张永秀	75-4	「南山红梅」
张有德		「青砖歌」（中篇小说）（段荃法，樊俊智と共著）［火］
张重光	76-9	「西沙抗风桐」（散）
		「灵敏度」［闪］
		「杜捧赞」（散）［金］
赵　瀚		「朝霞异彩」（电影剧本）（邯郸市创作组）［千］
赵宏元	75-12	「金环岛畅怀」（散）（钱钢と共著）
赵兰英	74-10	「秧田新绿」（陈先法と共著）
赵丽宏	75-10	「笛音缭绕」（散）
赵荣海		「向芦苇滩进军」（散）（农场青年习作）［青］
赵孝思	76-8	「方向」
赵　自		「底脚」［朝］
		「山灯」［闪］
郑楚华	76-6	「大厦的联想」（随）
郑加真		「迎着朝阳」［青］
郑生思	74-10	「万年河波涛」
钟兴兵		「港小牛和他的小伙伴」［碧］
周开	76-5	「大会之前」（儿童文学）
周林发	74-4	「浦江岸畔的战歌ー上海市群众歌咏大会“自力更生”专场侧记」（报告）
	75-6	「权力」
	9	「风浪里的歌」（散）
	12	「胜似春光」（散）（郑先法と共著）
	76-3	「总攻发起之前」（征文）
周　天	76-1	「秧苗与≪春苗≫」（随）
周伟民	76-6	「瞄准点」
周宣地	75-8	「“老管”」
周勇闯	74-2	「小主人」
周勇平	76-4	「老耿兴」
	7	「铁厂纪事」
朱建平	76-3	「复辟狂的辫子」（随）
朱杰人	76-4	「典型化的力量」（随）
朱勤甫	74-3	「攻“关”」
朱敏慎	74-7	「心中的炉火」
	75-1	「广场件近的供应点，附≪供应点上≫初稿」

	3	「营业之外」
		「广场附近的供应点」［序］
		「初战」(中篇小说)［火］
朱其昌		「试航」(王金富, 余彭年と共著)［序］
诸宏建	76-6	「“团结”号」(范希平と共著)
诸燮昌	75-7	「砂粒」(钱世粱と共著)（散）
祝孔明		「东风劲吹」［青］
庄大伟	74-2	「小兵过河」
	7	「第一线上」
庄新儒	76-8	「在革命风爆中」
宗廷沼	76-2	「铁肩膀扛旗」
邹悠悠	74-10	「公社的春天」(散)
	75-1	「战鼓催征急」
左鸿怒	75-6	「汽车往哪里开」
	4	「风轮飞转」

［集团創作］

复旦大学文艺宣传队

	74-4	「抗寒的种子」(话剧)(征文)
		「抗寒的种子」［序］

邯郸市≪朝霞异彩≫创作组

「朝霞异彩」(电影剧本)(朝瀚执笔)［千］

≪金色的呵夏河≫创作组集体创作·曹仲高等执笔

「金色的呵夏河」(电影剧本)［闪］

金山县金卫公社 82 大队创作组

74-8　「海滨新一代」

上海电影制片厂≪赤脚医生≫创作组

「赤脚医生」(征求意见本)［钢］

上海电影制片厂重拍≪渡江侦察记≫创作组

「渡江侦察记」(1973 年修改本)［钢］

上海儿童艺术剧院、上海市第二中学集体创作

「一分之争」(独幕儿童剧)［钢］

上海儿童艺术剧院　≪钢铁洪流≫创作组

「钢铁洪流」(七场话剧, 1973. 11 演出本)［钢］

上海儿童艺术剧院　「向阳花」(独幕话剧)

上海高桥化工厂≪碧空万里≫创作组

「碧空万里」(独幕剧)［碧］

上海戏剧学校

74-6　「三斤化肥」(小京剧)

上海戏剧学院戏剧文学系编剧专业一年级集体创作

75-6　「新店员」(话剧)

上海造船公司文艺创作组

「誓愿」(长篇小说≪大海铺路≫选载) [碧]

中华造船厂 "三结合" 业余创作小组

74-2　「追图」(征文)

「追图」[序]

2. 詩 歌

[B]

冰　夫　74-2　「工人阶级怒挥铁扫帚」

滨　之　74-12　「鹰」

76-6　「吹牛一宰牛」

[C]

蔡太志　75-11　「长征路上」

曹惠民　74-2　「全站盛开龙江花(朱林と共著)」

柴琦萍　74-10　「献给领袖毛主席」

荣　安　75-3　「辽西母亲」

陈安安　74-4　「春雷」

陈传俊　74-2　「火葬孔子和林彪」(张振华と共著)

陈春江　74-5　「五・七大道」

陈　慧　75-3　「骨肉亲情深(成莫愁と共著)

陈梦醒　75-11　「突击」

陈旭麓　75-11　「闽夏纪行杂诗选录」(田体诗词)

陈贤德　76-5　「批邓卷起千重浪」

陈　晏　74-1　「描春手」

陈镇洲　75-7　「十里钢城齐沸腾」(王晨湖と共著)

陈祖言　74-3　「批林批孔头争速写」

4　「万里狂飙落九天」

75-8　「冲锋歌」

76-3　「剪彩的年轻人」

程良顺　76-5　「车间批邓滚惊雷」

程仁祥　74-3　「怒涛滚滚」(成莫愁と共著)

成莫愁　74-3　「怒涛滚滚」(程仁祥と共著)

8　「在图书馆」

75-2　「宏伟蓝图北京来」

3　「骨肉情深」(陈慧と共著)

5　「把炉火烧得通红」(集体)

	76-8	「战歌壮」
仇学宝	75-5	「把炉火烧得通红」(集体)
崔合美	76-7	「钟」

[D]

大　江	76-4	「愤怒声讨邓小平」
戴巴棣	75-8	「战地通讯」
戴大喜	75-11	「赞老红军的草鞋」
戴仁毅	74-8	「千年红」
戴育红	76-4	「儿忆征帆战狂澜」
邓秀雄	75-2	「台湾人民向北京」
丁林发	74-1	「女舵工」
丁卫华	74-7	「千斤顶」
董秉钧	75-12	「进驻学校七周年有感」
杜连义	76-1	「春光赋」
瑞　甫	74-4	「诗如惊雷卷涛声」
段瑞冬	74-3	「筑路者的战书」

[F]

范潮龙	74-7	「是党加足大庆油」
范垦程	75-2	「工地指挥部」
范峥嵘	74-2	「集体户的夜」「
方　波	74-2	「“天马”摔地葬沙丘」
冯新民	76-8	「走进鲁迅的故居」

[G]

高近远	76-6	「战马」
高炯浩	75-7	「塔里木青年城」
干　戈	75-11	「战士和山」
葛元兴	76-4	「不许你邓小平开倒车」
宫　玺	76-3	「叱咤风云」
龚　翔	76-5	「首都民兵斗志昂」
谷亨利	75-7	「炉前工赞」
	11	「钢城处处新歌多」
谷卫华	74-2	「三天卸完“风雷”号」
顾根发(法)	74-10	「战港湾」
	76-7	「书记咱划等号」
顾行伟	75-6	「喜为革命样染板戏制新装」
管强生	75-8	「火红年代出英雄一献给孔宪凤同志」
郭昌萍	74-2	「孔, 林都是大黑瓜」

郭成汉	75-2	「夜批≪论语≫一理论小组纪事」

[H]

韩怡同	75-7	「毛主席健步登炉台」
何国梁	75-11	「开山」
何维莹	74-7	「公路文飞重霄九」
	75-2	「咱是祖国一堵墙」
洪国斌	75-12	「良钟“二〇〇〇年号”」
胡明海	75-2	「广播员的话」
		「农场的“布谷鸟”」[青]
胡鹏南	74-5	「解放军叔叔打得好」
胡同伦	74-5	「“滚地龙”」
胡永槐	75-6	「炼钢工一大学生」
	76-8	「向华顶风」(叙事诗)
		「海岛茶」[青]
黄诗一	74-2	「怒劈孔老二, 林彪」
	7	「红旗一辈传一辈」
		「红色日记」[青]
黄世益	74-3	「钱丫兴」
	4	「女车工」
	75-11	「钻」
		「电站老安装」「绣“花”」[碧]
黄志长	76-7	「拉幕」

[J]

贾绍衡	75-11	「公朴赞」
江泽宏	76-5	「革命烈火势更旺」
姜金城	74-11	「人民大会党颂」
	75-11	「大潮」
		「英雄赋」(朱金晨と共著)[不]
金果临	75-11	「省省都有大寨县」(张东方と共著)
金洪远	74-7	「托起大厦上九重」(李士平と共著)
金兮敏	74-10	「油塔颂」
	75-11	「海港」(散文诗)
京　英	76-4	「首都民兵真英雄」
居有松	74-7	「船厂夜读」
	75-2	「喜报铺出前进道」
	5	「把炉火燃烧得通红」(集体)
	11	「红袖章」

[K]

康铮才	75-11	「一层老茧一层天」
柯　原	75-7	「红井」

[L]

李根宝	75-11	「金山行」
李连泰	75-11	「古炮台, 新港湾」(散文诗)
李曙白	76-8	「你好! 山村」
李小雨	75-11	「长征新曲」
李学鳌	75-11	「老红军的征鞍」
李　瑛	75-4	「钻右及其他」
	11	「向二〇〇〇年进军」
李幼容	75-10	「壮志伊犁河」
李云良	74-5	「渴」
藜　泉	75-8	「鸟豪山放歌」
林　俊	75-6	「欢庆　　“六一”放声唱」
凌秉威	75-6	「铁扫帚紧紧握手中」(朱建国と共著)
刘大杰	76-3	「七律四首」
刘登翰	75-1	「狂飙颂歌」(孙绍振と共著)
		「狂飙颂歌」(孙绍振と共著) [序]
	11	「插秧机」(孙绍振と共著)
刘凤华	76-4	「船台批判会」
刘鹏春	76-6	「明天」(征文)
刘　薇	75-11	「站在哨所唱颂歌」(石祥と共著)
刘希涛	74-5	「为革命样柏戏擂鼓欢呼」
	75-4	「把铁拳攥得更紧一夜读≪国示与革命≫」
	5	「把炉火烧得通红」
柳光明	76-5	「端枪咱打靶」
龙彼德	74-12	「这小伙, 就是倔」
芦　芑	75-11	「我唱我们的时代」
陆慧珠	76-5	「修正主义脚下踩」
陆　萍	74-3	「酣战」
	9	「银海轻舟」
	75-2	「在欢庆的日子里」
		「闪光的工号」(郑成义と共著) [闪]
陆永刚	76-5	「人心所向谁可」
陆志萍	76-8	「草地上的牛倌」
路　鸿	74-7	「金色的船台」
	75-7	「雨中誓师会」
	11	「钻工颂」

路铭康	74-5	「大海乐得拍浪花」

[M]

马恒祥		「老木工的心」[碧]
马开元	74-8	「染厂新将」
	76-2	「高举先烈的旗帜, 前进一写在人民英雄纪念碑前」
毛邦杰	76-4	「车兴就是革命号」
毛炳甫	74-2	「海港放歌」
	75-1	「总指挥一老炮手一矿山行」
	11	「纱厂新谣」
	76-5	「战报」
毛震郁	74-10	「架线工的车间」
茅晓峰	74-10	「电」
梅子涵	74-3	「老大爷的控诉」
糜佳乐	74-1	「红旗下」
	75-8	「“钢筋”」
缪惟民	75-3	「白云深处」

[N]

倪　平	75-11	「插秧机」
宁　于	74-5	「干校灯火」
宁　宇	74-11	「乘长风, 破万里浪」
	75-2	「西柏坡」
	5	「把炉火烧得通红」(集体)
	11	「水乡大寨」
牛明通	74-5	「哥哥下乡」

[O]

欧来龙	75-11	「边寨喜讯」

[P]

潘复林	75-6	「校园广阔天地新一赞函授大学」
潘礼和	74-2	「战!开战!」
彭友德	76-3	「山村出夜」

[Q]

钱　钢	74-2	「老首长的战友」
	10	「小伙讲大课」
	75-6	「战士之歌一写在好八连的征途上」
	11	「扫帚苗」

	76-6	「献给十年的诗篇」(征文)
钱国梁	74-9	「炼钢颂歌」
	75-8	「对江雷」
	11	「出航」
钱永兴	74-10	「文化革命结硕果」

[R]

任良才	75-11	「好八连诗选」(集体)

[S]

沙元伟	75-11	「农村生活诗抄」
邵　钧	74-10	「天天喜印好春光」
申　卫	76-4	「“中央决义”最英明」
沈　度	75-2	「个个都是出山虎」
沈　祥	74-2	「咱是革命火车兴」(郁俊英と共著)
沈新民	75-1	「粮站小景」
施　戈	75-2	「春风捎着喜讯来」
石　祥	75-11	「站在哨所唱颂歌」(歌词)(刘薇と共著)
史　俊	74-4	「我们是码头女司机」(烁渊と共著)
史文熊	74-2	「阶级仇恨迸火花」
史玉新	75-2	「钢城怒火冲天烧」
烁　渊	74-4	「我们是码头女司机」(史俊と共著)
司马力	75-2	「战烟囱」
宋连庠	75-10	「宋江与高赞」
苏乾英	75-12	「教育革命赞」
孙德光	75-11	「运航」
孙明义	74-4	「咱驾新船多自豪」
	12	「放筏姑娘」
孙绍振	75-1	「狂飙颂歌」(刘登翰と共著)
		「狂飙颂歌」(刘登翰と共著)［序］
	11	「第一线上」(刘登翰と共著)
孙雪兴	75-2	「化作工农友谊桥」
孙友田	75-11	「会战歌」

[T]

唐乃祥	75-6	「新时代的清道工一赞一位复员军人」(张鸿喜と共著)
	76-7	「民兵的枪刺」(张鸿喜と共著)
陶嘉炜	74-12	「遥远的首航」
田　浩	74-5	「青花怒放」

[W]

宛世照	74-7	「泖荡新姿」
	10	「绘图」
	75-11	「社社队队学大寨」
汪春荣	75-6	「学习叔叔魏尧升」
王洪仁	76-5	「连根铲干净」
王继刚	74-7	「煤嫂」
王家林	74-4	「碧海红心谱凯歌」
王金海	76-3	「夜访函授点」
王立刚	76-4	「土炕大学」
王鹏骏	74-10	「“星火”颂」
王　萍	75-6	「学习冬子分爱憎」
王鲁夫	74-10	「火」
	75-7	「铁人队伍」
王　森	74-1	「海港新苗」
	75-11	「声声飞向红太阳」
王树滨	74-7	「工人作曲家」
王亚法	74-4	「报春花」
		「奔腾的火车头」[碧]
王银华	74-2	「钢城怒火冲无烧」(史玉新と共著)
王勇军	75-12	「赞社会主义新大学」
王晨湖	75-7	「十里钢城齐沸腾」(陈镇洲と共著)
魏　峡	74-9	「粉碎林彪复辟梦」
卫雷鸣	74-2	「喜看海港新一代」
闻戈豪	75-11	「≪一代新人≫大合唱歌词选」
吴　浩	75-3	「山村晨曲」
吴慧芳	76-5	「批邓战鼓擂德急」
吴永福	75-11	「我献祖国一江船」
吴永进	74-2	「老队长」
	75-6	「去向牌」
	8	「灯火曲」
吴永祚	75-9	「“同志”」
	76-4	「参战」
武佩牛	75-2	「咱是祖国一堵墙」(何维莹と共著)

[X]

夏连荣	74-2	「浪尖群英会」
夏智定	75-8	「图书室」
小　路	74-5	「打倒林彪大坏蛋」
谢其规	74-2	「千里万马, 直捣林彪老巢」

	7	「韶溪赞」
	75-4	「光辉的便条」
熊尊茂	75-2	「钢城卸在群山中」
徐　刚	74-10	「县委会上」
	75-11	「追乡音」
	76-7	「在历史的火车头上一献给我们伟大的党」
徐怀堂	74-7	「夜填入党志愿书」
徐如麒	74-1	「怀念哨所」
	75-2	「哨音一献给年轻的轻重机班长」
	75-5	「把炉火烧得通红」(集体)
		「芦棚歌」［青］
徐　祥	75-11	「雪地练兵」
徐照湍	75-11	「海上炊事员」
	74-7	「胜利的航程」
徐志啸	74-10	「工人讲师赞」
徐正秋	75-11	「大江伴我争上游」

［Y］

晏　晨	74-4	「诗如惊雷卷涛声」(瑞甫と共著)
严良华	75-2	「借来月亮当粮食」
	75-1	「第一把手的手」
	75-11	「彩色的拷贝」
严忠喜	75-9	「书记的铲锈刀」
杨　冬	75-11	「磨炼」
杨　槐	76-4	「峥嵘岁月放歌」
杨怀远	76-4	「劈风斩浪万里开」
杨晓驯	75-6	「战士之歌一写在好八连的征途上」(钱钢と共著)
姚美芳	74-10	「“打靶”」
	75-11	「写给母校的信」(姚忠礼と共著)
姚鸿恩	74-2	「我们把它烧成灰」
姚焕吉	75-11	「油泉」
姚忠礼	75-11	「写给母校的信」(姚美芳と共著)
殷萍萍	75-3	「批林批孔打冲锋」
叶　茂	75-12	「教育革命春常在」
叶之谦	75-6	「小朋友爱画画」
余长飞	74-5	「学习金训华」
余冠雄	74-2	「砸碎孔, 林复辟梦」
	74-5	「颂歌献给毛主席」
	75-11	「风镐」(朱金晨と共著)
余惕君		「团结胜利曲」［战］(袁航と共著)

前亮鑫	75-9	「爱闯风浪的人」
于　水	76-4	「送」
于宗信	74-10	「亮闪闪的谋钻」
郁俊英	74-2	「咱是革命火车头」(沉金祥と共著)
元　辉	76-7	「青春的火花」
袁　航		「团结胜利曲」[战] (余惕君と共著)
袁金康	75-11	「建设者的足迹」
袁　军	74-11	「布林的西港的叩门声」
	75-10	「宋江祭晁盖」
	75-11	「海的回声」
		「高歌笑迎满天霞」[青]

[Z]

张呈富	75-4	「向十六个小将致敬」
张春文	75-11	「凉山月琴」
张道康	74-9	「红小兵学炼钢」
张东方	75-2	「祖国航船永向前」
	75-11	「我爱这(?)沸腾的工地」(歌词)
	75-11	「省省都有大寨县」(金果临と共著)
张东辉	75-3	「在边疆」
张帼懿	76-4	「千军万马批右倾」
张鸿喜	74-4	「钢铁工人就是钢」(严祥炫と共著)
	75-6	「新时代的清道工一赞一位复员工人」(唐乃祥と共著)
	76-7	「民兵的枪刺」(唐乃祥と共著)
张克必	76-3	「在鹰嘴山峰」
张　廓	75-11	「闪光的日子」
张梅芳	75-11	「渔业歌」
张敏贤	75-8	「工地的路」
	75-11	「鼓风机赞」
张乃清	75-11	「虎头山上看全国」
张启国	75-2	「团结胜利跟着党」
张秋生	74-5	「雪地开串串花」
	74-9	「展览会」
	75-11	「向阳院里新事多」
张　涛	74-3	「木工棒, 革命的接力棒」
张伟强	75-4	「钢钎, 银针一赞工人医生」
	75-11	「出钢钟声」
张尧国	76-5	「五星红旗立云天」
张振华	74-2	「火葬孔子和林彪」(陈传俊と共著)
	74-12	「欢聚」

	75-9	「车辙」
	75-11	「开路先锋」
张正秋	74-12	「请战」
张　佐	75-11	「老支书」
赵丽宏	75-7	「胜利的渡口」
赵秋宽	75-11	「喜报贴上贴天安门」
郑成义	74-4	「纺织工人之歌」
	75-4	「茶山新歌」
	75-5	「把炉火烧得通红」(集体)
	75-10	「金匾一木枷」
		「闪光的工号」(陆萍と共著) [闪]
郑荣华	75-11	「儿歌」
钟　颂	75-7	「献给领袖毛主席」
钟　志	76-5	「写在革命历史博物馆门前」
仲昌佐	75-7	「映红祖国挫表邦」
周晶浩	75-6	「要为革命学拼音」
周美华	74-2	「绞烂孔孟复辟道」
周双喜	75-2	「钢水, 公报, 相映红」
周　涛	76-8	「送报的姑娘」
周银宝	74-2	「女施车司机」
	74-9	「检验」
	75-2	「擂响进军的战鼓」
	75-6	「在工地上」
周振国	75-9	「在一家小厂门口」
周志俊	74-9	「加速」
	75-10	「扁担剧团」
朱建国	75-6	「铁扫帚紧紧握手中」
朱金晨	74-1	「不铁钢」
	74-12	「长安街礼赞」
	75-11	「风镐」(余冠雄と共著)
		「扎根」[青]
		「英雄赋」(姜金城と共著) [不]
朱　林	74-2	「全站盛开龙江花」(曹惠民と共著)
朱其昌	75-11	「小将」
朱曙生	75-11	「四海为家干革命」
朱亚夫	74-2	「烙铁作刀剥面皮」
竺国华	75-11	「接好革命班」

[集団創作]

蕃瓜弄小学“红锋”理论小组

74-9　　「从小批林、孔」
「从小顶住资产风」
露香园路小学红小兵歌足
75-6　　「长大要把祖国保」
星火农场　74-2
新五公社　75-11　　「新五公社民歌选」
杨国公社倡仪小学儿歌组
75-6　　「要做公社“小管天”摸岗哨」
上天二厂老工人合唱队
74-2　　「炸平林彪黑窝窝」
中华船厂七·二一文科班
75-11　　「喜迎船台又一潮」

第８章

『解放軍文芸』執筆者索引

本章は文革期刊行の『解放軍文芸』の執筆者の索引である。もともとは作品題目も掲載する予定だったが、膨大になりすぎ予定の頁数を超えてしまうために割愛した

『解放軍文芸』は１９５１年６月創刊、解放軍部隊に所属する文芸工作者の作品発表誌であるが、市販もされている。文革が始まった６６年、全国レベルの文芸誌（『人民文学』、『文芸報』など）はもちろん、各省作家協会傘下の文芸誌もすべて停刊になったが、『解放軍文芸』は６８年５月号まで刊行を続けた。７１年１１月の『北京文芸』を皮切りに地方レベルの文芸誌の復刊が始まる。７２年５月、『解放軍文芸』も復刊、活動を再開した。

文革期文学の中で『解放軍文芸』がどういう位置を占めていたかは、一つの検討に値するテーマである。本索引はそういう作業を進める際の基礎資料となるだろう。ただ、本索引には文革突入から停刊まで、つまり６６年から６８年までの資料が含まれていない。入手できなかったからである。それを補えば、種々の発見があるだろうと思う。今後の課題である。

『解放軍文芸』執筆者索引

[A]

a

阿鸽(合) 5

阿尔木呷 1975 11

阿斯尔 1973 7

ai

艾斐 1975 12

艾民有 1975 11

艾少平 1973 7

埃德加·斯诺 1975 11

an

安健 1973 3

[B]

ba

跋石 1972 5

bai

白海珍(合) 1973 7

白天氛(合) 1972 7

柏起 1975 11

bei

北星(合) 1975 4

ben

本芸 1975 2

本刊编辑部 1972 5

本刊编辑部 1976 10

本刊记者 1976 5

本刊评论员 1976 3

bi

毕凡 1975 3

毕星 1972 8

毕星星 1973 6

毕星星 1973 8

毕星星 1974 3

bian

卞雪松(合) 1975 1

编者 1974 9

编者的话 1975 1

[C]

cai

蔡师勇(合) 1976 2

蔡文祥(合) 1973 9

蔡晓萍 1976 6

才孝文 1976 2

cao

曹崇恩(合) 1973 6

曹金和(合) 1972 9

曹金和 1972 11

曹能国 1973 8

曹勇骅 1975 4

曹振峰 1972 6

曹振峰(合) 1972 10

曹征路 1972 8

草明 1974 1

ceng

曾凡华(合) 1973 12

曾凡华(合) 1975 5

曾祥富 1973 4

曾照欣 1972 7

chai

柴本善(合) 1975 1

柴山林 1973 12

chang

常安(合) 1974 3

常安 1974 11

常宝华(合) 1974 7

常宝华(合) 1975 6

常斌 1974 3

常贵田 1973 12

常贵田(合) 1974 7

常贵田(合) 1975 6

常学闻(合) 1972 9

长文(合) 1974 3

长友(合) 1972 9

che

车光明	1976	2

chen

陈炳	1973	6
陈彩云	1976	3
陈昌奉	1976	10
陈昌坤	1976	6
陈超	1974	4
陈潮荣	1975	11
陈德通	1972	12
陈淀国	1974	6
陈淀国	1975	3
陈定兴	1974	9
陈定兴	1976	1
陈广斌(合)	1972	5
陈广生(合)	1973	2
陈国屏(合)	1973	9
陈国正(合)	1973	4
陈国正(合)	1974	3
陈华才(合)	1974	3
陈坚	1976	5
陈进化	1975	10
陈克正(合)	1972	9
陈良新(合)	1974	4
陈良运(合)	1975	7
陈淼	1973	5
陈敏(合)	1974	5
陈明福	1976	2
陈明福	1976	10
陈其(合)	1973	4
陈其(合)	1973	5
陈秋(合)	1975	9
陈全富(合)	1976	4
陈全胜	1974	8
陈全胜(合)	1974	12
陈全胜(合)	1975	2
陈全胜	1976	3
陈生田(合)	1972	11
陈士凯(合)	1976	4
陈思忖(合)	1975	9
陈旺火(合)	1976	4
陈伟力	1976	6
陈伟生	1972	7
陈文忠	1974	3
陈秀山	1974	4
陈衍宁	1973	9
陈衍宁(合)	1974	5
陈义(合)	1972	6
陈宜(合)	1973	1
陈毅	1975	12
陈逸飞(合)	1973	9
陈月昭	1973	3
陈玉先(合)	1972	7
陈玉先	1972	10
陈玉先	1975	3
陈玉先	1975	6
陈玉先(合)	1976	8
陈增智	1973	1
陈增智(合)	1973	4
陈增智	1974	3
陈增智	1974	12
陈智贤(合)	1975	7
晨枫(合)	1976	4
晨光(合)	1972	10

cheng

程宝泓(合)	1973	5
程宝泓(合)	1974	7
程宝泓(合)	1974	8
程宝泓(合)	1976	6
程宝泓(合)	1976	8
程冰大	1976	4
程丙恒(合)	1973	11
程步涛	1975	1
程光锐	1973	1
程何才(合)	1976	5
程鉴	1975	8
程江江(合)	1973	4
程世才	1975	11
成化生	1973	5
成平	1974	9
成平	1975	9

chu

初澜	1974	4
初澜	1974	6
初澜	1975	6
初澜	1976	4
初澜	1976	6
初学文(合)	1975	7

chun

春溪	1972	5
春溪	1973	7
春溪(合)	1973	10
春溪(合)	1976	5

cong

聪聪	1973	4

cui

崔国弟(合)	1975	6
崔合美	1974	3
崔合美(合)	1975	9
崔洪昌(合)	1973	1
崔洪昌	1975	1
崔洪昌	1975	10
崔鸿林(合)	1975	2
崔鸿林(合)	1975	4
崔鸿林(合)	1975	11
崔鸿林	1976	1
崔鸿林(合)	1976	3
崔家骏(合)	1973	2
崔汝先(合)	1976	2
崔希明	1974	4
崔玉和(合)	1975	2
催晓闻	1972	10

[D]

da

大可	1975	2

dai

戴长友	1973	6
	1974	6

dan

淡智涛		

de

德成	1972	8
德敏(合)	1974	7

deng

邓传信(合)	1973	12
邓国添(合)	1976	5
邓海南	1975	6
邓海南	1975	11
邓鲁延(合)	1976	7
邓乃荣(合)	1974	2
邓文方	1973	6
邓文方	1973	12
邓绪东(合)	1972	12
邓子敬(合)	1976	5

di

狄蟠	1976	3

diao

刁成国(合)	1972	12

ding

丁怀印	1974	2
丁建东(合)	1974	5
丁金栋(合)	1973	1
丁仁堂	1973	5
丁收	1974	9
丁秀峰	1972	10
丁一心	1976	4
丁勇茂(合)	1973	11

dong

董辰生	1974	4
董辰生	1974	10
董凤山(合)	1975	10
董耀章(合)	1972	10
董耀章	1973	4
董耀章(合)	1974	2
董耀章(合)	1975	9

董一兰	1976	3
东辉(合)	1976	6
冬雪	1975	10
dou		
窦孝鹏(合)	1972	6
窦益山	1973	11
窦益山	1974	5
窦益山	1975	3
窦益山	1976	7
du		
杜斌	1976	8
杜连军(合)	1976	7
杜澎	1974	10
杜澎改编	1973	11
杜彤	1972	9
杜贤江(合)	1975	9
杜耀妹(合)	1972	8
杜志民(合)	1972	6
duan		
段焕竞	1975	12
段宛生	1972	7
段自力(合)	1973	12
段瑞夏　林正义执笔	1974	1
[F]		
fan		
范春荣	1974	2
范春荣	1976	8
范道桂	1974	1
范迪宽	1972	8
范迪宽	1973	2
范迪宽	1973	12
范迪宽(合)	1974	3
范迪宽	1974	10
范迪宽(合)	1976	8
范建军	1972	6
范尚德(合)	1976	7
范咏戈	1976	1
范元和	1972	5
范元和	1975	9
范云兴(合)	1973	7
范咏戈	1974	1
范峥嵘	1975	5
樊守录(合)	1976	10
樊守禄	1976	6
fang		
方蝉	1975	1
方全林(合)	1974	10
方绪兰(合)	1974	1
方英(合)	1976	4
方元	1973	3
方耘	1973	5
房德文(合)	1973	6
fei		
飞雁	1972	10
斐忠(合)	1975	1
feng		
冯复加(合)	1973	3
冯复加(合)	1975	3
冯景元(合)	1976	5
冯远(合)	1973	11
冯远　绘	1975	2
fu		
傅加(合)	1972	7
傅继馥	1974	8
傅继馥	1975	12
傅晶　曲(合)	1975	2
傅琳(合)	1976	6
傅宁军(合)	1975	7
傅宁军(合)	1975	11
傅尚逵(合)	1973	6
傅子奎	1972	9
[G]		
gang		
钢卫东	1973	10

gao

高彬(合)	1975	10
高歌(合)	1972	7
高和林(合)	1973	10
高红	1972	12
高虹	1974	10
高虹(合)	1975	1
高虹	1976	1
高虹	1976	10
高家凌	1976	7
高建群	1976	8
高峻(合)	1974	4
高林生(合)	1972	11
高林生(合)	1973	8
高留安(合)	1975	3
高珊(合)	1976	4
高桐林(合)	1976	6
高小华	1972	7
高雪晨	1975	4
高远征	1975	3
高玉宝	1972	5
高子鲜	1975	1
高子鲜	1976	9

ge

葛孚光(合)	1975	9
葛激霆	1973	3
葛逊	1975	10
戈明	1972	5
戈明	1972	12
戈明	1973	12
戈文	1976	4

geng

庚兵	1974	11
耿俊奇(合)	1976	7
耿予方(合)	1972	10

gong

宫德琪	1975	10
宫魁斌(合)	1975	10
宫玺	1973	8
龚斌(合)	1974	3
龚贤明	1974	6
龚知敏	1975	12

gu

顾工	1973	4
顾工	1973	6
古元	1976	8
谷岳	1973	3

guan

管桦	1972	8
关满生	1972	12
关琦铭	1976	9
关山月	1974	1
关姚定(合)	1975	9
关郁生(合)	1976	7
冠英(合)	1974	7

guang

光涛(合)	1973	4
光涛(合)	1973	5
广印(合)	1972	11

Gui

桂其中	1976	7

guo

郭保寨	1975	8
郭德福	1972	11
郭德福	1974	8
郭戈	1973	1
郭戈(合)	1974	8
郭戈	1975	7
郭怀阳	1974	3
郭华兴(合)	1974	7
郭建英	1973	11
郭建英	1974	5
郭建英	1976	2
郭扣宝	1973	2
郭明效	1973	8
郭民新	1972	9
郭生玺	1972	8

郭守祥	1974	1
郭同文	1976	5
郭鲜利	1976	4
郭新民	1975	8
郭雪波	1975	1
郭越	1974	3
郭预衡	1975	10
郭忠田	1974	3
国光秀(合)	1972	10

[H]

hai

海声(合)	1975	4
海文(合)	1976	7
海啸(合)	1976	3
海鹰(合)	1972	8

han

韩宝章(合)	1975	12
韩宝章(合)	1976	3
韩建防	1974	8
韩京承(合)	1973	4
韩京承(合)	1976	1
韩瑞亭	1972	9
韩瑞亭	1973	3
韩瑞亭	1974	2
韩书力(合)	1973	8
韩忠智	1973	11
韩作荣	1972	7
韩作荣	1973	5
韩作荣	1974	11
韩作荣	1975	3

hao

浩歌(合)	1972	9
浩流(合)	1976	5
浩然	1973	2
浩然	1974	6
浩然	1974	11
浩然	1975	5
浩钟(合)	1973	3
郝伯义(合)	1974	9
郝修林(合)	1975	10
郝玉德(合)	1973	12

he

何成(合)	1976	9
何大愚	1975	5
何晋龄	1972	11
何孔德	1973	1
何孔德(合)	1975	1
何平	1975	11
何山美(合)	1976	9
何卫群	1976	9
何文	1972	5
何先润	1972	5
何晓鲁(合)	1973	4
何越曲(合)	1975	2
何正钦	1973	3
贺定龙(合)	1975	1
贺东久(合)	1973	9
贺茂芝	1972	7
贺茂芝	1975	2
贺玉森(合)	1975	12
贺玉森(合)	1976	3

hong

洪城	1974	4
洪城	1974	6
洪城	1974	11
洪城	1975	4
洪城	1975	12
洪城	1976	4
洪城	1976	8
洪天英	1972	8
洪雁	1972	9
洪雁	1972	12
洪雁	1974	1
洪扬(合)	1973	12
洪毅达(合)	1976	2
洪源 词(合)	1975	2
洪源(合)	1976	1
洪源(合)	1976	10

hou

侯阜晨(合)	1975	4
侯新民	1975	8
侯新民	1975	9
侯新民	1976	3
侯学志(合)	1976	4
侯钰鑫(合)	1974	10
侯真曦	1976	6

hu

胡邦明(合)	1975	9
胡邦明	1976	6
胡国良(合)	1975	5
胡宏伟	1974	2
胡笳	1973	1
胡笳	1975	1
胡笳	1975	10
胡名(合)	1976	5
胡奇	1976	1
胡石泉(合)	1974	10
胡世宗	1975	2
胡世宗	1975	7
胡松植(合)	1973	4
胡松植	1976	10
胡同德(合)	1976	4
胡修道	1972	11
胡远(合)	1975	9
胡振宇(合)	1975	12
胡志和(合)	1973	4
胡忠军(合)	1974	6
胡忠军	1975	9
胡忠军	1976	2
胡忠军	1976	6

hua

华林	1972	11
华衫	1974	9
华思理	1975	2

huang

黄大	1976	4
黄秉荣(合)	1973	7
黄传会	1976	8
黄代培(合)	1975	6
黄海汛(合)	1972	11
黄华榜(合)	1973	12
黄加琼	1975	6
黄加琼	1975	11
黄驾宇(合)	1976	6
黄芥田(合)	1975	6
黄京湘	1972	7
黄晋凯(合)	1974	11
黄今声(合)	1976	7
黄锦思	1975	12
黄觉萍(合)	1973	7
黄君相(合)	1975	3
黄浪华	1973	2
黄浪华	1974	5
黄浪华	1974	6
黄浪华	1975	7
黄浪华	1976	9
黄连城	1973	2
黄丕谟	1973	6
黄三才	1972	12
黄生信(合)	1974	6
黄式宪	1976	6
黄帅	1974	4
黄树德(合)	1974	7
黄廷杰	1976	3
黄文霞(合)	1974	5
黄绪铭(合)	1973	3
黄绪铭	1975	11
黄婴	1973	1
黄婴	1973	9
黄英浩(合)	1974	6
黄宜中	1973	9
黄知义	1973	10
黄宗信(合)	1976	5

huo

霍薄陵(合)	1975	11
霍清安	1973	10
霍清安(合)	1976	2

[J]

ji

嵇亦工	1975	11
吉正厚	1975	2
季道奎(合)	1975	10
季阳林	1974	5
季作	1974	12
冀晓秋(合)	1972	7
戟文(合)	1976	4
纪鹏	1972	8
纪鹏	1973	2
纪鹏	1975	4
纪鹏	1976	6
纪学	1972	9
纪学(合)	1975	4
纪学	1975	10
继锋(合)	1974	3
籍华(合)	1975	8
jia		
嘉和强(合)	1975	5
jiang		
江凫生(合)	1972	11
江凫生(合)	1973	10
江凫生(合)	1973	11
江溶	1976	4
江宛柳	1973	11
江卫阳	1975	8
江耀辉	1975	11
姜金城	1975	12
姜世栋(合)	1974	5
姜卫东(合)	1976	5
姜文	1974	1
姜秀珍(合)	1975	2
姜学亮	1973	3
蒋荫安	1973	8
蒋宜勋(合)	1975	8
jiao		
焦成明	1975	11
焦村方(合)	1975	8
jie	1976	9
碣石(合)		
jin		
金德栩(合)	1975	9
金革(合)	1975	9
金江	1976	5
金克智(合)	1972	12
金山	1974	10
金伟展	1974	4
金旭升	1973	1
金牛木呷(合)	1973	7
靳南文	1973	7
靳永	1974	9
井维春	1974	5
陈元靖执笔	1972	9
集:高松平	1973	11
集:桂其中执笔	1973	
集:史超执笔	1974	9
集:吴敏执笔	1975	6
集:邓乃荣执笔	1976	8
集:孙吴执笔	1976	9
集:张一壮执笔	1976	6
集:王愿坚	1974	12
集:陆柱国执笔	1974	12
ju		
鞠明生	1973	10
鞠宇东	1972	5
聚之(合)	1972	6
聚之	1973	11
具体创作	1972	8
jun		
峻渠	1974	1
[K]		
kang		
亢佐田	1972	10
ke		
柯冰	1975	8
柯毅(合)	1974	5

柯原	1974	2
克敏(合)	1974	4
可义	1974	1
kong		
孔庆岚(合)	1974	10
孔祥大(合)	1975	2
孔祥生	1974	9
kuang		
匡满	1973	5
匡满(合)	1975	4
[L]		
lai		
赖传珠	1976	1
赖毅	1976	1
赖应棠	1973	3
赖应棠	1976	7
lan		
兰承晖	1973	12
蓝曼	1972	9
lang		
郎保东	1974	5
郎保东	1974	8
lei		
雷楚汉	1972	12
雷锋	1973	3
雷火	1975	8
雷克(合)	1974	7
雷抒雁	1972	12
雷抒雁	1973	2
雷抒雁	1973	6
雷抒雁(合)	1973	7
雷抒雁	1973	12
雷抒雁	1974	3
雷抒雁	1975	1
雷抒雁	1976	1
雷抒雁	1976	10
雷小兵	1973	4
雷小兵(合)	1975	7
雷锋班	1976	10
li		
李宝林(合)	1974	7
李宝生	1973	9
李本深	1974	8
李本深	1975	3
李本深	1975	5
李本深(合)	1975	11
李本深	1976	3
李兵	1976	5
李秉刚(李幼容配诗)	1975	1
李昌富	1974	1
李春清(合)	1976	5
李存葆	1972	8
李存葆	1974	12
李存葆(合)	1975	9
李大我	1976	9
李德	1972	11
李德昌	1972	9
李德君(合)	1972	10
李凤兰(合)	1974	4
李凤琪	1973	11
李芬荣(合)	1976	3
李复楼	1973	12
李复楼	1975	9
李富生(合)	1975	11
李海齐(合)	1973	9
李恒茂	1972	8
李虹	1973	8
李虹	1976	4
李洪程	1973	3
李洪义	1972	9
李洪义	1972	11
李虎	1973	8
李焕民	1974	12
李惠	1973	11
李继(合)	1973	12
李健葆(合)	1976	7
李建华	1975	5
李锦	1976	10

李劲	1975	5
李镜	1976	5
李景荣(合)	1973	12
李今蒲	1974	11
李今蒲(合)	1975	11
李久香(合)	1976	7
李钧(合)	1972	7
李克白	1975	11
李坤(合)	1974	4
李蓝丁	1976	10
李老根(合)	1975	10
李力	1973	2
李里	1973	2
李立民(合)	1975	9
李明正(合)	1976	1
李乃高(合)	1974	11
李乃高(合)	1976	5
李浦彬(合)	1973	9
李谦(合)	1976	3
李钦(合)	1972	7
李青峰	1976	4
李秋	1975	10
李荣德	1974	3
李荣华	1972	9
李瑞明(合)	1976	6
黎时	1973	7
李守明(合)	1972	9
李铁民(合)	1975	2
李万启	1973	4
李巍(合)	1974	10
李卫华(合)	1975	8
李武兵(合)	1974	5
李武兵(合)	1975	11
李武清(合)	1976	6
李先元(合)	1975	5
李晓伟	1975	11
李小雨	1975	6
李希凡	1972	5
李希凡	1973	11
李锡赓	1972	11
李锡赓	1973	6
李锡赓	1973	10
李锡赓	1974	7
李新	1972	7
李欣(合)	1975	11
李心田	1973	10
李延国(合)	1972	12
李彦清	1976	6
李偃清(合)	1976	10
李延生(合)	1973	12
李义	1975	5
李奕明	1972	11
李瑛	1972	6
李瑛	1972	11
李瑛	1973	11
李瑛	1974	8
李瑛	1976	2
李以泰	1975	7
李幼容	1973	3
李雨	1973	1
李元洛	1976	1
李玉春(合)	1975	9
李越(合)	1973	1
李再新	1972	10
李占恒	1972	9
李占恒	1973	1
李占恒	1975	5
李占恒	1976	1
李智发	1974	7
李志君	1972	10
李志君	1976	6
李志鹏	1975	8
李忠效	1975	9
李忠效	1975	10
李忠效	1975	6
李自强(合)	1973	1
栗凰(合)	1973	9
liang		
梁秉祥(合)	1975	8
梁冬(合)	1973	9
梁厚民(合)	1974	6
梁明诚(合)	1973	6
梁上泉	1973	6

梁爽(合)	1976	9
梁通歌(合)	1976	3
梁信	1973	1
梁信(合)	1973	12
liao		
廖代谦	1972	7
廖代谦	1975	3
廖代谦(合)	1975	6
廖西岚	1975	6
廖宗怡(合)	1972	11
廖宗怡(合)	1973	8
廖卓勋(合)	1973	11
lin		
林★	1976	4
林安康(合)	1976	1
林道元(合)	1973	9
林芬(合)	1975	2
林杭生	1972	7
林锦富(合)	1972	9
林琳	1974	7
林山	1972	10
林仕潘	1973	10
林雅(合)	1972	10
林燕画(合)	1976	4
林墉	1974	11
林元	1975	4
林玉坤(合)	1976	1
ling		
凌而思	1973	3
凌玲(合)	1972	6
凌玲(合)	1973	8
凌行正	1972	11
凌行正	1973	9
凌行正(合)	1974	4
凌行正(合)	1975	8
liu		
刘宝春	1972	12
刘抱峰(合)	1973	5
刘宝玲	1973	9
刘宝玲(合)	1975	7
刘保元(合)	1972	10
刘柏荣	1974	2
刘柏荣(合)	1974	7
刘柏荣(合)	1974	8
刘柏荣(合)	1976	6
刘成浩	1973	1
刘从礼(合)	1972	7
刘代文	1975	11
刘福林(合)	1975	9
刘甫迎(合)	1975	2
刘革文(合)	1975	8
刘革文(合)	1976	3
刘革文(合)	1976	9
刘广义(合)	1976	3
刘红曦(合)	1975	6
刘红宇(合)	1975	8
刘怀云(合)	1973	9
刘惠雅	1975	7
刘骥(合)	1972	12
刘角	1976	8
刘晶林	1975	6
刘竟生(合)	1972	7
刘金堂	1973	5
刘开强(合)	1972	9
刘琳	1975	10
刘琳	1976	6
刘佩军(合)	1976	10
刘培森	1973	2
刘柏荣	1973	1
刘秋群(合)	1975	9
刘仁松(合)	1975	11
刘瑞莲(合)	1974	11
刘三多(合)	1974	11
刘山民(合)	1973	10
刘山民	1974	3
刘少征	1974	3
刘少征	1974	9
刘司昌(合)	1974	6
刘伟民(合)	1974	4
刘伟新(合)	1973	6
刘伍　等	1972	10
刘伍	1975	3

刘晓滨	1975	6
刘晓莉	1974	2
刘兴民(合)	1975	1
刘新智	1976	5
刘学智	1976	9
刘耀华	1975	6
刘要武(合)	1975	11
刘英连	1975	10
刘瑜(合)	1975	10
刘跃(合)	1972	7
刘越(合)	1976	1
刘增新	1975	4
刘战(合)	1972	12
刘兆林	1972	6
刘兆林	1973	8
刘兆林	1975	2
刘兆林(合)	1976	9
刘振华	1972	9
刘振华	1974	2
刘祯祥	1972	10
刘祯祥(合)	1973	6
刘祯祥(合)	1973	10
刘祯祥(合)	1973	11
刘祯祥(合)	1974	3
刘祯祥(合)	1975	11
刘志德(合)	1974	4
刘志毅	1975	10
刘忠信	1976	3
刘仲瑶	1973	12
刘子才	1976	4
刘作杨(合)	1972	12
柳炳仁	1973	1
柳炳仁	1973	9
柳炳仁	1975	3
柳朗(合)	1975	8
柳清波(合)	1973	1
柳清波(合)	1973	8
long		
龙宏山	1972	6
龙宏山	1973	10
龙迹	1973	4
龙迹	1974	1
lou		
娄齐贵(合)	1976	1
lu		
陆兵	1972	8
陆炳元(合)	1974	6
陆登标	1976	6
卢德林(合)	1974	3
卢广军(合)	1975	10
卢伟	1972	9
路俊(合)	1975	7
路毅	1976	7
路远	1973	5
路璋(合)	1973	12
芦克键	1974	1
芦培军	1973	8
芦泽华	1975	4
芦振国	1972	8
陆岭	1973	5
陆茂昌	1972	11
陆岩	1972	5
陆岩	1972	6
陆岩	1973	9
陆岩石(合)	1975	7
陆原 词(合)	1975	2
陆中	1972	10
陆中(合)	1972	12
陆忠德(合)	1975	4
陆柱国(合)	1976	4
鲁南(合)	1973	9
鲁迅	1972	7
鲁迅	1972	9
鲁迅	1972	11
鲁迅	1973	10
鲁岩(合)	1972	12
鲁兆荣	1974	12
露滋	1974	1
luo		
罗庚华	1975	10

罗惠	1973	7
罗教煌	1974	3
罗良兴(合)	1973	4
罗秋(合)	1973	12
罗石贤	1973	10
罗云水	1976	4
罗运凯	1974	1
罗玉生(合)	1972	5
罗子军	1973	2

lü

吕永岩	1975	4
吕振宇(合)	1972	12

[M]

ma

马成广(合)	1972	10
马贵民	1972	7
马贵民(合)	1976	9
马国顺(合)	1973	8
马浩流(合)	1974	9
马恒祥	1975	10
马怀金(合)	1972	5
马建亚	1974	6
马连义	1976	5
马联玉	1973	7
马林帆	1975	10
马林帆	1976	7
马思泰(合)	1975	2
马威	1974	10
马绪英(合)	1973	4
马绪英	1975	11
马毅生(合)	1973	12
马增慧(合)	1974	7
马钟骥	1975	2
马钟骥改编	1974	8
马焯荣	1973	9

mao

毛高翔(合)	1975	9
毛英	1972	11
毛英	1973	8
毛英	1976	3
毛泽东	1973	11
毛泽东	1976	1
毛泽东	1976	1
毛志成(合)	1975	7
毛泽东	1975	11

mei

梅新生(合)	1975	3
梅新生	1976	10

meng

孟凡军(合)	1975	9
孟国强(合)	1975	9
猛军	1975	9
孟庆成(合)	1974	5
孟伟哉	1976	8
蒙显刚	1974	2
蒙显刚	1974	10
孟昭恺	1972	10

mi

糜佳乐	1975	9

miao

苗爱雨	1974	11
苗长水	1975	10
苗得雨	1975	10

ming

铭新(合)	1974	3

mo

莫少云	1973	6
莫少云	1973	11
莫少云(合)	1974	2
莫亚玎配诗(合)	1976	4

mu

穆静	1973	6
穆静(合)	1974	3
穆静(合)	1974	6
穆静	1975	3
穆静	1975	6

穆静	1976	1
穆静	1976	3
穆泉飞(合)	1972	11

[N]

nan

南山跃	1973	7
南哨	1972	6
南哨	1972	7
南哨	1974	5
南哨(合)	1974	9

ni

倪梅林(合)	1973	4

nian

念祖(合)	1972	11

nie

聂敬华(合)	1973	6
聂敬华(合)	1975	11
聂立珂	1976	5
聂世捷	1976	6

ning

宁涛	1974	12
宁宇	1974	12

niu

牛广进	1973	8
牛广进(合)	1976	7
牛乾一	1974	4
牛小玲(合)	1976	9

[O]

ou

区桂凉(合)	1976	5
区焕章	1973	1
欧仁・鲍狄埃词	1976	10
欧仁・鲍狄埃词	1974	5
比尔・狄盖特曲		
比尔・狄盖特曲		

[P]

pan

潘灯(合)	1976	2
潘嘉峻	1974	5
潘嘉峻	1976	3

pang

庞明光(合)	1972	10
庞明光(合)	1974	2

peng

彭彬(合)	1975	1
蓬勃(合)	1972	9
彭龄	1975	10
彭龄(合)	1976	3
彭乃川(合)	1974	6
彭子强	1972	8

pi

皮开世	1972	10

pin

品伦	1976	4

pu

普飞	1975	4

[Q]

qi

漆春生	1972	7
齐和	1972	5
齐平	1973	9
齐山	1976	9
齐章锁(合)	1976	3
齐壮	1975	3
祁荣祥	1972	8
祁荣祥	1973	3
祁荣祥	1975	12
启河(合)	1976	6
戚积广	1973	4

qian

钱钢	1974	9
钱钢(合)	1975	4
钱来忠	1974	12
钱松大	1973	4
钱巍(合)	1976	8
钱学祥	1973	1
钱学祥	1974	1
钱治安	1975	11
前涉	1973	10
前涉	1974	4

qiao

乔保华(合)	1975	6
乔梁(合)	1975	4
乔良	1975	6
乔良	1975	10
乔林和	1975	4

qin

秦恒骥(合)	1974	10
秦文美	1973	7
秦文美	1973	10
秦文美	1975	2
秦杏林	1974	12
秦钟(合)	1974	4
擎红	1974	5
擎红	1973	2

qiu

邱长发(合)	1973	5
邱福兴	1973	11
邱霍泉	1973	4
邱继臣(合)	1976	9
仇志海	1976	8

qu

瞿琮	1973	4
瞿琮	1974	3
瞿琮(合)	1976	7
屈虹	1975	7
屈虹	1976	3
屈家礼	1975	11
瞿俊杰(合)	1976	1
瞿水	1976	5
瞿水	1973	5
瞿水(合)	1974	3
瞿永华(合)	1974	6
曲有源	1974	3
曲有源	1976	1
曲有源(合)	1976	3
曲直(合)	1974	4

quan

泉声	1973	1
泉声	1973	5
泉声	1973	12
全太安	1974	4

qun

群兵	1976	8

[R]

rao

饶江波	1972	9
饶价巴桑	1972	12

ren

任斌武	1972	7
任斌武(合)	1972	8
任斌武	1972	11
任斌武(合)	1973	4
任斌武	1974	10
任歌清(合)	1975	9
任贵生(合)	1973	12
任海鹰	1974	3
任宏峰	1976	2
任红举	1973	10
任红举	1976	1
任良才(合)	1976	4
任萍(合)	1974	4
任尚永	1975	5
任耀庭(合)	1975	9
《人民日报》短评	1972	5
《人民日报》《红旗》《解放军报》	1972	6

社论		
《人民日报》《红旗》《解放军报》编辑部	1976	6
《人民日报》记者	1976	9
《人民日报》记者	1976	9
ruan		
阮生江	1974	8
阮沾	1972	10
阮沾	1973	6
[S]		
sang		
桑原	1976	7
shan		
单钦慕	1975	8
单士航(合)	1974	10
单应桂	1974	6
shang		
尚丁	1974	12
尚丁	1975	5
尚华(合)	1973	10
尚沪生(合)	1973	8
商锡峰(合)	1974	4
shao		
邵长波	1976	9
邵增虎	1972	6
邵增虎(合)	1974	3
佘树森	1972	11
佘树森	1973	6
佘树森	1974	5
shen		
申枫	1973	3
申枫(合)	1975	2
申增旺(合)	1976	9
申建军	1975	11
沈福庆	1972	6
沈福庆	1973	5
沈福庆	1974	1
沈功(合)	1974	3
沈加蔚	1975	3
沈巧耕(合)	1975	8
沈顺根	1973	4
沈顺根	1973	10
沈彤兵(合)	1972	6
沈文枫(合)	1976	8
沈燕(合)	1972	12
沈英文(合)	1972	7
沈永宝(合)	1973	4
沈阳部队供稿	1973	3
sheng		
声烈	1974	2
胜荣	1972	11
shi		
石兵	1976	5
石兵	1976	6
石峰	1972	11
石国仕(合)	1974	4
石国仕	1976	7
石海(合)	1972	7
石海	1975	10
石合吉	1974	3
石金声(合)	1975	1
石群(合)	1973	7
石顺义	1973	11
石顺义(合)	1975	1
石顺义	1975	11
石顺义(合)	1976	6
石驷(合)	1972	10
石湾	1974	10
石湾(合)	1975	5
史武	1972	11
石翔军	1972	6
石学海(合)	1972	5
石一歌	1972	12
石宇声(合)	1974	7
施大畏	1974	11

施达宗	1976	1
施门松(合)	1975	9
时家翎	1972	12
施绍辰	1976	2
施士久	1972	11
史阳	1976	6
时永福(合)	1973	2
时永福(合)	1974	12
时永福(合)	1976	1
时永福(合)	1976	5
师钟(合)	1974	7
shu		
树德(合)	1972	9
树根	1976	1
树根	1976	3
舒鼎云	1975	3
舒林(合)	1975	7
舒平(合)	1975	9
舒展	1973	4
舒展(合)	1974	12
舒展(合)	1976	4
蜀群	1974	9
抒雁	1974	4
术元	1975	5
si		
思忖	1972	7
思忖	1974	11
思忖(合)	1975	2
思忖	1976	2
思凌辉	1976	1
思实(合)	1972	7
思义(合)	1972	6
思义(合)	1973	8
司兰星	1974	7
司轩(合)	1972	6
song		
宋百和(合)	1976	5
宋戈	1974	6
宋戈	1975	3
宋贵生	1974	4
宋国勋(合)	1975	1
宋立民(合)	1975	5
宋绍明(合)	1972	5
宋绍明	1975	11
宋文华	1976	6
宋小勇(合)	1975	8
宋协龙(合)	1975	9
宋辛(合)	1975	3
宋新英(合)	1974	10
宋振国	1973	5
su		
苏丙华	1974	1
苏淮	1973	4
苏文(合)	1975	7
苏文勋	1976	10
苏习	1973	10
苏习	1974	2
苏友	1975	11
苏祖谦	1972	12
sui		
隋启仁	1974	10
隋自更	1976	1
sun		
孙常文	1973	6
孙成武	1975	4
孙成武	1976	8
孙重九	1973	1
孙福盛	1973	1
孙福胜	1974	6
孙桂春(合)	1976	8
孙国岐(合)	1975	4
孙洪泉	1975	8
孙建忠	1975	12
孙景瑞	1976	8
孙克强	1975	4
孙米盛(合)	1976	1
孙瑞卿(合)	1973	4
孙淑敏(合)	1975	3
孙吴	1972	8
孙吴(合)	1973	4

孙向阳(呢)	1975	8
孙湛(合)	1975	8
孙治珊(合)	1976	7
[T]		
tan		
谭尚维	1975	11
tang		
唐道满(合)	1972	8
唐大禧	1974	3
唐俊	1976	3
唐惟藻(合)	1976	9
唐泽玉	1975	11
汤集祥(合)	1973	11
汤素兰(合)	1974	5
汤小铭	1972	9
汤小铭(合)	1974	5
汤旭(合)	1974	10
tao		
陶彩燕	1975	2
陶彩燕	1975	6
陶建军	1975	8
陶建军	1976	10
陶嘉善	1972	11
陶嘉善	1973	12
陶凯	1972	7
陶连平(合)	1975	9
陶泰忠	1974	2
陶泰忠	1974	4
陶泰忠	1975	1
陶泰忠	1975	5
陶泰忠	1976	4
tian		
田军执笔	1976	4
田成仁	1972	11
田成仁(合)	1973	5
田成任	1974	3
田成任	1974	7
田成任	1974	10
田成任	1975	9
田光 曲(合)	1975	2
田国浩	1975	11
田国良(合)	1975	2
田国良(合)	1975	4
田国良(合)	1975	11
田国良(合)	1976	3
田克盛	1975	3
田书翰	1976	2
田义	1973	9
田永昌(合)	1975	8
田永昌(合)	1976	3
田玉生(合)	1974	6
天安门前警卫连	1976	10
tie		
铁军	1972	8
铁志(合)	1973	8
铁道兵某部业余创作组整理	1973	12
铁道兵某部业余宣传队	1974	2
tong		
童嘉通	1973	6
童琼(合)	1973	1
童信文(合)	1976	4
tuo		
托含提・库尔班(合)	1976	7
[W]		
wang		
万平(合)	1972	6
万云尊	1975	5
王丫音(合)	1974	6
王安洲(合)	1973	9
王必福(合)	1975	7
王秉伦	1972	6
王春茹	1974	3
王丛	1975	12

王德本	1973	8	王佩大	1973	10
王德深(合)	1976	4	王佩大	1974	3
王德祥(合)	1974	12	王佩大	1975	2
王德英	1972	10	王润滋(合)	1976	7
王定康	1975	6	王尚贤(合)	1972	9
王东旭	1973	10	王尚贤	1976	2
王恩献(合)	1972	9	王世阁	1973	5
王发(合)	1972	12	王世阁	1973	7
王芳清(合)	1973	12	王世阁	1976	2
王凤海(合)	1976	5	王世阁	1976	7
王凤举(合)	1975	4	王石祥	1972	5
王凤胜(合)	1975	6	王石祥	1972	9
王福祥(合)	1976	9	王石祥	1973	3
王戈洪	1974	2	王石祥	1973	7
王根生(合)	1975	5	王石祥(合)	1975	7
王贵章	1972	12	王石祥	1976	7
王国富(合)	1972	6	王绶青	1973	3
王国庆(合)	1976	5	王守新(合)	1976	9
王洪波	1975	3	王受远	1976	3
王化文	1974	2	王澍	1973	1
王晖(合)	1975	7	王树和(合)	1973	6
王辉荃(合)	1976	8	王树和	1973	10
王沪鹰(合)	1973	12	王树和	1974	2
王建国(合)	1974	5	王树和	1974	12
王金宝(合)	1976	6	王树和	1975	5
王金宝	1972	11	王树和(合)	1976	9
王荆岩(合)	1976	5	王蜀凉(合)	1973	5
汪泾洋	1974	8	王树增	1974	6
王金年	1975	12	王树增	1975	5
王金石(合)	1976	4	王作山(合)	1976	9
王金旭	1976	9	王天胜(合)	1975	10
王决(合)	1974	7	王廷光(合)	1974	9
王俊石(合)	1975	2	王彤华	1972	12
王垦(合)	1975	8	王为	1973	11
王腊珍	1972	10	王为	1974	7
王笠耕	1974	12	王维章(合)	1972	10
王龙飞(合)	1972	7	王文宾	1973	5
王录(合)	1974	10	王文福	1975	11
王路	1974	12	王文华	1972	11
王满夷	1973	2	王向峰	1973	5
王满夷(合)	1975	4	王晓岭	1975	10
王孟湘	1976	2	王新滨(合)	1973	11
王佩大(合)	1973	4	王兴东	1975	2

王秀国	1972	11
王锡维(合)	1975	6
王耀成(合)	1972	6
王耀成(合)	1974	5
王耀成(合)	1975	7
王也	1973	6
王也(合)	1973	8
王颖(合)	1972	8
王颖	1972	12
王颖	1973	5
王颖	1974	12
王颖	1975	6
王颖(合)	1975	9
王颖	1976	9
王迎春(合)	1974	2
王永瑞(合)	1974	2
王永石(合)	1973	9
王愿坚(合)	1976	4
王愿坚(合)	1976	10
王苑文(合)	1973	8
王玉成(合)	1976	2
王岳军	1973	2
王征(合)	1974	5
王征(合)	1975	2
王征骅(合)	1973	5
王振甲(合)	1972	11
王哲忠 文	1975	2
王忠	1973	1
王中才(合)	1972	6
王中才	1973	2
王中才	1973	11
王中才	1976	5
王宗仁	1972	7
王宗仁	1973	5
王宗仁	1976	6
王遵义(合)	1975	2
王亚美(合)	1973	4
汪洋	1974	11
汪浙成	1973	3
汪浙成	1973	6
汪浙成	1974	10

wei

魏传统	1975	11
魏洪亮	1975	12
魏景山(合)	1973	9
魏梓慧(合)	1973	5
维耕(合)	1976	6
尉立青	1972	11
尉立青(合)	1974	5
尉立青(合)	1975	11
韦丘	1973	8
韦炜	1973	7
韦扬闻	1974	3

wen

温崇圣(合)	1972	12
温廷金	1974	3
温小钰	1975	2
闻华	1973	5
闻哨	1974	4
闻哨	1975	3
闻哨	1976	3
闻涉（合）	1975	1
闻耀(合)	1976	5
文斗	1972	9
文鹏(合)	1975	4
文誓安	1975	10
文秀清	1973	8
文秀清	1974	8
文哲安(合)	1976	4

weng

翁睦瑞	1976	7

wu

邬帮生(合)	1973	8
邬士英(合)	1975	11
武昌灿	1976	7
武湖	1972	8
武澜(合)	1976	5
武凌轩	1973	2
武鸣	1976	7
武缨(合)	1976	2

武子海	1974	2
武子海(合)	1976	3
吴刚(合)	1975	5
吴华夺	1975	8
吴欢章	1974	7
吴建国(合)	1974	7
吴金杰	1973	9
吴敏	1972	10
吴升彪(合)	1975	2
吴士余	1976	7
吴双艺(合)	1976	8
吴书国(合)	1975	9
吴树扬(合)	1974	5
吴铁(合)	1976	1
吴先恩	1975	11
吴显林	1976	8
吴辛	1976	5
吴燕生	1975	11
吴永祚	1972	9
吴玉琛(合)	1972	7
吴战垒	1973	2
吴战垒	1976	7
伍青子	1973	6
伍任权(合)	1974	11
伍文雷	1976	4
伍星辉	1972	7
伍元新	1974	10
伍元新	1976	2

[X]

xi

习今(合)	1975	10

xia

夏湘平(合)	1975	7
夏宗民	1975	12

xian

先子良	1975	1

xiang

向明	1973	8
向明	1973	12
向明	1975	1
向明(合)	1975	9
向阳(合)	1972	8
相起久	1974	1

xiao

晓波(合)	1975	6
晓波(合)	1975	10
晓东(合)	1975	7
晓峰	1972	5
晓曙	1973	10
肖丹	1972	11
肖华	1975	12
肖继民(合)	1973	9
肖流	1973	7
肖锁(合)	1976	8
肖小学(合)	1975	9
肖映川	1972	5
肖应棠	1975	11
肖征波	1976	2
肖正义	1976	6

xie

谢方祠	1975	11
谢光照(合)	1973	10
谢克强	1974	8
谢冕	1973	8
谢清泉(合)	1976	3
谢耀庭(合)	1975	7
谢又芳	1975	1
谢玉久	1975	10
谢玉久	1976	8
谢志高(合)	1975	12
解胜文	1972	5
解胜文	1973	9
解胜文	1973	12

xin

辛冰	1976	5
辛继才(合)	1974	8
辛汝忠	1974	9
辛文彤	1973	9
辛文彤	1975	8

新培(合)	1974	4
欣声	1973	4
xing		
邢开山(合)	1975	7
邢庆刚(合)	1973	9
邢庆刚(合)	1974	1
邢汝铁(合)	1974	1
邢述安	1972	10
邢书第	1972	7
邢万生(合)	1975	8
邢晓滨	1975	6
xiong		
熊林林	1975	6
xi		
旭程	1975	10
xu		
徐淙泉(合)	1972	5
徐淙泉(合)	1972	12
徐淙泉	1973	1
徐恩志(合)	1973	10
徐刚	1973	12
徐广顺	1976	5
徐国华(合)	1973	12
徐国峻画(合)	1976	4
徐海东	1975	11
徐海生(合)	1973	5
徐建勋(合)	1976	2
徐匡	1974	12
徐明德	1975	6
徐然(合)	1973	1
徐慎	1973	12
徐升隆	1973	1
徐升隆	1973	2
徐太国(合)	1972	11
徐太国(合)	1973	10
徐太国	1975	7
徐挺	1974	3
徐希(合)	1973	6
徐希(合)	1973	10
徐希(合)	1974	3
徐学旺(合)	1973	12
徐英杰(合)	1975	6
徐咏龄	1972	11
徐元明	1973	9
徐聿生(合)	1974	11
徐聿生(合)	1976	5
徐志达(合)	1975	5
许天雄	1973	2
许德清(合)	1976	10
许东晖(合)	1976	7
许荣初(合)	1975	7
许润泉(合)	1975	6
许新学	1972	10
许雁	1975	1
许佑柱(合)	1972	9
许真理	1973	8
xue		
薛闯	1974	4
薛戈(合)	1974	7
薛家彤(合)	1972	11
薛敏(合)	1975	7
薛其晴(合)	1975	1
薛锡祥	1975	10
学存(合)	1974	9
雪溪	1973	11
[Y]		
yan		
阎伯谦(合)	1975	3
阎长林	1976	10
阎世宏	1975	11
阎树鹏	1972	9
阎一强	1973	2
阎振铎	1974	1
阎作义	1973	6
延松	1975	10
严肃	1973	1
严肃	1974	8
严友人(合)	1975	5

严月明(合)	1972	8
严振祥	1974	11
严振祥	1975	8
严治中	1973	2
言午	1974	7
言午	1975	3

yang

杨成武	1975	12
杨春生(合)	1975	9
杨村	1972	6
杨德林(合)	1973	11
杨德祥(合)	1972	5
杨得志	1975	11
杨法增(合)	1973	2
杨福林(合)	1976	5
杨广军(合)	1973	5
杨国丈	1976	4
杨海燕	1973	6
杨红莉(合)	1976	1
杨建军(合)	1972	12
杨津臣(合)	1972	12
杨景亮(合)	1976	4
杨金书	1975	9
杨力舟(合)	1974	2
杨满林	1974	12
杨孟华	1973	3
杨南荣(合)	1975	1
杨清广	1972	6
杨尚奎	1975	12
杨胜荣	1973	10
杨万青	1976	7
杨闻宇	1975	2
杨闻宇	1975	11
杨闻宇(合)	1976	8
杨先义	1974	4
杨小敏	1974	2
杨小敏(合)	1974	5
杨小敏(合)	1975	11
杨星火	1972	8
杨星火(合)	1972	12
杨星火	1973	8
杨星火(合)	1973	12
杨星火	1975	4
杨星火(合)	1975	8
杨秀岭	1974	1
杨学泉	1973	9
杨学泉(合)	1974	12
杨学泉	1975	6
杨学儒(合)	1973	5
杨以山	1975	11
杨玉辰(合)	1973	9
杨玉尧	1975	10
杨再溪	1973	4
杨泽明(合)	1973	12
杨肇林	1976	7
杨志杰(合)	1975	10
杨钟	1972	12

yao

姚尔畅(合)	1975	4
姚灵石(合)	1972	6
姚明(合)	1975	11
尧山壁	1973	11
尧山璧	1975	12
姚兴塘	1975	8
姚于惠	1972	8
姚振起	1973	10

ye

叶昌柱	1974	10
叶海京	1972	6
叶茂康	1974	10
叶鹏(合)	1976	6
叶巧嫣	1972	6
叶蔚林	1974	7
叶文福	1972	5
叶文福	1973	4
叶文福	1975	3
叶晓山	1975	11
叶欣	1974	11
叶延滨	1975	7
叶雨(合)	1972	6
叶运均(合)	1974	8

yi

一兵(合)	1974	3
以民(合)	1973	3
易天宝(合)	1976	10
易先权(合)	1975	9
易中天	1976	9
yin		
殷培华	1972	9
殷培华(合)	1975	2
殷培华	1975	7
尹瘦石	1975	9
尹岩(合)	1976	2
尹在勤	1975	8
尹在勤	1976	5
ying		
英戈	1976	8
英杰	1974	3
迎捷(合)	1975	6
yong		
永昌	1973	11
咏戈	1973	2
咏戈	1974	4
勇征	1972	6
勇征	1973	4
勇征(合)	1973	6
勇征	1973	8
you		
友恒(合)	1974	2
幼容　词(合)	1975	2
yu		
于岸枫	1973	10
于保勋	1974	2
于惠(合)	1973	4
于惠(合)	1973	5
于克敏	1975	8
于力	1975	1
于力	1976	1
于连仲	1976	9
于清廉	1974	11
于书恒(合)	1976	2
于万海(合)	1975	5
于永德(合)	1975	5
于志强	1973	12
喻晓	1973	6
喻晓(合)	1975	6
余学田	1975	4
余时	1973	2
余传民	1972	8
余方德	1974	1
虞文琴	1976	4
虞善国(合)	1973	4
郁惹	1974	12
郁葱	1974	6
郁葱(合)	1975	7
郁葱	1975	10
俞家全(合)	1975	2
宇晓(合)	1973	10
yuan		
袁浩	1973	2
袁厚春(合)	1972	5
袁厚春	1972	10
袁厚春(合)	1973	9
袁厚春	1974	7
袁厚春(合)	1974	12
袁世福	1972	9
袁世福	1976	6
袁学道(合)	1975	4
袁耀锷(合)	1975	7
袁鹰	1976	1
元辉	1973	6
元辉	1974	2
元辉	1974	5
元辉	1976	5
元辉	1975	4
yue		
岳恒寿	1974	8
岳学军	1972	12

[Z]

zhan

詹建勇(合)	1975	11

zhang

张雅歌	1973	10
张爱萍	1975	12
张安平(合)	1973	6
张必安(合)	1975	11
张兵(合)	1972	9
张步真	1975	7
张步真	1976	1
张长	1973	4
张长凯(合)	1975	7
张诚(合)	1975	1
张澄寰	1972	8
张澄寰	1973	7
张崇发	1976	3
张传桂	1973	11
张春溪(合)	1976	1
张春霞	1973	11
张丹秋(合)	1974	5
张道兴(合)	1973	10
张道兴(合)	1974	2
张德民(合)	1975	6
张登魁	1972	5
张登魁	1972	7
张登魁	1972	8
张登魁	1973	4
张登魁	1973	7
张登魁	1975	10
张德武	1973	6
张德雄(合)	1974	4
张定华(合)	1976	8
张发良	1974	4
张发良	1975	9
张凤朝(合)	1972	12
张凤朝(合)	1974	2
张凤雏	1976	3
张光本(合)	1973	7
张广金	1976	4
张广金	1976	8
张广平	1976	5
张光喜(合)	1973	5
张国政(合)	1972	7
张宏时(合)	1975	9
张洪舜	1972	7
张红雨	1973	3
张红雨(合)	1975	3
张洪赞(合)	1975	4
张家祥(合)	1976	8
张继芳	1973	6
张继芳(合)	1974	6
张晋	1975	6
张金栋	1973	6
张京生	1972	11
张金华(合)	1973	4
张金康(合)	1975	2
张巨民	1975	10
张骏(合)	1975	8
张俊南	1973	9
张俊南	1974	5
张俊南	1975	4
张开德(合)	1973	12
张昆华	1972	10
张廓	1973	3
张廓	1973	4
张廓	1973	12
张廓	1975	7
张廓	1975	12
张雷克(合)	1975	8
张立公(合)	1972	12
张力生	1972	5
张力生	1972	12
张力生	1973	7
张力生	1974	3
张力生	1975	4
章明(合)	1974	9
张明道	1972	12
张民清	1972	12
张民清	1973	3
张南生	1975	11
张蓬云(合)	1974	1
张平	1975	11
张朴夫	1973	10
张朴夫	1975	12

张朴夫(合)	1976	1
张岐	1973	9
张强(合)	1973	2
张勤	1973	3
张勤	1974	2
张勤	1976	8
张渠(合)	1975	5
张全明	1976	5
张仁芝(合)	1973	12
张汝为	1973	10
张胜甲	1973	3
张世凯	1975	9
张士夔(合)	1973	8
张烁(合)	1976	1
张树钦	1975	1
张颂南	1976	7
张嵩山	1975	11
张苏(合)	1975	10
张天民执笔	1975	10
张同森	1973	6
张卫红	1975	9
张文新(合)	1976	7
张文玉(合)	1976	9
张雾勋	1972	6
张雾勋	1973	1
张宪正	1974	8
张晓林(合)	1974	4
张信(合)	1973	12
张新安(合)	1974	8
张雪杉(合)	1976	5
张雅歌	1972	9
张雅歌	1973	3
张雅歌	1974	3
张雅歌(合)	1975	9
张永枚	1973	12
张永枚	1974	4
张永枚	1976	1
张永太	1972	6
张玉栋	1973	7
张玉钧	1975	8
张玉洲(合)	1974	8
张赞昆	1973	10
张赞昆	1974	1
张赞廷	1973	6
张赞廷(合)	1974	12
张赞廷	1975	1
张赞廷(合)	1976	3
张振福	1974	8
张志民(合)	1975	5
张子虎	1976	2
张子平(合)	1975	11
zhao		
赵葆华(合)	1973	6
赵长夫(合)	1974	4
赵大军(合)	1975	7
赵光涛	1973	7
赵贵忠	1972	8
赵贵忠	1973	3
赵国歧	1975	10
赵海峰	1972	6
赵建山	1974	2
赵建元	1974	3
赵军	1973	8
赵峻防	1974	7
赵峻防	1976	9
赵康元(合)	1972	5
赵克标	1974	4
赵连成	1975	11
赵连甲改编	1974	6
赵连甲改编	1973	5
赵连甲	1973	6
赵连甲	1974	5
赵连甲(合)	1974	7
赵连甲	1975	3
赵朴初	1973	1
赵朴初	1974	1
赵少竹	1974	8
赵树春(合)	1972	9
赵水明	1975	8
赵文元(合)	1975	4
赵祥明(合)	1975	7
赵站洲(合)	1975	9
赵政民	1973	3

赵志华	1973	11
赵志龙(合)	1973	5
赵志敏	1976	8
赵志荣(合)	1975	5
赵志田(合)	1973	12
赵宗藻	1973	10
zhe		
哲中	1972	12
哲中	1973	5
哲中	1976	3
zhen		
甄宝贵(合)	1974	10
振华(合)	1973	12
zheng		
郑成义(合)	1975	7
郑赤鹰	1973	3
郑赤鹰	1975	5
郑赤鹰(合)	1976	3
郑赤鹰(合)	1976	5
郑浩豪	1972	5
郑河	1975	10
郑怀盛	1975	12
郑坤祥	1974	4
郑磊	1974	5
郑黎(合)	1974	5
郑明东	1973	10
郑南	1973	5
郑文	1973	1
郑文科(合)	1974	6
郑向农(合)	1973	9
郑向农	1976	2
郑作良(合)	1974	2
征华(合)	1972	9
zhi		
志力(合)	1976	9
志龙(合)	1972	9
支祖山	1974	3
zhong		
钟爱群	1972	5
钟寒	1972	7
钟寒	1974	12
钟寒(合)	1975	10
钟寒(合)	1976	8
钟启昌	1975	8
钟声(合)	1972	10
钟同乐(合)	1975	9
钟缨	1974	5
钟志祥(合)	1976	3
仲伟方(合)	1972	5
仲兴泉(合)	1973	2
仲兆华(合)	1974	6
忠琴(合)	1974	2
众文	1973	7
众之	1974	1
zhou		
周葆华	1975	10
周城	1973	4
周道清	1972	11
周鹤	1975	5
周红兵	1972	9
周佳虎	1976	8
周立宪(合)	1972	5
周胜利	1975	12
周顺恺	1976	9
周泰安(合)	1975	1
周铁人	1973	7
周铁人	1975	4
周铁人	1976	7
周肖	1973	11
周肖	1973	11
周肖	1973	11
周肖	1973	11
周学孔(合)	1972	10
周学生	1973	3
周岩	1975	9
周毅民	1975	11
周永家(合)	1976	1
周永祥(合)	1975	8
周钟厚(合)	1974	11
周宗汉	1974	10

周宗奇	1974	3
zhu		
朱兵(合)	1975	10
朱炳初	1976	5
朱纯一	1973	6
朱春泽原作	1974	8
朱光斗(合)	1972	10
朱光斗(合)	1976	7
朱光斗	1976	8
朱光梅(合)	1973	12
朱谷忠(合)	1976	7
朱浒(合)	1975	7
朱家胜(合)	1975	11
朱经通	1975	10
朱经通(合)	1976	1
朱开法(合)	1973	2
朱乃正	1973	5
朱始俊(合)	1973	7
朱苏进	1974	2
朱苏进	1974	7
朱苏进	1976	7
朱万春(合)	1974	6
朱万春(合)	1975	7
朱万春(合)	1975	12
朱亚南(合)	1972	12
朱永祜(合)	1973	4
朱允文	1976	4
朱振声(合)	1975	12
朱振声(合)	1976	9
竹青(合)	1972	6
竹青	1972	11
zhuang		
庄正华(合)	1976	3
zhuo		
卓荣(合)	1974	3
zi		
梓慧(合)	1972	9
zou		
邹兵	1972	10
邹昌玉(合)	1975	2
邹仲平	1972	11
zuo		
左朝胜	1975	11
左凡	1972	6
左建协	1974	4
左齐	1975	11